

◎雙六 采を振つて遊ぶ一種の遊戯。◎てたて、勝つべき手段。◎とくまけぬべき、早くまけてしまふであらう。

ら起るものだ。」といった。賤しい下部ではあるが、聖人のいましめになつたことをいつたものだ。鞠でも、むつかしい所を蹴出して後、最早大丈夫と思ひ、心がゆるむと、必ず失敗するといふ話だ。  
◎「君子安而不危」とか「油斷大敵」とかいふ久遠の眞理を、奇抜な例を引いて、平易に説いたものである。

第一百段

雙六の上手といひし人に、そのてだてを問ひ侍りしかば、「勝たむとうつべからず、負けじとうつべきなり。いづれの手か、とくまけぬべきと案じて、その手をつかはさずして、一目なりとも、おそく負くべき手につくべし。」といふ。道を知れるをしへ、身を修め、國を保たむ道も、また、しかなり。

◎雙六の上手といひし人に、勝つべき手段を問ふたところ、「勝たうとしてうつてはならぬ。負けまいとしてうつべきである。どの手が、早くまけるであらうかと考へ、その手をつかはさないで、一目でも、おそくまける方の手をつかがよい。」といった。いかにも、その道を知つてゐる教である。一身を修め、一國を保つ道も、また、この通りである。

第一百一段

「圍碁、雙六好みて、あかしくらす人は、四重五逆にもまされる悪事とぞ思ふ。」と、あるひじりの申し、こと、耳にとまりて、いみじくおぼえ侍る。

◎「圍碁や雙六を好んで、徒に月日を送る人は、四重五逆にも勝つた、悪い事をしてゐるものと思ふ。」と、或高僧のいはれたことが、今でも耳に残つて、成るほどと思つてゐる。

◎勝負事に耽つて、光陰を徒費することがよくないといふことを、或高僧の言に託して、述べたもの。

第一百二段

明日は遠國へ赴くべしと、聞かん人に、心しづかになすべからむわざをば、人のひかけてむや。俄の大事をもちとなみ、切に歎くこともある人は、他の事聞き入れず、人のうれへよろこびをもとはず。問はずとて、などやと恨むる人もなし。されば、年もやうくたけ、病にもまつはれ、況や、世を

◎四重 佛教で、殺生、偷盜 邪淫 妄語を四重禁戒といふ。◎五逆 殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出身血を五逆罪といふ。

◎たけ 老い。◎まつはれ 罹り。

あつた  
あつた  
あつた

◎人間の儀式 人間社會に於ける百般の用事。◎去りがたからぬ のがれることが出来ないことばかりだ。◎もたしがたき 黙つて見て居られぬ。◎これをかたきとせば、これを必ずなさんとすれば。◎日暮れ途

も遁れたらむ人、また、これにおなじかるべし。

○ 明日から遠國へ旅行をするといふ人に、心靜かに、ゆる／＼なすべきことをいひかける人はない。俄の大事を行ひ、痛切に嘆くことのある人は、他人のことを聞いても、聞き入れず、他人の愁とか喜とかいふものをも、たづねてゐる餘裕はないものだ。してまた、それを、なぜたづねて來ないのかと、恨をいふ人もないのである。これと同じく、年もだん／＼老い、病氣にも罹つてゐる人、まして、世を遁れて居る人などは、世間の事を打棄て、置いても、人は、見逃してくれるものである。

人間の儀式、いづれの事か去りがたからぬ。世俗のもたしがたきに從ひて、これをかならずとせば、願もおほく、身もくるしく、心の暇もなく、一世は雜事のざざじ小節にさへられて、空しく暮れなむ。日暮れ途とほし。吾生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮義をも思はじ、この心をもたざらん人は、ものぐるひともいへ。現なし、情なしともおもへ。譏るともくるしまじ。譽むるとも聞きいれじ。

とほし、白樂天の詩の句に「日暮而途遠、吾生已蹉跎。」とある。◎蹉跎 時を失うて、ゆきつまるをいふ。◎放下 上げうち棄てる。◎うつないし 本心がない。

◎いかいばせむ しかたのないものだが。◎ことにはうち出で、言葉にいひあらはして。◎いひたはるゝ

○ 人間社會に於ける百般の用事といふものは、何れも已むを得ないものばかりで、のがれることが出来ないものである。随つて、世間の事を、黙つて見て居られずに、これを必ずなさうとすると、願も多くなり、身も苦しくなり、心の安まる暇もなくなり、雜事ざざじのつまらぬことに支へられて、一生涯を空しく過してしまふであらう。日が暮れて來たのに、前途はまだ遠遠であり、而も、自分の生涯は、既に時を失うて、何ともしかたがなくなるのである。この際、萬事を打捨て、修業するがよい。既に、かうなつた上は、世間の義理をも守らず、禮義をも考へないのである。この道理のわからない人は、或は、我を評して、狂人ともいふであらふし、人情がないとも思ふであらう。併しどんなに誹られても、苦しうない。また、譽められたつて耳をかすことばないのだ。

第百十三段

四十にもあまりぬる人の、色めきたるかた、おのづからしのびてあらむは、いかいばせむ、ことにうち出でて、男女おとこのこと、人の上をも、いひたはるゝこそ、にげなく、見苦しけれ。おほかた、聞きにく／＼、見ぐるしきこと、老人の、

いひ戯るゝ。○にげなく、年にも似合はず。○世のおぼえある人、高貴の人。○まつしき所、貧乏な家。○きらめきたる、華美にしてゐる。

○今出川のおほい殿、菊亭兼季。○ありす川、山城國葛野郡にある。○さい王丸

わかき人にまじはりて、興あらむと、ものいひるたる、數ならぬ身にて、世のおぼえある人を、隔へだてなきさまにいひたる、まつしき所に酒宴このみ、客人きやくじんに饗應きやうおうせむときらめきたる。

四十歳を越して居る人で、色氣のあるのは、見つともない。それも、自分で隠してゐるのなら、まだ恕すべき點があるけれども、公然と言葉にあらはして、男女のことや、人の身の上のことなどを、いひ戯れるのは、年にも似合はず、見苦しいものだ。凡そ、世の中で聞きにくく、見苦しいのは、老人が若者に交り、面白がらせようとつとめて、しゃべつてゐること、いやしい身分の者が、高貴な人と、隔てのいひやうにいひふらすこと、貧乏な家のくせに、酒宴を好み、華美にかざつて、客人を饗應することなどである。

この段は、身の程を知れ。といふ意味を諭し教へたものであるが、こゝに非難してあるやうなことは、よく世間に見る例である。

第一百四段

今出川いまでがはのおほい殿、嵯峨へおはしけるに、ありす川のわたりに、水の流れたる所にて、さい王丸、御牛をおひたりければ、あがきの水、前板まへいたまで、さとかゝりけるを、爲教ためおし、

欠

# 欠

芝居でも見るやうな氣がする。

## 第一百十六段

寺院の號、さらぬよろづの物にも、名をつくること、昔の人は、少しも求めず、たゞありのままに、やすくつけるなり。この頃は、深く案じ、才覺をあらはさむとしたるやうに聞ゆる、いとむづかし。人の名も、目なれぬ文字もじをつかむとする、益なきことなり。何ごとも、めづらしきことをもとめ、異説を好むは、淺才の人の、必ずあることなりとぞ。

〔註〕 寺院の名や、その他、いろ／＼な物に、名をつけるに當り、昔の人は、少しも奇を求めないで、ありのままに、平易につけたものである。然るに、この頃は、深く考へ、學問のほどをあらはさうと、してゐるやうに思はるゝのは、どうも氣障である。人の名に、見なれない、むづかしい文字をつけようとするのは、無益なことである。何事でも、珍しい事を求め、異説を好むといふことは、才の足りない人間が、大抵することであるさうな。

〔譯〕 物名に關することを材料として、自然で、平易なのをよしとする例の持論を述べたものである。

◎さらぬ さうでない。◎少しも求めず 少しも奇を求めぬ。◎案じ 考へ。◎才覺 學問。◎むづかしい 氣障である。◎つかむとす る つけようとする。

◎高くやむことなき人 高貴な人。◎そらごとする人 嘘をいふ人。◎くすし 醫者。

◎第百十七段

友とするにわるきもの七つあり。一には高くやむことなき人、二には若き人、三には病なく身つよき人、四には酒をこのむ人、五には武く勇める人、六にはそらごとする人、七には慾ふかき人。善き友三つあり。一にはものくるゝ友、二にはくすし、三には智恵ある人。

友として交るのに、悪いものが七つある。第一には高貴な人であるが、これ、自然に、へつらふやうな傾向を生ずるからである。第二には若い者だが、これは、過に陥り易いからである。第三には無病で頑健な者だが、こんな人は、同情が乏しいからである。第四には酒を好む人、いろくゝな失態を演ずるからである。第五には血氣にはやる人、争を生じ易いからである。第六には嘘をつく人、世間の信用を失ひ、種々不都合が出来るからである。第七には慾の深い人、自分の爲ばかりはかつて、人の爲や世の中の爲を思はないからである。又、交つてよい友に三つある。第一には物くれる人、これは、利欲の念が薄くて、同情に富んで居るからである。第二には醫者、これは自分の身を衛つてくれるからである。第三には智恵ある人、いろくゝ忠告又は指導をしてくれるからである。

欠

# 欠

鎌倉の海でとれる鯨魚といふ魚は、鎌倉邊では、何より結構なものとして、この頃珍重せられるものである。それも、鎌倉の年寄の話では、「この魚は、自分たちの若かつた頃までは、貴人の前に出ることはなく、頭などは下部も食はず、切つて棄てたものであつた。」といふことである。こんな下等な魚でも、世が末になつて來ると、上流の家庭にまでも、はいりこむものである。

江戸時代に、非常に賞味せられた鯨魚は、既に、南北朝時代に於ても、珍重がられて居たといふことが、この段の記事でわかるのである。兼好が鯨魚を非難してゐるのは、例の尙古的趣味から來ることであらう。

## 第二百十段

唐のものは、藥の外はなくとも事かくまじ。書どもは、この國に多くひろまりぬれば、書きもうつしてむ。もうこし船のたやすからぬ道に、無用のものどものみとり積みて、所せくわたしてもてくる、いとおろかななり。「遠きものを寶とせず。」とも、また「得がたき寶をたふとます。」とも、ふみにも侍るとかや。

支那のものは、藥の外は、なくても不自由はあるまい。書物などは、我が國

◎たやすからぬ道 航海が容易でなかつた。◎所せくわたしてもてくる 澤山に輸入してくる。◎遠きものを寶とせず 尙書の旅熬篇に「不寶遠物、則遠人格。」とある。◎得がたき寶をたふとます 孝子經に「不貴難

得之貨、使民不爲盜。」とある。

◎いかゞはせむ 致しかたもない。◎ことさらに 特に。

にも澤山に廣まつてゐるから、書き寫すことが出来る。唐船が難儀な航路を、無用の物を澤山に積んで、渡つて来るのは、馬鹿氣た話である。「遠きものを寶とせず。」とも、「得がたき寶を費ます。」とも、書物に書いてあるさうだ。

第二百一段

養ひ飼ふものには、馬牛、繋ぎくるしむること、

いたましかれど、なくてはかなはぬものなれば、いかゞはせむ。犬はまもり防ぐつとめ、人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど、家ごとにあるものなれば、ことさらに求め飼はずとも、ありなむ。

◎人は、第一に馬や牛を飼ひ養ひ、これらを繋ぎ苦しめてゐるのは、かはいさうであるけれども、馬や牛は、是非必要なものであるから、致し方がない。犬は家を守り、盜賊を防ぐつとめ、人にもまさつてゐるから、必ず養ふべきものである。併し、これは、どこの家にも飼つてゐるものであるから、特に、自分の家へ飼はずともよからう。

◎心あらむ人 なさげある人。◎生を苦しめ 生物を苦しめ。◎桀紂 夏の桀王殷の紂王、共に殘忍暴虐の人。◎王子猷 晋の人で、名は徽之、子猷はその字である。◎逍遙 ぶら／＼遊びまはる。◎めづらしき鳥 云々 尙書の旅熬篇に、「珍禽奇獸不育于國。」とある。

その外の鳥獸、すべて用なきものなり。はしる獸は檻にこめ、鎖をさされ、飛ぶ鳥は翼をきり、籠に入れられて、雲を戀ひ、野山をおもふ愁、やむ時なし。そのおもひ、わが身に當りて忍び難くば、心あらむ人、これを樂まむや。生を苦めて目を喜ばしむるは、桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林に樂ぶを見て、逍遙の友としき。捕へ苦めたるにはあらず。およそ、「めづらしき鳥、あやしき獸、國に養はず。」とこそ、書にも侍るなれ。

◎その外の鳥獸どもは、一切無用のものである。走る獸は檻に閉籠め、鎖をさされ、飛ぶ鳥は翼をきり、籠に入れられて、雲を戀しく思ひ、野山を慕はしく思ふ心配が、暫くもやむ時がない。さて、斯様な苦しい思を、我が身にひきくらべて見て、堪へがたくかはいさうに思つたら、なさげある人は、鳥獸を檻や籠に入れて、楽しみにするといふことばあるまい。生物を苦しめ、自分の目をよるこばしむるのは、桀紂の如き暴君の心と同然である。王子猷も鳥を愛したけれども、それは、鳥が林の中で楽しむのを見て、逍遙の友としたので、捕へ苦しめたのではない。凡そ、「めづらしき鳥、あやしき獸をば、國に養はず。」と、書物にも書い

◎聖の教 聖賢の教で、儒教をさす。◎むねとす 専門とする。◎忠孝のつとめ 小學に「事親者、亦不可不知賢。」とある。◎六藝 周禮に「禮樂射御書數、謂之六藝。」とある。◎食は人の天なり 書經に「夫食爲「人天」とある。人の命をつなぐものであるから、斯様にいつたのである。

てある。  
 動物を檻や籠に閉ぢこめて楽しむのは、人情にもとるゆゑ、これらは、自然のまゝにして、愛護すべきものであるといふ趣意を説いたもので、消極的に見ると、動物虐待防止論、積極的に見ると、動物保護論ともいふべきものである。

第二百二十二段

人の才能は、書あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。つぎには手かくこと、むねとすることはなくとも、これを習ふべし。學問にたよりあらむ爲なり。つぎに、醫術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝のつとめも、醫にあらずばあるべからず。つぎに、弓射、馬に乗ること、六藝に出せり。必ず、これをうかゞふべし。文武醫の道、まことに缺けてはあるべからず。これを學ばむをば、いたづらなる人といふべからず。つぎに、食は人の天なり。よく、味を調へ知れる人、大なる徳とすべし。つぎに細工、よろづの用多し。

人の才能は、經書に精通し、聖賢の教を知つてゐるのが第一である。その次

◎多能は君子の恥づるところ 論語に「孔子之吾少也賤、故多能鄙事、君子多乎不多。」とある。◎絲竹、管絃即ち音楽をいふ。◎幽玄、幽微玄妙。◎おろか、おろ

この外のこといも、多能は、君子の恥づるところなり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣、これを重くすといへども、今の世には、これをもちて世を治むること、やうやくおろかなるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益多きにかざるが如し。



そか。

多能は君子の耽つるところであるから、この外のことば、必ずしも必要ではない。詩歌にたくみに、音楽に妙なるは、幽玄の道だから宜しい。昔は、君臣共に詩歌音楽を重んじたけれども、今の世には、之を治世の具に使ふことは、だんだんとすたれて来たやうである。たとへて見ると、黄金は非常に貴いものであるけれども、鐵の實用多きに如かざるやうなものである。

修養問題を説いたものであるが、儒教の主張に重きを置いた傾向がある。また、醫術といふことを加へて居るのは、醫術の閉けなかつた當時にありては、大いにその必要があつたからであらう。

第二十三段

無益の事をなして、時をうつすを、愚なる人と

○僻事 まちがつた事。○  
誰の人が足りないといせむど  
んな人でも足りないといはな  
からう。

も、僻事する人ともいふべし。國のため、君のために、止むことを得ずしてなすべきことおほし。そのあまりの暇、いくばくならず思ふべし。人の身に止むことをえずして營む所、第一に食物、第二に着物、第三に居所なり。人間の大事、この三つにはすぎず。飢ゑず、寒からず、風雨におかされずして、しづかに過すを樂とす。たゞし、人みな病あり。病に冒されぬれば、

その愁忍びがたし。醫療をわするべからず。藥を加へて、四つの事もとめ得ざるを貧しとす。この四つかけざるを富めりとす。この四つの外をもとめ營むを驕とす。四つの事儉約ならば、誰の人が足らずとせむ。

無益の事をして、時間を徒費する人を、愚なる人とも、僻事する人ともいふべきである。國のためや、君のために、是非しなければならぬことが、幾らもあるから、その餘暇といふものは、何程もないものと思はなければならぬ。人の身に已むを得ずして營むべきものは、第一に食物、第二に着物、第三に居所である。人間に取りて、最も大切なことは、この三つに過ぎない。飢ゑず、寒からず、風雨に障されなくて、安全に過すのが、人間の樂じや。但し、人には病氣といふものがあつて、これに罹ると、その心配苦痛が堪へ難いのであるから、醫療を忘れてならぬ。それで、食、衣、住に、この藥を加へた四つの事を求めることが出来ないのを貧しい者とする。この四つのことに不自由をしないのを富める者とする。この四つの外に、なほ或物を求むるのを驕とする。四つの事を儉約して行くならば、どんな人でも、不足はなからう。

生活を簡易にして、必要以外のことには、決して贅澤をするなどいふ趣意を

◎是法法師、念阿の弟子で、歌人としても名のつあたる人。◎浄土宗にはちず、學問では浄土宗の他の人にまけない。◎學匠をたてず、學問をふりまはして、人の師匠などにならない。

◎人におくれて、人に死なれて。◎請す、招待する。◎いみじくて、甚だありがたくて。◎導師、葬式法事などの時に、法儀の主となる僧。◎何とも候へ、何にしても。

説いたものである。

第二百二十四段 是法法師は、浄土宗にはちずといへども、學匠をたてず、たゞ、明暮念佛して、やすらかに世を過すありさま、いとあらまほし。

是法法師は、學問では、浄土宗の學僧中、誰にもまげなかつたけれども、敢へて、人の師匠などにならず、たゞ、明暮、念佛をして、安らかにこの世を過して行かれたが、人はかうあつてほしいものだ。

世間の俗事に囚はれないで、専心修業する高僧の態度をほめたものである。

第二百二十五段

人におくれて、四十九日の佛事に、あるひじりを請じ侍りしに、説法いみじくて、みな人、涙を流しけり。導師かへりて後、聽聞の人ども、「いつよりも、ことに、けふは、尊く覺え侍りつる。」と感じあへりし返事に、あるものゝいはく、「何とも候へ、あれほど、唐の狗に似候ひなむ上は。」といひたりしに、あはれもさめて、をかしかりけり。さる導師の譽めや

うやはあるべき。

人に死なれて、四十九日の佛事に、或高僧を招待したところ、説法がひどくありが、かつたので、聞く人は、皆感涙を流した。導師が歸つた後、聽聞してゐた人々が「いつものよりも、今日の説法は、別してありがたかつた。」と感心しあつてゐると、或人が「何にしても、あれほど、唐の狗によく似て居られるからは、ありがたい。」といつたので、興もさめて、笑止千萬であつた。導師をほめるのに、こんな無法ないひ方といふものはあるものでない。

又、「人に酒すゝむるとて、おのれ、まづたべて、人に強ひ奉らむとするは、劍にて人を斬らむとするに似たることなり。二方に及つきたるものなれば、もたぐる時、まづ、わが頭を斬る故に、人をば、え斬らぬなり。おのれ、まづ酔ひ臥しなば、人はよもめさじ。」と申しき。劍にて斬り試みたりけるにや、いとをかしかりき。

この人が、また、「人に酒をすゝむるのに、自分が先づ飲んで、それから、人に強いて飲ませようとするのは、丁度、劍で人を斬らうとするやうなものである。

◎え斬らぬ、斬ることが出来ない。◎めさじ、召しあがらぬ。

◎ばくち 賭博。◎残りな  
くうち入れむ 残りの金を  
皆かける。◎あひ手 勝つ  
た方の相手。◎立ちかへり  
勢をもりかへし。

劔には、両方に双がついて居り、もたぐる時分に、先づ、自分の頭を斬る恐れがあるから、人を斬ることが出来ないのである。これを同じく、自分がまづ酔ひ臥したら、人ばよも飲むまい。」と申したが、この人は、劔で人を斬つて見たことがあるのかしら、どうもをかした話だ。

この段は、二節に分れてゐるが、どちらも、奇抜な話で、おもしろい。

第二百二十六段

ばくちのまけ極りて、残りなくうち入れむとせむに、あひ手はうつべからず。立ちかへり、つゞけて勝つべき時の至れることを知るべし。その時を知るを、よきばくちといふなりと、あるもの申しき。

ばくちをうつ際、一人がまけつゞけて、残りの金をすつかりかけようとする時は、勝つた方の相手は、うつてはならぬ。そんな場合には、負けた方が、勢をもりかへし、つゞけて勝つべき時期が来てゐるといふことを、承知すべきである。斯様な時期を見ぬのが、よきばくちであると、或人がいつた。

昔は、ばくちといふものも、今日のやうに、罪惡とは見做されてゐなかつたので、斯様な例を取り、機を見るといふことの大切なる所以を説いたのである。

第二百二十七段

あらためて益なきことは、あらためぬをよしとするなり。

改めても無益なことは、改めぬ方がよいのじや。簡單で平凡だが、味のある言葉である。

第二百二十八段

雅房大納言は、才かしく、よき人にて、大將にもなさばやとおぼしける頃、近習なる人、「たゞ今、あさましきことを見侍りつ。」と申されければ、「何ごとぞ。」と問はせ給ひけるに、「雅房卿、鷹にかはむとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ。」と申されけるに、「うとましく、悪くおぼしめして、日頃の御氣色もたがひ、昇進もし給はざりけり。さばかりの人の、鷹をもたれたりけるは、思はずなれど、犬の足は、あとなきことなり。そらごとは不似なれども、かゝることを聞かせ給ひて、悪ませ給ひける、君の御心は、いと尊きことなり。」

◎雅房大納言 後土御門太  
政大臣實定の子。◎才か  
しく、才智もあり。◎よき  
人、物の分つた人。◎大將  
になさばやとおぼしける頃  
近衛大將にもしてやらう  
と後宇多上皇がおぼしめし  
た頃。◎あさましきこと  
あきれたこと。◎うとまし  
くいやらしく。◎御氣色  
御機嫌。◎さばかりの人  
これほどの賢人。◎思はず

ないど、意外であるが。◎不便、不都合。

◎畜生残害、畜生が互に食ひ争ふをいふ。◎有情、生物。◎慈悲、なさげ。あはれみ。◎人倫、人のたぐひ。

雅房大納言は、才智もあり、ものゝわかつた人で、後宇多院も、近衛の大將にしてやりたいとおぼしめした時分に、近習の者が「只今、あきれたことを見ました。」と申しあげたので、院は「何事じや。」と御尋ねなされると、近習の者は、「雅房卿が、鷹の餌にせんがために、生きた、犬の足を切られたのを、中垣の穴から見ました。」とお答へ申した。すると、院は、いまはしく、悪くらしい思し召して、日頃の御機嫌もかばり、雅房を大將に昇進させることも、やめになされた。雅房ほどの賢い人が、鷹をもつてゐられたといふことは意外であるが、犬の足を切られたといふことは、あとかたもない偽である。嘘をいつたのは不都合であるが、斯様に残忍酷薄なことをお聞きになつて、悪ませられた院の御心は、誠に有難いことである。

大方、生けるものを殺し、いためたゝかはしめて、遊び樂まむ人は、畜生残害のたぐひなり。よろづの鳥獸、小き蟲までも、心をとめて、ありさまを見るに、子を思ひ、親をなつかしくし、夫婦をとまひ、ねたみ怒り、欲多く、身を愛し、命を惜めること、ひとへに、愚痴なる故に、人よりもまさりて甚し。かれ

に苦みを與へ、命を奪はむこと、いかでかいたましからざらむ。すべて、一切の有情を見て、慈悲の心なからむは、人倫にあらず。

およそ、生物を殺すとか、又は、それをいたため闘はしめて、遊び樂しむ人は、畜生残害のたぐひである。いろ／＼な鳥や獸や小さい蟲に至るまで、心をとめてその様子を見ると、人と同じ様に、子をかばひよく思ひ、親を懐しく思ひ、夫婦相伴ひ、猜んだり、怒つたり、慾ばつたり、自分の身を大切にし、命を惜しむこと、ひたすら、愚痴なものだけに、人間にもまして、一層甚しいのである。それであるから、斯様な生物に苦しみを與へ、命を奪ふといふことは、まことに、かあいさうなことである。すべて、一切の生物を見て、慈悲の心のないものは、人間ではないといつてもよろしい。

鳥獸などの生物にまで、慈悲の心を及ぼして、愛護してやらなければならぬといふことを説いたものである。

第二百二十九段

顔回は、志、人に勞をほどこさじとなり。すべて、人を苦め、ものを虐ぐること、いやしき民の志をも奪ふべ

◎顔回、孔子の高弟で、十哲の一人、世に亞聖と稱せ

らる。○人に勞をほどこさじ。人に勞苦をさせまい。論語に「子曰、蓋各言爾志、顔淵曰、願無伐善、無施勞。」とある。○虚ぐるむ。こたらしい目にあはせる。○いとけなき、いとけなき。○おとなしき人、大人。

○虚妄、むなしき妄念。○實有の相に着す、現實の

からず。又、いとけなき子をすかし、おどし、言ひ辱しめて、興することあり、おとなしき人は、まことならねば、事にもあらず思へど、幼き心には、身にしみておそろしく、恥しく、あさましきおもひ、誠に切なるべし。これをなやまして興すること、慈悲の心にあらず。

○顔回は、他人に勞苦をさせまいといふ心掛を持つてゐた。すべて、人を苦しめたり、物をむこい目にあはせたりするのは宜しくないことである。賤しい人民の志でも、それを無理に枉げさせるといふことは出来ない。また、幼い子供をすかしたり、おどしたり、いひはづかしめて、面白がる人がある。大人は、心が眞實でないから、そんなことをされても、何とも思はないけれども、子供の心には、それを眞にうけて、身にしみて恐しく、恥づかしく、いやに思ふ心が、痛切であらう。こんな子供を憐れまして面白がるのは、慈悲の心があるものとは思はれない。おとなしき人の、喜び、怒り、悲び、樂むも、皆虚妄なれども、誰か實有の相に着せざる。身を破るよりも、心をいたましむる

形に心をとめる。○薬を飲みて云々、文選、嵇康の養生論に「夫服藥求汗、或有弗獲、而愧情一集、澳然流離。」とある。○凌雲の額をかきて、白頭の人となる。心配は身を害ふことが甚しいといふ例で、三國史に「魏明帝立、凌雲觀、誤先釘榜、乃以籠盛、章誕、輒輻引上書之、去地二十五丈、既下、鬚髮皓然、還語子弟、直絶此法。」とある。章誕は、當時の有名なる能書家である。

○おのれを枉げ、自分の意

は、人を害ふこと、なほはなはだし。病をうくる事も、多くは心よりつく。外より來る病はすくなし。薬を飲みて汗を求むるには、効能なきことあれども、一旦恥ぢ恐るゝことあれば、かならず汗を流すは、心のしわざなりといふことを知るべし。凌雲の額をかきて、白頭の人となりしたためしなきにあらず。

○大人が、喜んだり、怒ったり、悲しんだり、樂しんだりするのも、皆、むなしき妄念から來たことであるけれども、それをいつはりとも思はないので、現實の形に心をとめるのである。心を苦しめることは、身を傷けるよりも、人を害ふことが甚しい。病氣でも、大抵、心から來るもので、外から來る病氣は少い。だから、薬を飲んで汗を出さうとしても、汗の出ないことが、よくあるけれども、一度、心に恥ぢ恐るゝことがあると、きつと、汗が流るゝのは、心のしわざであるといふことが知らるゝ。かの凌雲の額を書いて、怒ち、頭髪が白くなつたといふ實例もあるのである。

○この段の前節では仁慈の心を説き、後節では心勞のことを述べたものである。第三百十段、ものに争はず、おのれを枉げて、人に従ひ、わ

志をまげて。○わが身を後にして云々。論語に、「仁者己欲立而立人、己欲達而達人。」と見え、老子經にも「欲先民、必以身後之。」とある。

○善にはこらず。論語に「願無伐善。」とある。○大

が身を後にして、人を先にするにはしからず。

よろづの遊にも、勝負を好む人は、勝ちて興あらむためなり。おのれが藝のまさりたる事を喜ぶ。されば、負けて興なく覺ゆべきこと、又、知られたり。われ負けて、人を喜ばしめむと思はば、更に遊の興なかるべし。人に本意なくおもはせて、わが心を慰まむこと、徳に背けり。

○物事を人と争はず、自分の意志を屈して、人のいふことに従ひ、自分の身のことは後にし、人のことを先にするがよい。いろくの遊戯にも、勝負を好む人は、勝ちて愉快を得んがためである。自分の藝のまさつてゐることを悦ぶ半面に於ては、先方が、負けて、不快に思ふであらうといふことも、知らるゝ筈である。自分が負けて、人を喜ばせてやらうと思つたら、更に、遊戯の興味はないのであらう。他人には、つまらない思をさせて、自分だけ慰まうとするのは、徳義に背いたやり方である。

むつまじき中に戯るゝも、人をはかり欺きて、おのれが智の勝りたることを興とす。これまた禮にあらず。されば、はじめ興

なる職。高位高官。

宴より起りて、長きうらみを結ぶ類おほし。これ皆、あらそひを好む失なり。人に勝らむことを思はば、學問して、その智を、人にまさらむと思ふべし。道を學ぶとならば、善にはこらず、輩に争ふべからずといふことを知るべき故なり。大なる職をも辭し、利をも捨つるは、たい、學問の力なり。

○睦しい間柄の人と戯るゝ際でも、人をはかり欺いて、自分の才智の勝れてゐることを愉快とするのは、これまた、禮儀にかなつてゐない。こんなことで、はじめは、興宴などから起つて、長き恨を結ぶやうなことがよくある。これ等は、皆、争を好むところから起る失敗である。

人に勝らうと思つたら、學問をして、智識の方面で、人を凌がうと思ふがよい。道を學ぶことにしたら、善にはこつたり、朋輩と争つたりしてはならぬといふことを知つてゐる譯である。場合によつては、高位高官をも辭し、利益をも捨て、願みないといふことは、學問をしたお蔭で出来ることである。○禮儀の尊ぶべき所以を説いて、物に争ふといふことを戒め、若し、強ひて争ふとならば、一に學問を修めて、智徳の上で争ふがよいといふ趣意を明らかにし

○貧しきものは云々 曲禮に「貧者不以貨財禮、老者不以筋力禮」とある。

たものである。

第百三十一段 貧しきものは、財をもて禮とし、老いたるものは、力をもて禮とす。おのが分を知りて、及ばざる時は、すみやかにやむを智といふべし。許さざらむは、人のあやまちなり。分を知らずして、しひて勵むは、おのれがあやまちなり。貧しくて、分を知らざれば盗み、力衰へて、分を知らざれば、病をうく。

貧しいものは、財貨を用ひて、禮儀をつくさうとし、老人は、力役して、禮儀をつくさうとするが、ともに、つまらぬ話だ。自分の自分を知つて、とても出来ないやうなときには、直ちに、それをやめるのが利口だ。若し、斯様な場合に、世間の人許さなかつたら、それは、許さない方が悪い。自分の身分をも辨へないで、強ひて勵むのは、自分のあやまちである。貧しいのに、その分を知らないで、財を用ふると、盗人になり、力が衰へて居るのに、分を知らないで、力をつくすと、病人になつてしまふのである。

禮儀といふのは、人の分によつて、之をつくすべき方法程度が違ふのであるから、人は、その分に應じて、身を處し、事を行はなければならぬといふことを説いたものである。

第百三十二段 鳥羽のつくり道は、鳥羽殿たてられて後の名にはあらず、昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の聲、甚だ殊勝にして、大極殿より鳥羽のつくり道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや。

鳥羽のつくり道は、鳥羽殿が建てられてから後につけた名ではない、昔からの名である。元良親王が、元日に慶賀を申しあげられた聲が、非常によく響いて、大極殿から、鳥羽のつくり道まで聞えたといふことが、李部王の記録に書いてあるさうだ。

故實趣味からの記事。

第百三十三段 夜のおとやは、東御枕なり。おほかた、東を枕として、陽氣をうくべき故に、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕、常のことなり。白川院は北首に御寢なりけり。北はいむ事なり。又伊勢は南なり、太神宮の御方を、御あ

○鳥羽 山城國紀伊郡にある地名。○鳥羽殿 白河院が應徳三年に建てられた、仙洞御所。○元良親王 陽成天皇第一の皇子。○奏賀の聲 元朝に群臣が慶賀を申し上げる聲。○殊勝にして、すぐれて聲がよく。○李部王の記 醍醐天皇の皇子、式部卿重明親王の著はされた記録、李部といふは式部の唐名。○夜のおとい 天皇の御寢所。○寢殿のしつらひ 昔

の御殿づくり。◎御あとの御足の方。◎たつみ 東南の中間をいふ。

◎高倉院の法華堂 高倉天皇を葬つてある、山城國愛宕郡清閑寺の法華堂。◎三昧僧 法華三昧を修する僧。三昧とは、心を静めて、その事に専念するをいふ。◎律師 僧官。◎うとましき

とにせさせ給ふこと、いかゞと、人、申しけり。但し、太神宮の遙拜は、たつみに向はせ給ふ、南にはあらず。

天子の御寢所は、東の御枕である。大方、東を枕とすれば、陽氣をつけるといふので、孔子も、東を枕とせられた。寢殿のつくり方は、東枕の外、南枕にせられるのが普通である。白河院は、北枕に御寢なつた。北は、一般に忌まれてゐる。又、伊勢は南にある。太神宮の方へ御足をむけられることは、どんなものであらうかと、人が申した。但し、太神宮を遙拜せられるには、東南方に向はれる。眞南ではない。

有職公事趣味から、方向のことを説いたもの。

第三百三十四段

高倉院の法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふもの、ある時、鏡を取りて、顔を、つくづくと見て、わががたちの見にくく、あさましきことを、あまりに心うくおぼえて、鏡さへうとましきこゝちしければ、その後、長く、鏡を恐れて、手にだに取らず、更に、人に交ることなし。御堂のつとめばかりにあひて、こもりゐたりと、聞き侍りしこそ、あり

欠



# 欠

◎故法皇 花園天皇。◎い  
ろくを いろくの食物  
な。◎功能 食物のきまめ。  
◎本草 藥物の書。◎六條  
の故内府 内大臣源有房。  
和漢の學に通ぜし人。◎今  
はさばかりに候へ。今はそ  
れだけにしておけ。◎とい  
かになりて どつと笑ひ崩  
れて。

御のまわりけるに、「今まわり侍る供御のいろいろを、文字も功  
能も尋ね下されて、そらに申し侍らば、本草に御覽じあはせら  
れ侍れかし。ひとつも、申しあやまり侍らじ。」と、申しける時  
しも、六條の故内府、まわり給ひて、「有房、ついでに、もの習  
ひ侍らむ。」とて、まづ、「しほといふ文字は、いづれの偏にか侍  
らむ。」と、問はれたりけるに、「土偏に候ふ。」と申したりければ、  
「才のほど、既にあらはれにけり。今は、さばかりに候へ。ゆか  
しきところなし。」と申されけるに、◎とよみになりて、まかり出  
でにけり。

○ 醫師あつしげといふものが、花園院の御前に参上してゐるとき、たましく御  
膳が供へられたのを見て、「只今参りましたる御膳部の、いろくな食物につい  
て、その名稱の文字でも、功能でも、御尋ね下さらば、私儀、そらで御答へ申し  
上げませうほどに、本草とひき合せて御覽遊ばせ。一つとして、間違は致さぬつ  
もりで御座います。」といつてゐるとるに、六條の内大臣有房が参られ、之を聞い  
て、「この有房も、序に、物を習ひ申さう。まづ第一に、しほといふ文字は、どん

◎くまなき くもりなく澄みわたる。◎雨にむかひて月をこひ 則詠に源順の「對雨戀月序」とある。◎たれこめて云々 古今集、藤原因香の歌に「たれこめて、春のゆくへも知らぬまに、待ちし櫻もうつるひにけり。」とある。たれこめて

な偏であつたか。」と問はれたところ、あつしげは、「土偏であります。」と申したので、「貴殿の才智のほども、大抵わかつた。もうこれで淨山だ。ちつとも、えらいところはないぞ。」といはれた。一同はこの様子を見て、どつと笑ひ崩れたので、あつしげは、とうく御前を逃出してしまった。

◎これも、前段と同じく、高慢過言をして失敗した例である。驥の字は、俗に盃と書くが、これは當字である。あつしげは之を知らないで、土偏といひ、失敗したのである。

第百三十七段

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものか  
は、雨にむかひて月をこひ たれこめて春のゆくへ知らぬも、  
なほあはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしほれたる庭などこそ、見どころおほけれ。歌のことばがきにも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ。」とも、「さばる事ありてまからで。」なども書けるは、「花を見て。」といへるに劣れることかは。花のちり、月の傾くを慕ふならひは、さることなれど、ことにかたくなる人ぞ、「この枝、かの枝、散りにけり。」

今は見所なし。」などはいふめる。

花は満開の折だけ、月はくもりなく澄みわたつてゐる時だけを見るべきものときまつたものではない。雨の夜に、月があつてほしいと思ひ、家の中に引籠つて、春の過ぎ行くのも知らないで居るのも、また、趣があつて、おもしろい。今にも咲きさうな蕾の梢や、花が散り萎れてゐる木立の庭なども、見どころの多いものである。歌のことばがきにも、「花見に行つたところ、既に散つてゐたので。」とか、「差支があつて、花見に行かないで。」など書いてあるのは、「花を見て」と書いてあるのにも劣らず、趣味がある。花が散り、月が傾くのを慕ふならはしは、もつともなことではあるが、殊に、趣味を解しない無骨者が、「この枝も、かの枝も、花が散つてしまつたから、最早、見どころがない。」などいふやうである。

萬の事も、はじめをばりこそをかしけれ。男女の情も、偏にあひ見るをばいふものかは。逢はでやみにしうさを思ひ、あだなるちざりをかこち、永き夜をひとりあかし、遠き雲井をおもひやり、淺茅が宿にむかしを忍ぶこそ、色このむとはいはめ。

物事は、全盛期よりも、始や終の方の趣がある。戀愛の情でも、ひたすら

といふのは、簾などを垂れて、引籠つてゐるをいふ。◎咲きぬべきほどの梢、花が咲きさうな梢。◎見どころ、よいと認めるところ。◎歌のことばがき、歌をよむときの心持や、様子などをのべたはしがき。◎まからで、花見に行かないで。◎かたくななる人、趣味を解しない無骨者。◎あだなるちざり、あだになつた戀。◎雲井、空のことばをいふが、遠方の意に用ふ。◎淺茅が宿、茅が生ひ茂つて荒ればた宿で、昔

の戀人の住居をさしたるの。

◎望月 十五夜の月。◎千里の外まで、遠くまでの意。白樂天の詩に「三五夜中新月色、二千里外故人心。」とある。◎椎柴 椎の木の新といふことなるが、椎の木の意。◎いらがし 白樫。◎心あらいむ友 趣味を解する友。

一人で見ることばかりをいふものでない。逢ふことが出来なかつたつらさを思ひ、あだになつた戀を嘆き、長い夜をひとり寝てあかし、遠い空のあなたを思ひやり、荒れはてた宿に、親しくしてゐた昔の人のことをしのぶといふやうなのが。ほんとうに、情を解するものといふべきである。

望月の隈なきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心深う。青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影。うちしぐれたる、むら雲がくれのほど、又たくあはれなり。椎柴、しらがしなどの、ぬれたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらいむ友もがたと、都こひしうおぼゆれ。

満月が冴えわたつてゐるのを、ひろくしたところで眺めるよりも、曉ちかくまで待ちあぐんで、やつと出た月を見る方が、おぼと趣がある。深山の杉の梢にかゝつてゐる月は、青みを帯びてゐるやうで風情がある。晴雨がしきつてゐる時分、むら雲の間に隠見する月も、何ともいへぬおもしろ味がある。椎の木、白樫などの、濡れたやうに、つやのある葉の上に、きらりと照り輝いてゐる月影は、

◎さのみ さうばかり。◎わやの中ながらい 杜甫の詩に「今夜鄜州月、閨中唯獨看。」とある。

◎よき人 趣味を解する上流の人。◎おほざりなり おろそかである。◎色こく しつこく。◎あからめもせず わきめもふらず。◎おもしろくて 見つめて。◎心なく すげなく。

身にしみて趣がゆかしくて、こんなとき風情を解する翳翳でもあつてほしいと思ふと、俄かに、都の空が戀しうなつて来る。

すべて、月花をば、さのみ、目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも。月の夜は、ねやの中ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

すべて、月や花は、さう、目だけで見るべきものではない。春は、家から外へ出なくとも、心の中で花の風情を思ひ、月の夜は、閨の中にありながらも、外界の月景色を思ひ浮べるのが、おもしろいではないか。

よき人は、ひとへにすけるさまにも見えす、興するさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こく、よろづはもて興ずれ。花のもとには、ねちより、立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては、大きな枝、こまろなく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおり立ちて、跡つけなどよろづのもの、よそながらに見ることなし。

◎祭見しさま 賀茂の祭を見物する様子。◎めづらかかりき 奇妙であつた。◎見ごと 見ること。◎人をおく 見張の番人を置く。◎わたい候ふ お通りです。◎とあいかいり あゝだ、かうだ。◎ゆいしげなるは物のわかつてゐる人は。◎

◎趣味を解する上流の人は、何事でも、ひたすらに好むやうにも見えない。物に興味を感じる様子でも、驚揚である。片田舎の趣味を解しない者共が、しつこく、何でも面白がるのである。こんな人は、花の下にれち寄り、わき目もふらず見つめて、酒を飲んだり、連歌をしたりして戯れ、はては、大きな枝を、すげなくも折り取るやうなことをするし、又、泉でもあると、手足をその中へつけてかきまぜ、雪が降ると、下り立つて歩き廻り、足跡だらけにするといふ風で、何でも、わきから眺めるといふことをしないのである。

さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見ごと」とおそし。そのほどは、棧敷不用なり。」とて、奥なる屋にて、酒飲み、ものくひ、圍碁、雙六など遊びて、棧敷には人をおきたれば、「わたり候ふ。」といふときに、おの／＼肝つぶるゝやうに、争ひ走り上りて、落ちぬべきまで、簾張りいでゝ、おしあひつ、一事も見もらさじとまもりて、「とあり、かゝり。」と、物事にいひて、わたり過ぎぬれば、「又渡らむまで。」といひておりぬ。唯、物をのみ、見むとするなるべし。都の人のゆゝしげな

わりなく 無理に。

るは、眠りて、いとも見ず。若くするゝなるは、宮仕にたちゝる、人の後にさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず、わりなく見むとする人もなし。

◎こんな人達が、賀茂の祭を見物する様子は、随分奇妙である。「行列の見えるのは、まだ、大分、間があるから、それまで、棧敷は用がない。」といつて、奥の方の家で、酒を飲んだり、物を食べたり、圍碁や雙六などをして遊び、棧敷には、見張の番人を置き、その番人が、「お通りです。」と、注意をしてくれる時分に、大騒をして、棧敷へ争ひ上り、落ちさうになるまで、簾から身體を乗り出し、押合ひながら、一つも見逃すまいと、目を見はり、「あゝだ、かうだ。」と、一々批評し、行列が行過ぎると、「またお通りになるまで。」といつて、棧敷から下りるのであるが、たゞ、物ばかり見ようとするのであらう。物のわかつた部人は、眠つてゐて、ことさらに見ようとはしない。下々の若者どもは、いろ／＼の用があつて、宮仕に立働き、人の後に居る従者達は、都合が悪くて、行列がよく見えないでも、人の眉によりかゝるなどいふことをしない。即ち、むりやりに見ようとする人はないのである。

◎葵かけわたして 家や諸  
 道具に葵をかけたして。  
 ◎なまめかしき 艶麗で奥  
 ゆかしい。◎さらさらしく  
 華美なる。◎らうがはしさ  
 亂りがはしさ。世のため  
 い 榮枯盛衰のためし。

何となく、葵かけわたしてなまめかしきに、明けはなれぬほど、  
 しのびて寄する車どものゆかしきを、それか、かれかなど、思  
 ひ寄すれば、牛飼、下部などの見知れるもあり。をかしくも、  
 きらきらしくも、さまざまに行きかふ、見るもつれづれならず。  
 暮るゝほどには、立てならべつる車ども、所なく並みあつる人  
 も、いづ方へ行きつらむ、ほどなく稀になりて、車どものらう  
 がはしさもすみれぬば、簾、たゞみも、とり拂ひ、目の前にさ  
 びしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られて、あはれな  
 れ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。

○ それとなく、家々には葵かけわたして、風流であるが、夜がまた明けきらな  
 い中に、そつと寄せて来る車なども奥ゆかしい。誰か彼かと思つて見てゐると、  
 牛飼や下部などの中に、顔を見知つてゐるものもある。華やかに、おもしろく、  
 人や車が、あちらこちらに行きかふ。それを見ると、退屈もせぬ。日が暮れか  
 ると、立並べてあつた車や、すき間もなく立並んでゐた人々も、どこへ行つた  
 のか、程なう少くなつて、車の音の騒がしさもなくなると、簾や疊も取拂はれ、

◎こいら 澤山に。◎ほど  
 なく待ちつけぬべし 間も  
 なく死ぬる時期がくるであ  
 らう。

見る見る内に、さびしくなつて行く。この様子は、世の中の榮枯盛衰のために思  
 ひくらべられて、一種の感慨にうたれる。さて、この大路の有様を見るのが、ほ  
 んとに祭を見たものといふべきである。  
 かの棧敷の前を、こゝら行きかふ人の見知れるが、あまたある  
 にて知りぬ。世の人数も、さのみは多からぬにこそ。この人、  
 みな失せなん後、我身死ぬべきに定りたりとも、ほどなく待ち  
 つけぬべし。大なるうつはものに、水を入れて、細き孔をあけ  
 たらんに、滴ること少しといふとも、怠る間なく漏りゆかば、  
 やがて盡きぬべし。都の中におほき人、死なざる日はあるべか  
 らず。一日に一人二人のみならむや。生れぬ。日かやも。

○ あの棧敷の前を、澤山に往來する人があるが、その多くは、自分が知つた人  
 であるので、世の中には、そんなに澤山の人数はゐないものだといふことが知れ  
 る。さて、此等の人々が死に失せた後で、自分の身も死ぬるにきまつてゐても、  
 世の人数はさほど多くないから、自の死ぬる時期は、間もなくくるであらう。  
 大きな器へ水を入れ、細い孔をあけておいたら、滴る分量は極く僅でも、間断な

◎鳥部野、舟岡、共に都附近にある墓地。◎送る、葬送する。◎ひさぐ、商ふ。◎のどかに、ゆつくりと。堀河百首に「けふとても世をのどかにはおもはれどあすしらぬ身であはれなりける。」◎まゝ子立、黒と白の石を、各十五づゝ併せて三十ほど並べ、十にかゝる石をとる遊戯で、こゝでは之を死ぬ人にとへたのである。◎まぬき、間を抜いて行くこと。◎きはひ、勢こんで。

く、水が漏れるゆゑ、何時しか、その水はなくなつてしまふであらう。都の中に人は澤山居つても、死亡者のない日とてはない。而も、その死亡者は、一日に一人や二人といふやうな少数ではないだらう。

鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る數おほかる日はあれど、おくらぬ日はなし。されば棺をひさぐもの、作りてうちおくほどなし。わかきにもよらず、つよきにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで遁れ來にけるは、ありがたき不思議なり。暫時も世をのどかに思ひなんや。まゝ子立といふものを、雙六の石にてつくりて、立て並べたる程は、とられんこと、いづれのがれぬと見れど、またまた數ふれば、かれこれ、まぬき行くほどに、いづれも遁れざるに似たり。兵の、軍に出づるは、死に近き事を知りて、家をも忘れ、身をも忘る。世をそむける草の庵には、しづかに、水石をもてあそびて、これをよそに聞く

で行くこと。◎きはひ、勢こんで。

と思へる、いとほかなし。静なる山の奥、無常のかたき、きはひ來らざらむや、その死に臨めること、軍の陣にすゝめるに同じ。

◎鳥部野、舟岡、その他の野山にも、死人を多數、葬送する日はあつても、まるで葬送せぬ日とてはない。随つて、棺を商ふものは、それを絶えず作つて居るけれども、作つて置かして置くひまもなく、どん／＼賣れてしまふ。若からうが、強からうが、思ひがけもなく襲うて來るものは死期である。今日まで、死期をのがれて來たのは、まことに不思議である。暫時も、世を轉氣に送らうと、思つてはぬられない。まゝ子立といふものを、雙六の石で作つて、並べて置くうちは、取られる石は、どれとてもわからないが、數へ當て、一つを取つてしまふと、その他の石は、まづ、取られるのを逃れたと見えるけれども、更に數へて、だん／＼と石をとり、間を抜いて行くと、どの石も、取られることを、のがれることが出來ないのである。兵士が戰場へ出るには、死期に近づいたといふことを知つて、家をも身をも、忘れるのである。世をのがれて住んでゐる草の庵では、閑に水石を弄んで、死といふ問題をよそ事と聞き流して行けるものと思ふのは、大きな心得違である。どんなに閑靜幽寂な山奥とても、無常といふ敵が、攻め寄せて

●御簾なるを 御簾にかけあつた葵を。●色もなく、趣なく。●よき人 上流の

来ないことではないのである。而して、人間が、死といふ敵に近く臨んでゐるのは、恰も、兵士が軍陣に出で、敵に對してゐるのと同じである。  
この段は、大分長くて、いろ／＼なことを書いてあるけれども、これを概括すると、大體、三節に分れるやうである。  
第一節では、花月や戀などの趣味は、その順調なところ、全盛期にあるよりも、寧ろ、始と終、不如意なところにあるといふことを説いてゐる。  
第二節では、無趣味な人間の事物を賞玩する方法から、賀茂祭に於ける田舎者の見物の様を説き、且之を咎め、餘談として、賀茂祭の趣を叙してゐる。  
第三節では、祭の話、見物人の身の上などから、延いて、例の無常談にうつり、死に對する覺悟を説いてゐる。  
文章もなかく、よいが、とりわけ、第一節は、觀察が鋭敏緻密で、筆致が優雅である。第二節の賀茂祭の有様、田舎者が見物する態度なども、生々と寫されてゐるが、第三節のまゝ、子立の比喩も、頗る適切で興味がある。  
第三百三十八段 祭過ぎぬれば、葵不用なりとて、ある人の、御簾なるを、皆、とらせ侍りしが、色もなくおぼえ侍りしを、よき人の、し給ふことなれば、さるべきにやと、思ひしかど、周

人。●周防内侍 後冷泉帝の時の女官で名を仲子といふ。●かくれども 葵をかけるといふことに、思をかけるといふことをいひかけたもの。●みすのあふひのかれ葉 御簾に見すといふことをかけ、あふひのかれ葉といふに、棄てられたる戀とい意を含めてある。  
●家集 内侍の家集。●古き歌のことばがき 新古今集、戀の部、實方朝臣の歌に、「ばやうもの申しける女に、かれたる葵を、みあれの日つかはしける。」といふ

防内侍が、  
かくれどもかひなきものはもろ共に、  
みすのあふひのかれ葉なりけり。  
とよめるも、母屋の御簾に、葵のかゝりたる枯葉をよめるよし、家集に書けり。古き歌のことばがきに、「枯れたる葵にさして、遣はしける。」とも侍り。枕草紙にも、「こしかた戀しきもの、かれたる葵。」と書けるこそ、いみじく、なつかしう思ひ寄りたれ。鴨長明が四季物語にも、「玉だれに、後の葵はとまりけり。」とぞ書ける。おのれと枯るゝだにこそあるを、なごりなく、いかゞ取りすつべからず。  
賀茂の茶が過ぎてしまつと、葵は不用だといふので、或人が、御簾にかけてある葵を、すつかり取拂はれた。これは、趣もないものだと思はれたけれども、上流の人がせらるゝことなれば、さうすべきものかと思つてゐた。併し、周防内侍が、「かくれどもかひなきものは、もろともに、みすのあふひのかれ葉なりけり。」

詞書がある。○鴨長明、後鳥羽院の時、和歌所の寄人であつたが、不平あつて出家し、蓮胤と號し、大原の奥に閑居した。方丈記、四季物語、無名抄等は、その著作である。○玉だけ、玉すだれ。○おのれとかるゝだに、自然と枯るゝのさへ。○薬玉、五月五日、菖蒲と共にかけるもので、種々の香料を玉にして、造花を結びつけ、五色の絲を垂れたるもの。○枇杷皇太后、三條天皇の御后。○をりならぬ云々、千載集、哀傷の部

と歌によんでゐるのも、母屋のみすに葵のかゝつてゐる、その枯葉をよんだものであるといふことが、内侍の家集に見えてゐるし、古い歌の詞書に「枯れたる葵にさして遣しける。」と書いてあるし、清少納言の枕草紙にも「過ぎ來し方々戀しいものは、枯れたる葵である。」と書いてあるなど、非常になつかしく思はれた。なほ、鴨長明が四季物語にも「玉だけに、後の葵がのこつてゐる。」と書いてある。して見ると、葵はとりはらはないのがよいやうである。葵が自然と枯れて行くのさへ惜しいほどであるのに、どうして、それを、残らず取り捨てるといふ、なきけなことが出来ようぞ。

御帳にかゝれる薬玉も、九月九日、菊にとりかへらるゝといへば、蒲菖は菊のをりまでもあるべきにこそ。枇杷の皇太后宮かくれ給ひてのち、ふるき御帳の内に、菖蒲、薬玉などの枯れたるが侍りけるを見て、「をりならぬねをなほぞかけつる。」と辨の乳母のいへるかへりごとに、「あやめの草はありながら。」とも、江の侍従がよみしぞかし。

○御帳にかゝつてゐる薬玉も、九月九日に、菊と取りかへらるゝといふことで

に「あやめ草なみだの玉にぬきかへて、折ならぬれを、なほぞかけつる。」といふ辨の乳母の歌があるが、そのかへしとして「玉ぬきしあやめの草は有ながら、よどのはあれむもの」とやは見し。』といふ江の侍従の歌がある。○辨のめいと三條天皇の皇女、陽明門院の乳母。○江の侍従、大江匡衡の女で、母は赤染衛門。○左近の櫻、紫宸殿の南庭の左右に、右近の橋と並んである櫻。○こちたくしつこく。○れちけたりす

あるから、菖蒲は菊の折まで、そのまゝにして置いたがよからう。枇杷皇太后宮が、崩御になつた後、古い御帳の中に、菖蒲や薬玉などの、枯れたのがあるのを見て、辨の乳母が「折ならぬに菖蒲の根をかけて、悲しさに泣く音を立てたことよ。」といふ意味の歌をよんだところ、江の侍従が、そのかへしとして「あやめの草はありながら、宮は最早おはしまさず、夜の殿はさびしく荒ればた。」といふ意味の歌をよんだのであつた。

筆百三十九段

家にありたき木は、松、櫻、松は五葉もよし、花はひとへなるよし。八重櫻は奈良の都にのみありけるを、この頃ぞ、世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、みな、一重にてこそあれ。八重櫻はことやうのものなり、〇とこちたくねちけたり。植ゑずともありなむ。おそ櫻、またすすまじ。蟲のつきたるもむづかし。梅は白き、うす紅梅、ひとへなるがとく咲きたるも、重りたる紅梅のにはひめでたきも、みなをか



なほでない。○すさまじい  
趣がない。○むづかしい見  
苦しい。○にほひめてなき  
も 花の色の濃艶なるをい  
ふ。○おぼえ劣り わるく  
おもはれる。○けおされて  
壓倒されて。京極入道中納  
言 藤原定家。有名なる歌  
人。○京極の屋 定家卿の  
生れたる京極の家。○卯月  
陰曆四月。

し。おそき梅は、櫻に咲きあひて、おぼえ劣り、けおされて、  
枝にしほみつきたる、心うし。「一重なるが、まづ咲きて散りた  
るは、心とくをかし。」とて、京極入道中納言は、なほ、ひとへ  
梅をなむ、軒近く植ゑられたりける。京極の屋の南むきに、今  
も二本侍るめり。柳、またをかし。卯月ばかりのわか楓、すべ  
て、よろづの花紅葉にもまさりて、めでたきものなり。橘、か  
つら、いづれも、木はものふり、大きなよし。

○家に植ゑて置きたい木は、松と櫻とであるが、松は五葉の松もよいし、櫻は  
一重の方がよい。八重櫻は、もと、奈良の都にだけあつたのを、この頃、だんだ  
んと、世に多くなつて来た。吉野山の花や左近の櫻は、みな一重である。八重櫻  
は、一寸趣がかばつてゐるが、餘りにしつこくて、すなほでない。植ゑなくても  
よからうと思ふ。遅櫻もまた、趣がない。蟲のついたのも見苦しい。梅は白いのも、  
薄紅いのも、一重のが早く咲いたのも、八重の紅梅の色の濃いのも、皆、趣があ  
る。遅く咲く梅は、櫻と同時になつて、眺めが劣り、壓倒せられて、枝に花がし  
ぼみついてゐるのは見つともない。一重なのが、先に咲いて、散つたのは、氣早

くて面白い。」といふので、京極入道中納言は、一重の梅を、軒近く植ゑて賞玩せ  
られたといふことである。京極の家の南向に、今も二本残つてゐる。柳もまた趣  
がある。四月頃の若楓は、いろくた花や紅葉にもまさつて、うつくしいもので  
ある。橘や桂は、何れも木が古くて、大きいのがよい。

草は山吹、藤、杜若、撫子、池には蓮、秋の草は萩、薄、桔梗、  
萩、女郎花、藤袴、紫苑、木香、芍薬、龍膽、菊、黄菊も、葛、  
葛、朝顔、いづれも、いと高からず、さゝやかなる垣に、しげ  
からぬ、よし。この外、世にまれなるもの、唐めきたる名のき  
にくく、花も見なれぬなど、いとなづかしからず。大かた、  
何もめづらしくおりがたきものは、よからぬ人の、もて興する  
ものなり。さやうのもの、なくてありなむ。

○草では、山吹、藤、杜若、撫子がよく、池には蓮がよい。秋の草では、萩、  
桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫苑、木香、芍薬、龍膽、菊、黄菊もよい。葛、葛、  
朝顔などは、どれにしても、餘り高くない、小さな垣根に、少しばかりあるのが  
よい。この他、世に稀なるもの、唐風の名の聞きにくく、花も見なれないものな

○ありがたき 稀なる。  
○よからぬ人 下賤の人。  
○もて興する 翫賞する。  
○なくてありなむ なくて  
も差支はない。

◎はかないし、つまらぬ。◎  
 こちたく多かる、非常に多  
 い。◎朝夕なくてかなはざ  
 らむものこそあらめ、朝夕  
 に是非なければならぬも  
 のはしかたがない。

どは、餘りよろしくない。何でも、珍しくて、めつたにないやうなもの  
 は、下賤の人が翫賞するものであるが、そんなものは、なくてもよろしい。  
 枕草紙の筆を真似て、翫賞すべき草木を擧げたのであるが、草ばといつて、  
 山吹、藤などを、その中に入れてあるのは、當時、此等のものは、草と思はれて  
 居たものであるからである。  
 珍奇なものを斥けて、ありふれたすなほなものを賞揚してゐるところに、兼好の  
 趣味の特色があらはれてゐる。

第四百十段

身死して、財残るは、智者のせざるところなり。

よからぬもの蓄へ置きたるもつたなく、よきものは、心をとめ  
 げむと、はかないし。こちたく多かる、まして口惜し。「われこそ  
 得め。」などいふものどもありて、後に争ひたる、さまあし。後  
 は誰にと志すものあらば、生けらむ中にぞ譲るべき。朝夕なく  
 てかなはざらむものこそあらめ、その外は、何も、もたでぞあ  
 らまほしき。

死んだ後に、財産を残すといふことは、智者のしないことだ。よくないもの

◎悲田院 京都泉涌寺の中  
 で、孤兒病者ヲ養うてゐた  
 寺。◎堯蓮上人 傳記未詳。  
 ◎さうなき 無雙の。◎あ  
 づま人 東國の人。◎こと  
 うけ 受けこみ。◎それは  
 お前さんは。◎けやけく  
 はつきりと。◎えいひはな  
 たす いひきることが出来

を蓄へて置くのも見苦しく、よいものを残して置くと、それに心をとめて居たも  
 のと思はれて、つまらぬ。非常に澤山に残して置くのは、猶更遺憾だ。「自分が貰  
 ふのだ。」などいふものがあつて、人が死んだ後に、財産争をするのは、まことに  
 なさけない。後は誰にやると心當りがあつたら、生前に譲つて置くがよい。朝夕  
 に是非なければならぬものは、しかたがないが、その他には、何も持たない方  
 がよい。

第四百十一段

悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしと

かや、さうなき武者なり。古里の人の來りて、物語すとて、「お  
 づまびとこそ、いひつることは、たのまるれ。都の人は、こと  
 うけのみよくて、實なし。」といひしを、ひじり、「それは、さこ  
 そおぼすらめど、おのれは、都に久しく住みて、馴れて見侍る  
 に、人の心、劣れりとは思ひ侍らず。なべて、心やはらかにし  
 て、情ある故に、人のいふほどのこと、けやけくいなみ難く、  
 よろづ、えいひ放たす、心よわくことうけしつ。偽せむとは思

す。◎ことうけしつ、引きうけてしまふ。◎ともしくかなはぬ、貧乏でしかたがない。◎わががたなれど、自分の故郷ではあるが。◎心の色なく、心が單純で。◎すくよか、剛直。◎ことわられ、道理を説かれ。◎聲うちゆがみ、聲になまりがあつて。◎聖教のこまやかなることわり、佛道の奥義。◎心にく、奥ゆかし。◎住持せらる、一つの寺を持つてゐられる。◎やはらぎたる、ところありて、やさしい人情があつて。

はねど、ともしくかなはぬ人のみあれば、おのづから、本意通らぬこと多かるべし。吾妻人は、我がたなれど、げには心の色なく、情おくれ、偏にすくよかなるものなれば、はじめより、いなといひて止みぬ。にぎはひゆたかなれば、人にはたのまるゝぞかし。」と、ことわられ侍りしこそ。この聖、聲うちゆがみあらしくして、聖教のこまやかなることわり、いとわきまへずもやと思ひしに、この一言の後、心にくゝなりて、多かる中に、寺をも住持せらるゝは、かくやはらぎたる、ところありて、その益もあるにこそと、おぼえ侍りし。

○ 悲田院の堯蓮上人は、俗姓を三浦某といつて、無雙の武士である。故郷の人が来て、話をしたときに、「東國の人のいふことは、あてになるが、都の人は口先ばかり、容易く承諾するけれども、實行が伴はぬので、あてにならぬ。」といったのを、堯蓮上人が聞き咎めて、「お前は、さう思ふかしらねど、自分は承らく都に住んでゐて、見るところによると、都の人の心が劣つてゐるとは思はれない。都

◎心ない、人情がない。◎あらえびす、東國人をさしていふ。◎かたへ、傍の人。

人は、すべて、感情が鋭くて、物に感じ易いから、人のいふことを、はつきりと謝絶することが出来ないで、何事も心弱く引き受けてしまふのである。何も、はじめから、いつはらうと思つてやることではないけれども、貧乏で、どうもしかたがないので、自然と、本意をとほしきれないことが多いのである。然るに、東國人は、自分の生國ではあるが、實をいふと、心が單純で、人情が劣り、剛直一方であるから、出来ないと思ふことは、はじめから否といつて、拒絶してしまふ。併し、富有な人になると、人のいふことをよく承諾するのである。」と、道理を説かれたさうだ。この上人は言葉になまりがあり、聲が荒々しくて、とても佛道の奥義などは知つてゐられまいと思つてゐたに、この一言を聞いてからは、奥ゆかしく思はれて、多くの坊主の中にあつて、一つの寺を支配して行かれるやうな人は、斯様に、人情があつて、よいところがあるものだと思つた。

第四百十二段

○ 心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。おるあらえびすのおそろしげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや。」と問ひしに、「一人ももち侍らず。」と答へしかば

○ものゝあはれ 物の情。  
 ○ものす おいでなさる。  
 ○恩愛の道 子を思ふ道。  
 ○かゝるものゝ心 斯様な  
 あらえびすの心。

○すゝみ 匹如身といふ

「さては、ものゝあはれは知り給はじ。情なき御心にぞ、ものし給ふらむと、いとおそろし。子故にこそ、よろづのあはれは思ひ知らるれ。」といひたりし、さもありぬべきことなり。恩愛の道ならでは、かゝる者の心に、慈悲ありなむや。孝養の心なきものも、子もちてこそ、親の志は、思ひ知らるれ。

○人情もないやうに見える者でも、どうかすると、いゝことを言ふものである。或東國人が、人に向つて、「お子さんをお持ちですか。」と問ふたのに、その人が「一人も持つておません。」と答へたので、東國人は「それでは、物のあはれといふことを御存知ありませんまい。なまけない御心であらうしやるのであらうと思ふと、恐ろしい感じが致します。子といふものがあつてこそ、はじめて、物のあはれといふことはわかるのです。」といつたさうだが、いかげもその通りである。恩愛の道でなければ、斯様な荒夷の心には、慈悲といふことは、恐らくはないのであらう。現に孝養をしなければならぬといふ心のないものでも、子を持つて見ると、はじめて、親の心持といふものがわかつて来るものである。

世を棄てたる人の、よろづに<sup>○</sup>するすみなるが、なべて、ほどし

字をあて、裸一貫といふ意味に用ふ。○なべて 概して。○ほどし 足手まとひ。○むげに ひたすら。○かゝるものゝ心 思ひ込む。○ひがごと 悪い事。○世をば行はまほし 世を治めた。○人恒の産なきときは 云々 孟子に「無恒心而有恒心者 惟士爲能。若民則無恒産 因無恒心 苟無恒心 放辟邪侈 無不爲已」とある。○科のもの 罪科に觸るゝもの。○つかひなむこと 罪にすること。

多かる人の、よろづにへつらひ、望ふかきを見て、むげに思ひくだすは、ひがごとなり。その人の心になりて思へば、まことに悲しからむ。親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盜をもしつべき事なり。されば、盜人をいましめ、ひがごとをのみ罪せむよりは、人の飢ゑず、寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人恒の産なきときは、恒の心なし。人きはまりてぬすみます。世治らずして、凍餒のくるしみあらば、科のもの絶ゆべからず。人をくるしめ、法をおかさしめて、それをつみなはむこと、不便のわざなり。さていかゞして、人を恵むべきとならば、上のをこり費すところをやめ、民を撫で、農をすゝめば、下に利あらんこと、疑あるべからず。衣食よのつねなるうへに、ひがごとせん人をぞ、まことの盜人とはいふべき。

○裸一貫の世捨人で、足手まとひの多い人が、何につけても、人にへつらひ、怒の深いのを見て、ひたすら、なまけないことゝ思ひこむのは、間違つてゐる。

その人の心になつて考へて見たら、誠に苦しい思をして居るのであらう。親の爲、妻子のためには、恥をも忘れ、盗人をもしさうなものである。それで、盗人を捕縛し、悪い事を罪することに力を盡すよりも、世人が、飢えたり、凍えたりしないやうに、世を治めた方がよいと思ふ。一體、人が渡世をして行くだけの財産といふものがなかつたら、その人は一定の穩健な心を持って行くといふことが出来ない。人が貧苦に迫つて來ると、盗みをするやうになる。世が治らないで、人民が飢えたり、凍えたりしたら、罪人は絶ゆるものでない。人を苦しめ、法律を犯さしめて、それを罪にするのは、かはいさうなことである。然らば、どうして、之を救濟すべきかといふに、人の上に立つものが、驕奢をいましめ、民を愛撫し、農業を勧めて行つたら、下々のものに利益があるやうになり、満足するのは疑もないことである。衣食住が普通にやつて行けたら、人は決して悪い事をする者ではないが、若し、それでゐて、罪を犯すやうな者があつたら、それこそ、眞實の盗人といふべきものである。

前節は、子といふものを持たなければ、眞の人情はわからぬといふことを説き、後節は、恒産なきものは恒心なきゆゑ、上に立つものは、自ら奢侈を戒め、下民を愛撫し、衣食住に事缺かぬやうにしてやり、恒心を保持せしめ、罪を犯さぬやうに仕向けなければならぬといふ道理を説いたもので、なかく、人情に通じ

た、苦勞人の至言である。

第四百四十三段

人の終焉のありさまの、いみじかりしことなど、人の語るを聞くに、たゞ、靜にして亂れずといはゞ、心にくかるべきを、おろかなる人は、あやしく、ことなる相を語りつけ、いひしことばもふるまひも、おのれが好む方に譽めなすこそ、その人の日ごろの本意にもあらずやおぼゆれ。この大事は、權化の人も定むべからず。博學の士もはかるべからず。おのれ違ふところなくば、人の見きくにはよるべからず。

人の臨終の有様の立派であつたことを、人が話してゐるのを、聞くに、たゞ、靜かにして取り亂すところもなかつたといつて置くと、奥ゆかしく聞えるのを、愚な人は、不思議にも奇特な相があらはれたなどつけ加へ、死んだ人がいつた言葉も、動作も、自分の好きなやうにいひなしてほめるのは、死んだ人の日頃の本意ではなからうと思はれる。この終焉の事ばかりは、權化の人でも、豫め之を定むるといふことは出來ず、博學の人でも、之を豫知することは出來ない。隨つて、終焉のことは、自分の本心に間違つたところさへなかつたら、その死相などはと

◎終焉 臨終。◎いみじかりしこと 立派であつたこと。  
◎心にくかるべきを 奥ゆかしひであらうに。◎あやしくことなる相 不思議な有様。◎この大事 終焉の事。◎權化 神佛が世を救ふために、かりに人間の姿に生れ出たものをいふ。

◎梅尾の上人 明恵上人。  
 ◎あしあし 馬の爪を洗ふので、脚をあげよ、脚をあげよといったものである。  
 ◎宿執開發の人 前世に修練した功德が、この世に開發して、阿字阿字と唱へるといふ意。◎阿字阿字「あしあし」を聞き違へたものであるが、阿字といふのは、梵語字母の最初のもので、眞言宗では、この字に

うでもよい。人の見聞によつて、支配せられるに及ばぬ。  
 穩健な見解で、強ひて奇を求め、虚飾を加ふるの非を咎めたものである。たゞ、しづかにして亂れずといはば、心にくかるべきな」といふのが、著者の意のあるところである。

第四百四十四段

梅尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗

ふ男、「あしあし。」といひければ、上人、立ちとまりて、「あなたふとや、宿執開發の人かな。阿字阿字と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりに尊くおぼゆるは。」と、たづね給ひければ、「府生殿の御馬に候ふ。」と答へけり。「こは、めでたきことかな。阿字本不生にこそあなれ、うれしき結縁をもしつるかな。」とて、感涙をのこはれけるとぞ。

梅尾の明恵上人が、曾て道を通つておられたところ、河で馬を洗つてゐる男が、「あしあし。」といつたので、上人は之を聞いて立ちとまり、「あ、尊い。あの男は宿執開發と見え、阿字阿字といつてゐるぞや。あの馬は、どういふ人の所有で

不生不滅の深義があるものと觀じ、これを唱へると、一切の煩惱束縛を斷絶することが出来るものと信ぜられてゐる。◎府生 衛門府にある官名。これをまた「不生」ときいたのである。  
 ◎阿字本不生 智證大師の阿字秘訣に「從妙法終至而去、無非阿字本不生」とある。阿字觀の大事を了解したことをいふ。◎結縁 佛の道に縁を結ぶをいふ。  
 ◎御隨身 兵仗を帶して、高官の人に供奉する衛門府の侍。◎北面 上皇に仕へ

あるか、あまり有難いと思ふぞ。」と尋ねられたので、件の男は、「府生殿の御馬で御座います。」と答へた。すると、上人は「これはめでたい。阿字本不生で、うれしい佛縁を結んだものじや。」といつて、感涙を流されたといふことである。

專念道に心掛けてゐる人には、斯様に、何事も道の上に聞えるもので、その單純にして、道心の深いところが尊いものと見て、著者はこの話を書いたものであらう。

第四百四十五段

御隨身秦重躬、北面の下野入道信願を、落馬の

相ある人なり。よくつゝし給へ。」といひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願、馬より落ちて死にけり。道に長じぬる一言、神の如しと、人、思へり。さていかなる相ぞと、人の問ひければ、「きはめて桃じりにて、浦艾の馬を好みしかば、この相をおほせ侍りき。いつかは申しあやまりたる。」とぞいひける。

御隨身の秦重躬が、北面の武士、下野入道信願を見て、「落馬の相ある人なれ

たる武官。◎相 人相。◎桃いり 鞍の上で尻がすわらぬをいふ。◎沛い 艾の馬をどり上る馬。

◎座主 天台座主のことで叡山の長老をいふ。◎相者 人相を見るもの。◎兵仗 武器。◎矢や 矢にあたりてうせたまひけり 壽永二年十一月明雲が法皇の御所、法住寺殿へ伺候してゐたところ

ば、よくつゝしみなされ。」といったのを、あてにならぬこと、思つてゐたところ。果して、信願は、馬から落ちて死んだ。そこで、その道に長じてゐる人の一言は、神のつうによくあたると、世間の人々は思つた。然らば、信願はどんな相をしてゐたのかと、人が尋ねたところ、重躬は「あの人は、至つて桃尻なるくせに、好んで、はね馬に乗られたので、落馬の相があるといつたのである。自分は何時も、かういふ確かな根拠をもつて占ふのであるから、一度も失敗したことがない。」といつたさうである。

禍わざの來るには、必ずその原因があり、達人は、よくこれを事前に豫知するものであるといふことを説いたものである。

第四百十六段

明雲座主、相者にあひ給ひて「おのれ、もし、

兵仗ひやうぢやうの難むづかやある。」と、たづね給ひければ、相人「まことに、その相おはします。」と申す。「いかなる相ぞ。」と、たづね給ひければ、「傷害のおそれ、おはしますまじき御身にて、かりにも、かくおぼしよりて、たづねたまふ。これすでに、そのあやぶみのきざしなり。」と申しけり。はたして、矢にあたりて、失せた

まひけり。

明雲座主が、或時、相者にあうて、「わしには、若しや、武器で害はるゝやうな相はありはしまいか。」と尋ねられたところ、相者は「なるほど、さやうな相が御座います。」と答へた。明雲重ねて、「さて、その相とほどんなものじや。」と尋ねると、相人は「傷害の心配は、ありさうはない御身分でゐられながら、かりそめにも、そんなことがありはしまいかと考へて、私にお尋ねなされるその御言葉が、既に、危難の前兆です。」と申したが、果して、明雲は、法住寺合戦の際、矢に中つて死なれたのであつた。

前段と同様なる趣意を述べたものである。

第四百十七段

灸治きうぢ、あまた所になりぬれば、神事にけがれあ

りといふこと、近くの人いひ出せるなり。格式等きやくしきにも見えすとぞ。

灸治も、あまり餘計にすると、神事に汚があるといふことを、近頃になつて、人がいひ出したが、こんなことは、格式等にも見えないさうだ。

有職趣味から、灸治に関する俗説を告めたものである。

木曾義仲が、この御所を襲うて狼藉したので、この際矢に中つて死んだのである

◎灸治 灸をすゑて、病を治すること。◎格式 法令規則を書いたもので、弘仁貞観、延喜の三大格式がある。

◎三里、膝の下の外側の、少しくぼんだ所に、すゑる灸を稱す。◎上氣のぼせる。

◎鹿茸、鹿のふくろ角。◎はむ、喰ふ。

◎能をつかむとする人、藝能を身につけようとする人。◎よくせざらむほどは、藝能に未熟な間は。◎な

第四百八段 四十以後の人、身に灸を加へて、三里をやかされば、上氣のことあり。必ず灸すべし。

四十歳以上の人が、身に灸をすゑて、三里をやかすに置くと、のぼせることがあるから、必ず三里には灸をすゑるがよい。

灸治のことを述べたもの。

第四百九段 鹿茸を鼻にあて、かぐべからず。小さき蟲ありて、鼻より入りて、脳をはむといへり。

鹿茸を鼻にあて、にほうてはならぬ。その中に小さい蟲があつて、鼻からはむ。腦を喰ふといふことだ。

これも醫道のことを記したものであるが、當時は斯様なことが信ぜられてゐたものに見える。

第五百十段 能をつかむとする人、よくせざらむほどは、なまじひに、人に知られじ、うちうち、よく習ひ得て、さし出でたらむこそ、いと心にくからめと、常にいふめれど、かくいふ人、一藝も習ひ得ることなし。未だ堅固、かたほなるより、上

手の中にまじりて、そしり笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性、その骨なけれども、道になつます、みだりにせずして、年を送れば堪能のたしなまざるよりは、遂に、上手の位に至り、徳たけ、人に許されて、ならびなき名を得ることなり。天下のものゝ上手といへども、はじめは、不堪のきこえもあり、むげの瑕瑾もありき。されども、その人、道のおきて正しく、これを重くして、放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となること、諸道、かはるべからず。

身に藝能を修得しようとする人は、まだ、それに熟達しないうちは、なまなかに、人に知られないで、内々よく習ひ覚え、さうした後、人中へ出るのが、ゆかしくよいなどいふ人もあるけれども、こんな人に限つて、一藝も習ひ得ることは出来ないのである。また、その道に熟練しないうちから、上手な人の中に交つて、そしり笑はるゝのもかまはないで、押し通して行く人の方が、天性、その器用はなくとも、途中でとゞこほるといふこともなく、粗忽にするといふこともないので、年月を経れば、器用の者で餘り勉強しない者よりは、却つて上手に

まじひに、なまなかに。◎うちうち、内々。◎堅固、かたほなるより、かたくて、まだその道に熟練しないで。◎つれなく、さし出で、まばすやり通して行くをいふ。◎その骨、その器用。◎なづます、とゞこほらす。◎瑕瑾、玉のきずのことなるが、轉じて缺點の意に用ふ。◎道のおきて、道の筋目。◎放埒す、馬が埒を放れて奔逸する意から轉じて、度なく遊びすぎむにいふ。◎博士、物知り。



なり、徳も備はり、人にもゆるされて、無雙の名聲を博することがあるものだ。天下に聞えたる物の上手でも、はじめは、下手といふ評判もあり、ひどい缺點もあるものだ。併し、その人が、その道の筋目を正しく守つて、放埒な行をせず、勤勉して行つたら、世の物知ともなり、萬人の師として仰がるゝやうになることは、どの道でも同じことである。

○ 藝能を修練する心得を説いたものであるが、この作者にはめづらしい程實着な注意である。

第一百五十一段

ある人のいはく、年五十になるまで、上手に至らざらむ藝をば棄つべきなり。勵み習ふべき行末ゆくすゑもなし。老人のことをば、人も、え笑はず。衆にまじはりたるも、あいなく見ぐるし。大かたよろづのしわざはやめて、いとまあるこそ、めやすく、あらまほしけれ。世俗のことにたづさはりて、生涯をくらすは、下愚の人なり。ゆかしくおぼえむことは、學び聞くとも、そのおもむきを知りなば、おぼつかかなからずしてやむべし。もとより、望むことなくしてやまむは、第一のことなり。

○ あいなく、かはゆげもなく。○ めやすくあらまほしく。○ 丁度よくて、さうありたいものだ。○ 下愚の人、馬鹿な人。○ ゆかしくおぼえむことは、その藝を習ひたいと思ふことは。○ おぼつかかなからずしてやむべし。あらまほしわかつたらやめるのがよい。

○ 或人がいふに、年が五十になつても、上手になれないやうな藝は、捨て、しまつた方がよい。その頃になると、最早、精出して習ふだけの餘生がない。老人のしてゐることだと、氣の毒で、人は笑ひもしない位だから、年老いてから、他人の中へ交つて、もがくのは、かはゆげもなくつて見苦しい。いろ／＼な仕わざは、大概でやめにし、ひまでゐる方が似合つてゐる。世俗のことに關係して、一生涯を離離として暮すのは、馬鹿な人じや。ゆかしくて、覺えたいと思ふほどの藝は、人に就いて學び聞いても、その様子が一通りわかつたら、餘り深入をしないで、やめた方がよい。但し、最初から、そんなことを望まないで置かば、それは一番結構なことである。

○ 年とつてから、下手な藝能に没頭したり、一生涯を離離として暮したりすることの愚を咎めたもので、著者が例の「やすらかな」といふ消極的の趣味から来た意見である。

第一百五十二段

西大寺さいだいじの靜然上人じやうぜんじゆん、腰かゝまり、眉しろく、まことに徳たけたるありさまにて、内裏へ參られたりけるを、西園寺内大臣殿「あなたうとのけしきや。」とて、信仰のきそくありければ、資朝卿これを見て、「年のよりたるに候ふ。」と申され

○ 西大寺、大和國添上郡にあり。南部七大寺の一。○ 西園寺内大臣殿、西園寺實衡。○ 信仰のきそく、信仰

する氣色。◎資朝卿、日野資朝、後醍醐天皇の謀臣として、建武中興に力を盡し、賊の爲に捕へられ隠岐に流されて斬られた。◎むく犬、むく毛で太つた犬。◎あらましく、見る影もなく。◎老いさらばひて、老衰して骨立したる。◎内府、内大臣をいふ。

◎爲兼大納言入道、藤原定家三代の孫で、北條氏を滅さむことを企て、謀洩れて佐渡へ流されたが、後ゆる

けり。後日に、むく犬のあさましく老いさらばひて、毛はげたるをひかせて、「このけしき、たふとく見えて候ふ。」とて、内府へ參らせられたりけるとぞ。

西大寺の靜然上人が、腰はかまみ、眉は白くなり、徳のありさうな様子で、内裏へ參られたのを、西園寺内大臣殿が見られ、「さても尊い容體じやな。」といつて上人を信仰するやうな様子をされたのを、資朝卿が見て、「あれば、年がよつてゐるので、さう見えるのです。」といはれた。して、後日になつて、資朝卿は、見るかけもなく老衰へ、毛もはげてゐるむく犬を、西園寺内大臣の許へ送つて、「この犬の様子も、尊く見えまするか。」といはれたといふことである。

第百五十三段

爲兼大納言入道、召しとられて、武士どもうち

圍みて、六波羅へゐて行きければ、資朝卿、一條わたりにて、これを見て、「あなうらやまし。世にあらむ思ひ出、かくこそあらまほしけれ。」とぞいはれける。

されて歸京し、大納言になつた。◎六波羅、北條氏の一族が、京都の六波羅の南北兩方に勤番して、關西の政務を執つてゐた所。

◎この人、資朝をさす。◎東寺、桓武天皇の時の創立で、朱雀門の東方にある。◎かたはもの、不具者。◎かへり、手や足がそりかへつてゐるさま。◎とりどりに、どれもこれも。◎くせもの、かほり者。◎まもり、見つめる。◎いぶせ、いやらしく。◎興なく、おぼえければ、不愉快に思

爲兼大納言入道が、北條氏を滅さうとする陰謀露顯して、召しとられ、武士どもに護衛せられて、六波羅へつれゆかれた様子を、資朝卿が一條附近で見て、「あゝ羨しいことじや。この世に生れた甲斐には、一度、こんな目にあつて見たいものだ。」といはれた。

第百五十四段

この人、東寺の門に雨やどりせられたりけるに、

かたはものども集りゐたるが、手も足も、ねぢけゆがみ、かへりて、いづくも不具にことやうなるを見て、とりどりにたぐひなきくせものなり。最も愛するに足れりと思ひて、おぼえければ、たい、すなほに、めづらしからぬものにはしかずと思ひて、歸りて後、この間、植木を好みて、ことやうに曲折あるをもとめて、目をよろこばしめつるは、かのかたはを愛するなりけりと、興なくおぼえければ、鉢に植ゑられける木と

つたので。

◎世にしたがはむ人 世の中に順應して行く人。◎機嫌 先方の氣色。◎ついで あしき 折がわるい。◎生住異滅 生は、この世に生

も、みな掘り棄てられにけり。さもありぬべきことなり。

◎この資朝が、或時東寺の門に雨やどりをされたとき、その附近に、不具者共が集つて居たのが、手も足もねぢゆがみ、ひつくりかへつて、どこもかしこも異様であるのを見て、それ／＼にめづらしいかはり者で、おもしろいと思つて、見まもつてゐられるうちに、程なく、その興がさめて、醜くてむさくるしく感じ、物といふものは、やはり、すなほで、かはつてゐないのがよいと考へながら、家に歸り、その頃、植木を好んで、奇妙に曲りくねつてゐるのを求めて、目をよるこばしてゐたのは、あの不具者を受するのと同様だと、不愉快に思ひ、鉢に植えてある木どもを、皆掘り捨てられた。いかにも尤もなことである。

◎これも、著者が持論としてゐる。二物はすほにして穩かなのがよい。といふ意見を、資朝の話をかりて述べたものである。

第五十五段

世にしたがはむ人は、まづ機嫌を知るべし。ついであしきことは、人の耳にも逆ひ、心にも違ひて、その事成らず。さやうのをりふしを、心得べきなり。但し、病をうけ、子産み、死ぬることのみ、機嫌をはからず、ついであしとて、

れ出づること、住は、世に住んでゐること、異區病をうけて異形になること、滅は死ぬること。◎たけき河 流の早い河。◎眞俗につけて、僧侶も俗人も。◎足を踏みとまむまじき 足をふみとめて、躊躇するのは宜しくない。

世の中にも  
生住異滅の  
うらみ

やむことなし。生住異滅のうつりかはる、まことの大事は、たけき河の、漲り流るゝが如し。しばしも滯らず、たゞちに行ひゆくものなり。されば、眞俗につけて、必ず果し遂げむと思はむことは、機嫌をいふべからず、とかくの用意なく、足を踏みとまむまじきなり。

◎世の中に順應して、うまく渡つて行かうとする人は、まづ、先方の機嫌を知るといふことに心掛くるがよい。都合のわるいことは、人の耳にもさからひ、心にもたがうて、その事が成就するものでないから、さういふ時機を心得て置くべきものだ。但し、病氣になるとか、子を生むとか、死ぬるといふやうなことは、機嫌をはかるといふ譯には行かず、都合がわるいからといつて、中止するといふ譯にも行かぬ。生住異滅のうつりかはるといふやうな、ほんとうの大事は、恰も、流れの早い河が、漲つて流れてゐるやうなもので、暫時も滯らず、すぐに決行されるものである。それで、僧侶も俗人も、必ずやり遂げようと思ふことは、機嫌などを、彼是いつてゐる餘餘はないから、とかくの用意もないくせに、足をふみとめて躊躇するのはよくない、直に大事を決行すべしだ。

◎やがて、すぐに。◎すなはち、忽ち。◎小春、十月の頃、天候が和暖で、春のやうな陽氣を催すので、かくいふのである。◎つぼみぬ蕾が出来る。◎萌しつばる、萌し芽ぐむ。◎下にまうけたる、下に待ちうけてゐる。◎ついで、節序。

◎これに過ぎたり、四季の變遷よりも一層早い。◎定めらるついで、一定の節序。

春くれて後夏になり、夏はて、秋の來るにはあらず。春は、やがて夏の氣を催し、夏より既に秋はかよひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり、梅もつぼみぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌しつばるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣、下にまうけたる故に、待ちとるついで、甚だはやし。

春がくれてから夏になり、夏がすんでから秋が來るのではない。春の中には夏の氣を既に含んで居り、夏は早くも秋と氣が通じて居り、秋は忽ち寒くなり、十月は小春の天氣で、草も青くなり、梅も蕾が出来るのである。木の葉が落ちるのも、その葉が落ちてから、新しく芽ぐむのではなく、下から新しい芽が、萌し芽ぐんで來るので、それに推出されて落つるのである。迎へる氣が、下に待ちまうけて居るからして、待ちとる時節が、非常に早く來るのである。

生老病死のうつり來ること、また、これに過ぎたり。四季は、なほ、定れるついでであり、死期は、ついでを待たず。死は、前よりしも來らず、かねて後にせまれり。人みな、死あることを

◎まつこと、死を待つこと。

知りて、まつこと、しかも急ならざるに、おぼえずして來る。沖の干潟はるかなれども、磯より潮のみつるが如し。

生老病死がうつて來るのは、この四季の變遷よりも、一層早いものである。四季には、なほ、一定の節序といふものがあつて、それに支配せられて居るが、死期には順序もなければ、時節もなく、何時でもやつて來る。死は必ずしも、人に見える前からばかり來るものではなく、かれて、人に見えない後の方に迫つて來て居るものである。人は皆、死ななければならぬといふことを承知で、待つては居るが、それが急に來るものと思つて居ないうちに、ふとやつてくるものである。これは、恰も、沖の干潟が遠方までわたつてゐるので、まだ大丈夫と思つて居るうちに、磯の方から、忽ち潮が満ちて來るやうなものである。

著者が得意の無常觀を説いたもので、吾人の背後には、いつも死といふものが迫つて居るから、機嫌をうかふとか、時節や順序を待つといふやうなことをせず、大事は直ちに決行して、まことの道を急いで迎へるといふ趣意を教へて居る。

第百五十六段

大臣の大饗は、さるべき所を申しうけて行ふ、常のことなり。宇治左大臣殿は、東三條殿にて行はる。内裏に

◎大臣の大饗、大臣に任命せられたときの饗宴。◎さ

るべき所 然るべき場所。  
◎宇治左大臣殿 藤原頼長。  
◎させることのふせなけれども 御一門などいふことの因縁がなくともよせば外戚の因縁をいふ。

攪

◎賽 雙六のさい。◎攤 だむこと 雙六をすること。  
◎あからさまに かりそめに。◎聖教 佛經の經論。  
◎卒爾にして ふとして。  
◎善業 善い行業。◎散亂の心 氣が散つて落着かぬ

てありけるを、申されけるによりて、他所へ行幸ありけり。させることのよせけれども、女院の御所など、かり申す故實なりとぞ。

大臣に任命されたときの披露の饗宴には、然るべき場所を借りうけて行ふのが普通のことである。宇治左大臣殿は、東三條殿で行はれたが、こゝは、當時皇居であつたのを、左大臣がお借りしたいと申出たので、天子は、他所へ行幸になつて、お借しなされたのであつた。皇室と御一門などいふ因縁がない人でも、女院の御所などを、お借りするのが、故實ださうな。

第五十七段

筆を取ればもの書かれ、樂器を取れば音を立てむと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽を取れば攤うたむことを思ふ。心は、必ず、ことに觸れて来る。かりにも、不善のたはふれをなすべからず。

あからさまに、聖教の一句を見れば、何となく、前後の文も見ゆ。卒爾にして、多年の非を收むる事もあり。かりに今、この

心。◎繩床 座禪をするために繩を張たつ座。◎禪定 心を靜かに定めること。  
◎事理 現象と本體とをいふ。◎外相 外の部すがた。  
◎内證 内心。◎必ず熟す きっとそこに達する。◎これを「外相もしそむかざれば、内證必ず熟す。」といふことばをさす。

事理 外所作 證り心 御

文をひろげざらましかば、このことを知らむや。これ、すなはち、觸るゝところの益なり。心、更に起らずとも、佛前にありて、鈴をとり、經をとらば、怠る中にも、善業、おのづから修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せば、おぼえずして禪定なるべし。事理、もとより二ならず、外相もしそむかざれば、内證必ず熟す。しひて不信といふべからず。仰ぎてこれを尊むべし。

筆を取ると、物を書きたい氣になり、樂器をとると、それを鳴らしてみたくなり、盃を手にとると、酒がのみたくなり、賽をとると、雙六をしてみたくなるもので、人の心といふものは、必ず、事に觸れて起つて来るものである。それでちよつとでも、よくない戯をしてはならぬ。また、かりそめに、經論の一句を讀めば、自然に、その前後の文句も、目にはいつて来るものである。ふとした事から、多年のわるいことを改むるといふこともあるものだ。今、この書を讀まなかつたら、この事を知ることが出来ない。これが、すなはち、物事に心が觸れた利益である。佛を信する心が少しも起らなくとも、佛前で、珠數を取り、經文を取つて

◎盃いはいのそこ 飲み残りの酒の意。◎凝ねい當たう 當は底のこ。底にとゞこほるといふ意。◎魚道ぎやうだう 魚の通る道と

讀んだら、善いことが自然と修業せられるし、落着かない心ながらも、繩床に座すると、知らず識らず、禪定に入るのである。現象も本體も、元來別なものでない。外部のすがたが、若し間違つておなれば、心も必ず、そこに達するのである。しひて信ぜられことゝはいはれない。この事理に二つなく、外相そむかざれば、内證必ず違ふといふことは、尊重すべきことだ。  
【譯】われくの心は、外物の刺戟によつて、動かされ易いものであるから、成るべく、形のわるいものを避け、よいものに就くやうにすることが肝要といふ消極的の用意と、形は假のもので、實は動かすことの出来ないものであるから、われくは形にまどはされないので、その實を尊ぶやうにしなければならぬといふ積極的の用意とを説き、更に一歩進んで、「事理もとより二ならず。外相、もしそむかざれば、内證必ず熱す。」と道破し、これを信じて、眞の道に入るがよいといふことを教へて居る。高邁な識見だ。

第百五十八段 「盃のそこを棄つることは、いかゞ心得たる。」と、ある人のたづねさせ給ひしに、「凝當と申し侍れば、底に残りたるを棄つるにや候ふらむ。」と申し侍りしかば、「さにはあらず。魚道なり。ながれを残して、口のつきたる所を、すゝぐな

いふ意。

◎みなむすいび 表袴や袷袢などの飾に、絲を結んでさげたもの。◎蛇へび 川や溝に居る一種の小貝。

り。」とぞ仰せられし。

【譯】「盃のそこを棄てるといふことは、どんな譯か、知つて居るのか。」と、或人が尋ねたので、自分は「凝當といふのだから、盃の底に滯つた、酒の濁をりを捨てるためであらう。」と答へたところ、その人は「さうではない。凝當ではなくて、魚道である。これは魚は、大海を泳ぐが、その道を忘れないで、ちやんと通るといふところから、少し酒を飲み残して、口のついたところを、洗ひ清めるといふ意にたとへたものだ。」といはれた。

【譯】例の古實趣味から、飲み残しの酒を棄てるといふ習慣に就いての解釋をしたものである。當時は、こんな習慣があつたものと見える。

第百五十九段 「みなむすびといふは、絲を結び重ねたるが、蛇といふ貝に似たればいふ。」と、あるやむごとなき人、仰せられにき、「にな」といふは、あやまりなり。

【譯】「みなむすびといふのは、絲を結び重ねた恰好が、蛇といふ貝に似てゐるかといふのである。」と、或貴人が申された。俗に「にな」といつてゐるのは、「みな」の間違である。  
【譯】例の有職趣味。

○勘解由小路の二品禪門、正二位參議行忠卿。○ひらばり、庭上などに板敷をして、幕を張りまはしたるをいふ。○護摩、梵語で、焚燒又は火祭と譯す。火を焚いて佛に祈り、一切の宿惡の根を滅すのである。○行法、佛果に向うて進むべき一切の業作を行といひ、それを修する法規を行法と稱す。○清閑寺の僧正、清閑寺の道我僧正。

第六十段 門に額かくるを、「うつ。」といふは、よからぬにや。勘解由小路の二品禪門は、「額かくる。」とのたまひき。見物の「棧敷うつ。」もよからぬにや。「ひらばりうつ。」などは、つねの事なり。「棧敷構ふる。」などいふべし。「護摩たく。」といふもわろし。「修する。」「護摩する。」などいふなり。「行法」も、「法」の字をすみていふ、わろし。濁りていふと、清閑寺の僧正仰せられき。常にいふことに、かゝることのみ多し。

○門に額をかけるのを「うつ。」といふのは、よくないであらうか。勘解由小路の二品禪門は「額かくる。」と申された。見物の棧敷も「棧敷うつ。」といふのはよくないのであらうか。併し「平張うつ。」などいふのは普通のことであるから、別に差支はあるまいが、「棧敷かまふる。」などいふ方がよからう。「護摩たく。」といふのもよくない。「修する。」とか「護摩する。」などいふがよい。「行法」も「法」の字をすんでいふのはよくない。濁つていふべきものだ、清閑寺の僧正もいはれた。普通についてゐること、斯様に誤つてゐることが澤山にある。

○故實趣味から、物の稱呼に關する世俗の誤をたゞしたものである。

○花、櫻の花。○冬至、太陽が赤道から南の方の最も遠いところへ直射する時で、この時分、我が國では晝が最も短く、夜が最も長い。陰曆では十一月の中にあるし、陽曆では十二月の廿日過にある。○時正、彼岸の中日で、晝夜平分の日。○おほやう、大概。

○遍照寺、嵯峨の廣澤池の附近にある。○承仕法師、寺中の雜役をつとめる法師をいふ。○池、廣澤池。○おどろ、有様。○おどろ、おどろしく、はげしい物音

第六十一段

花の盛は、冬至より百五十日とも○時正の後七日ともいへど、立春より七十五日、おほやうたがはず。

○櫻の花の盛は、冬至から百五十日目頃とも、彼岸の中日から七日後の頃ともいふが、立春から七十五日頃といふ説が、一番たしかで、大概それに外れない。

第六十二段

○遍照寺の承仕法師、池の鳥を、日頃かひつけて、堂の内まで餌をまきて、戸一つをあけたれば、數もしらす入りこもりける後、おのれも入りて、たてこめて、捕へつゝ殺しけるよそほひ、おどろおどろしく聞えけるを、草刈る童聞きて、人に告げければ、村の男ども起りて、入りて見るに、大雁どもふためきあへる中に、法師まじりて、うち伏せ、ねち殺しければ、この法師を捕へて、所より使廳へ出したりけり。殺す所の鳥を、首にかけさせて、禁獄せられにけり。基俊大納言、別當

を形容した詞。○ふためくばたくと音を立て、騒ぐ。○使廳、檢非違使廳。○禁獄、獄舎に入れる。○別當、檢非違使の別當。

○太衝、陰曆九月の異稱。○陰陽のともがら、陰陽寮の役人達。○吉平、主計頭陰陽博士。○占文、占の判断を書いた文。○御記、御

の時になむ侍りける。

○ 遍照寺の承仕法師が、廣澤池の水鳥を、日頃飼ひ馴して置き、堂の内までも餌を蒔いて、戸を一枚だけ明けて置いたところ、水鳥共が、澤山に、堂の内へはいつて来た。そこで、自分も堂内へ入り、戸を閉ぢて、鳥共を捕へて殺して居る物音が、ばげしく聞えたので、近所に居た草菟童が聞きつけ、人に告げた。そこで村人等が来て、堂へはいつて見ると、大雁どもが、ばたくと騒いで居る中に、件の法師が交つて、打倒し、れち殺してゐたから、村人共は、この法師を捕へて、檢非違使廳へつき出したが、檢非違使廳では、この法師が殺した鳥共を、その頭のまはりへかけさせて、獄舎に入れられた。これは、基俊大納言が、別當をしてゐられる時のことであつた。

○ 殘忍酷薄な坊主の殺生沙汰を異聞として掲げたものである。

第百六十三段

太衝の太の字、點うつべからずといふこと、陰陽のともがら、相論のことありけり。もちちか入道、申し侍りしは、「吉平が自筆の、占文のうらにかゝれたる御記、近衛關白殿にあり。點うちたるを書きたり。」と申しき。

記録。

○黙止する、だまつてゐる  
○浮説、根拠もない風説。  
○人の是非、人のよしあしを品評すること。

第百六十四段

世の人、あひ逢ふ時、しばらくも黙止することなし。必ず、ことばあり。そのことを聞くに、多くは、無益の談なり。世間の浮説、人の是非、自他のために、失多く、得少し。これを語る時、たがひの心に、無益のことなりといふことを知らず。

○ 世間の人、人に逢ふと、暫時もだまつてゐるといふことがなく、必ずしゃべるものである。さて、そのいふことを聞くに、大抵は無益の雑談である。世間のことを、とりとめもなく噂をしたり、人のよしあしを品評したりすることは、お互に取りて、損のゆくばかりで、少しも得にはならない。それに、話をしてゐる當人達は、お互の心に、それが無益であるといふことに、氣がつかないでゐる。



◎あづま 東國。◎顯密の僧 顯とは佛説をあらはに説き教へる天台宗、密とは秘密の法を説く真言宗のこと、こゝでは一切の僧をいふ。◎わが俗 自分が本來馴れてゐる習俗。

◎人間の營みあへるわざ 人間が平生してゐる仕わざ。◎雪佛 雪達磨。◎そのかまへをまちて 堂塔の結構が、成就するのを待つて。

世間によくある、無益の雑談に耽ることの愚を告めたものである。

第百六十五段 あづまの人の、都の人にまじはり、都の人の、あづまに行きて、身を立て、また、本寺本山を離れぬる顯密の僧、すべて、わが俗にあらすして、人にまじはれる、見ざるし。

東國人が、都の人の中に立交り、都の人が、東國へ行つて暮し、または、坊主達が、本寺本山を離れて、他宗の中にはいつてゐるなど、すべて、自分が本來馴れて居る習俗にそむき、全くかばつた人々の中に立交つて居るのは、見苦しいものだ。

本來馴れてゐる習俗を脱して、全く毛色の變つてゐる他人の中に立交つてゐるのは、見つともないと告め、自分の境遇特色に順應して行くがよいといふことをすすめたものである。

第百六十六段

人間の營みあへるわざをみるに、春の日に雪佛をつくりて、そのために、金銀珠玉のかざりをいとなみ、堂塔を建てむとするに似たり。そのかまへをまちて、よく安置してむや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること、雪のごとく

なるうちに、いとなみ待つこと、甚だおほし。

人間が平生してゐることを見ると、恰も、春の日に雪達磨を造り、そのために、金銀珠玉の飾り物を用意し、これを安置せんがために、堂塔を建てんとするやうなものである。併し、そんな準備が出来あがるまで、雪達磨は、そのまゝにあるものでなく、とくに消えてしまふから、之を安置することは出来ないのである。人の命も、あると見えて居る中に、下から消えゆくことは、雪の通りであるから、そんなことゝは知らず、いろくな計畫を用意して、待つてゐる人間といふものは、誠に愚なことである。

はかなき人命を雪達磨に比較し、例の人生觀を説いたものである。

第百六十七段

一道にたづさはる人、あらぬ道の席にのぞみて、「あはれ我道ならましかば、かくよそに見侍らじものを。」といひ、心にも思へること、常のことなれど、よにわろくおぼゆるなり。知らぬ道のうらやましく覺えば、「あなうらやまし、などか、習はざりけむ。」といひてありなむ。わが智を取り出で、人に争ふは、角あるものゝ角をかたづけ、

て。◎いとなみ待つこと いろくな計畫を用意して、待つてゐること。

◎あらぬ道のむじろ 自分の専門以外の座席。◎よそに見侍らじものを 傍觀しては居るまいに。◎よにわろくおぼゆる 餘りよいことではない。◎品人の品格。◎なこ 愚。◎いひけたれ

いひけされる。

牙あるものゝ牙をかみ出すたぐひなり。人としては、善にほこらず、ものと争はざるを徳とす。他にまさることのあるは、大なる失なり。品の高さにも、才藝のすぐれたるにても、先祖のほまれにても、人にまされりと思へる人は、たとひ、ことばに出でこそいはねども、内心に、そごばくのとがあり。慎みて、これを忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、わざはひをも招くは、たゞこの慢心なり。一道にも、まことに長じぬる人は、おのづから明に、その非を知る故に、志、常に満たずして、遂に、ものに誇ることなし。

或事柄を専門としてゐる人が、自分の専門以外の座席に臨んで、「あゝ、これが、自分の専門のことであつたら、こんなに傍観しては居るまいに。」と口にもいひ、心にも思ふことは、よくあることだが、これは、餘りよいことではない。自分が知らない方面のことを、そんなに羨しく思つたら、「あゝ羨しい。どうして、自分もあの道を習はなかつたのであらう。」といつてゐる方がよい。自分の勝れて

ゐる智恵を取出して、人と争ふのは、角のある獸が、角を傾けて敵を突き、牙のある獸が、牙をかみ出して、敵を齧すのと同様である。人としては長所にも誇らず、人と争はないのがよい。人として、何か他人にすぐれたところのあるのは、大きな損失である。品格が高尙なことでも、才藝が優秀なことでも、先祖の榮譽あることでも、人よりもまさつてゐると思つてゐる人は、たとひ、そのことを、口に出していはずとも、心に思つてゐることが、既に罪惡である。かやうなことは、かたく慎んで忘れるがよい。他人から見ても、馬鹿にも見え、人にもいひけなされ、禍を招くのも、こんな慢心があるからだ。或事柄に、ほんとうに長じてゐる人は、自然と、自分の缺點を辨へてゐるから、志がいつも満足しないで、物に誇るといふこともないのである。

慢心を戒めたものである。して「他にまさる事のあるは、大なる失なり……人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出で、こそいはねども、内心に、そごばくのとがあり。」といつてゐるところなどは、人の意表に出で、誠におもしろい。著者が得意の壇場であらう。

第百六十八段

年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、「この人の後には、誰にか問はむ。」などいはるゝは○老のかたう

○老のかたうど 老人の味方。○このことにて、この

藝能のことにて。○すいふにわけもなく。○道のあかい。一道の棟梁。○もときぬべくいあらぬ人。彼是と批評をする資格もない人。○わびし。迷惑だ。

どにて、生けるもいたづらならず。さはあれど、それもすたれたるところのなきは、一生、このことにて暮れにけりと、つたなく見ゆ。今は忘れにけりといひてありなむ。大かたは、知りたりとも、すいふにいひちらすは、さばかりの才にはあらぬにやときこえ、「おのづから、あやまりもありぬべし、さだかにもわきまへ知らず。」などいひたるは、なほ、まことに、道のあるじともおぼえぬべし。まして、知らぬこと、知りがほに、おとなしくもときぬべくもあらぬ人の、いひ聞かするを、さもあらずと思ひながら、聞きわたる、いとわびし。

○一事に卓越した才能を持つてゐる老人で、世間の人から、「この人が死んだら、道の奥儀を誰に問はう。問ふ人もない。」などいはる、人は、老人の味方で、生きてゐるもの甲斐がある。さりながら、又思ひやうで、その一生を通じて、これしきの事に、精力を盡して居たのかと思はれることは、なきげないことである。大概の事は、「最早忘れてしまった。」といつてゐるのがよい。一通りのことは知つて居ても、わけもなくいひ散らすのはさほどの才人ではなからうと見える。「自然、

間違もあるだらう。よくは知らぬ。」などいつてゐるのは、一道の棟梁とも思はれるものだ。まして、彼是と批評をする資格もない人が、知らない事を知つたふりして、いひ聞かするのを、さうでもないがと思ひながら、聞いてゐるのは、非常に迷惑な話である。

第百六十九段

「何ごとの式といふことは、後嵯峨の御代までは、いはれざりけるを、ちかき程よりいふことばなり。」と、人の申し侍りしに、建禮門院の右京太夫、後鳥羽院の御位の後、又うちすみしたることをいふに、「世の式も、かはりたることはなきにも。」と書きたり。

○「何式といふことは、後嵯峨天皇の御代までは、いはれなかつたのを、近來いふやうになつた。」と、或人がいつたが、併し、これは間違で、建禮門院の右京太夫が、後鳥羽院御即位の後、再び内裏へ入つて住つたことを、「世の式もかはりたることはなきにも。」と書いてゐるのもよくわかる。

○式。儀式。○建禮門院。右京太夫。高倉帝の中宮、建禮門院に奉仕してゐた、右京太夫といふ女官、藤原伊行の女。○うちすみ。内裏に住むこと。

◎むづかしい、よくない。◎いとほしいげにいはむも、いやさうにいふのも。◎心づきなきこと、氣のすまぬこと。◎なかなか却つて。◎阮籍、晋の代の竹林七賢人の一人。◎青き眼、親愛する目つきをいふ。晋書阮籍傳に「籍字嗣宗、不拘禮教、能爲青白眼對之。及嵇喜來吊、籍作白眼、喜不懼而退、喜弟康聞之、乃齎酒挾琴詣焉、籍大悅、乃見青眼。」とある。◎聞えさせぬか、おたよりをさせぬか

考證的の趣味。

第百七十段

さしたることなくて、人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行きたりとも、そのことはてなば、とく歸るべし。久しくゐたる、いとむづかし。人とむかひたれば、ことば多く、身もくたびれ、心も静ならず、よろづのことさはりて、時をうつす。互のため益なし。いとほしいげにいはむもわろし、心づきなき事あらむ折は、なかなか、そのよしをいひてむ。同じ心に、向はまほしく思はむ人の、つれづれにて、「今しばし、けふは、心静に。」などいはむは、この限にあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。そのこと、なきに、人の來りて、のどかに物語して、歸りぬる、いとよし。又、文も、久しく聞えさせぬばとばかり、いひおこせたる、いとうれし。

ら。◎文も久しく聞えさせれば、久しく御無沙汰をされました。

貝をおほふ人、貝合の遊

第百七十一段

貝をおほふ人の、わが前なるをばおきて、よそ

さしたる用事もないのに、人の許へ行くのはよくないことである。たとひ、用事があつて行いても、それが濟んだら、すぐに歸るがよい。長座をしてゐるのは大いによくないことだ。人と對坐してゐると、自然、物も多くいはなければならぬし、身も疲れるし、心も安靜な譯に行かないで、いろく、差支が出来、無益に時を費し、お互のために、少しも利益にならないのである。併し、いやさうに話をするのもよくない。何か、急用でもあつて、氣の進まぬ折は、却つて、その事情を話して、客を歸す方がよい。さりながら、よく氣の合つた人で、對談してゐたいと思ふやうな人が、ひまでめて、「まあ、いゝでせう。今日は、ゆつくり話しませう。」などいふのは、この限りではない。阮籍は青き眼で親愛の意を示したといふことであるが、かうしたことは、誰にもあることである。氣の合つた人だと、たいした用事がなくて訪問し、暢氣に話をして歸るのも、なか／＼よいものだ。また、別に用向がなくても、手紙で、「久しく御無沙汰をしたから……」などいふことだけいひ寄せて來たのも、非常にうれしいものである。

人と應對する時や、人を訪問した時の心得、又は、人と交際をする上に於ける好悪兩面の事情等を説いたものである。

をする人。○わいな、無理に。○ひじりめ、聖目で碁盤の目の上に記したる九つの點。○立てたる石、向ふにおいてある石。○こいもと、自分の手もと。○清獻公、宋の趙朴といふ人で、その座右の銘に、「行好事莫問前程」といふのがある。よいことをすればよい、先のことば敢へて心配するに及ばぬ。」といふ意味である。○風にあたり云々、本草序に「當風臥濕反責地人於失覆皆癡人也」とある。○その化遠く流れむこと

を見渡して、人の袖のかけ、膝の下まで、目をくばるまに、前なるをば人におほはれぬ。よくおほふ人は、よそまでわりなくとるとは見えずして、近きばかり掩ふやうなれど、多くおほふなり。碁盤のすみに、石をたて、はじくに、むかひなる石をまもりて弾くは、あたらず。わが手もとをよく見て、こゝなるひじりめを、すぐにはじけば、立てたる石、必ずあたる。

萬の事、外にむきてもとむべからず。たい、こゝもとを正しくすべし。清獻公がことばに、「好事を行じて、前程を問ふことなかれ」といへり。世を保たむ道も、かくや侍らむ。内を慎まず、軽くほしきまゝにして、みだりなれば、遠國必ずそむくとき、始めて謀をもとむ。「風にあたり、濕に臥して、病を神靈に訴ふるは、おろかなる人なり。」と、醫書にいへるがごとし。目の前なる人の、愁をやめ、惠をほどこし、道を正しくせば、その化、

その仁徳の感化が、遠く流布すること。○禹の行きて三苗を征す、夏の禹王が、王命に従はない三苗を征伐したが、三十日もかゝつて征服することが出来なかつたので、禹は後悔して軍をおさめて歸り、徳政を布いたところ、三苗は終に、その徳に感じて、服従したといふことである。

遠く流れむことを知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、軍をかへして、徳を布くにはしからざりき。

貝合をする人が、自分の前の方の捨て置いて、外を見わたし、人の袖の影や、膝の下まで目を配る間に、自分の前にあるのを、人にあはせ取られてしまふ。貝合の上手な人は、さう無暗に、よその方まで取るやうには見えないで、自分の近くにあるのばかりを取るやうであるけれども、それで、實は、澤山に合せ取るのである。碁盤の隅に石を立て、弾くのに、向ふにある石を見つめて弾くと、當らないが、自分の手許をよく見て、聖目を狙ひの標準として弾くと、必ず、向ふの石に當るものである。世上一切の事も、遠い方へ向いて求めてはならぬ。たゞ自分の手許を正しくするがよい。清獻公の座右銘にも、「よい事を行つてゆけばよい。先のことば心配するに及ばぬ。」といつてある。世を治むる道も、この通りであらう。内治をぞんざいにし、軽々しく氣儘にして、紊亂せしめて置くと、必ず遠國は、それにつけ込んで叛くし、さて、遠國が叛いた時、狼狽して謀を求めるのは、愚なことだ。醫書に「風に當つたり、濕氣のあるところへ寝たりして病氣になり、神靈に訴へてそれを癒してもらはふとするのは、愚な人である。」と書いてあるのと同じことである。目の前にある人の愁をやめてやり、或は惠を施して

やり、斯くて、正しい道を行つていつたら、その仁徳の感化は、遠方まで流布するのであるが、世には、この道理のわからない人が多い。禹が軍隊を率ゐて三苗を征伐したけれども、更に効果がないので、師をかへし、徳政を布いたところ、三苗は、終に、その徳に感化せられて、服従したといふことである。  
<sup>手許</sup>手許を忘れて、先方ばかりに氣を配つて失敗をするとか、内を治めることを忘れて、外から禍災を招くとかいふことの愚を咎め戒めたもので、例によつて、  
申例も叙説も面白い。

第七十二段

若き時は、血氣、内にあまり、心、ものに動き、情慾多し。身をあやぶめて碎けやすきこと、玉を走らしむるに似たり。美麗を好みて寶を費し、これを棄て、<sup>苦の袂</sup>苦の袂にやつれ、いさめる心さかりにして、ものと争ひ、心に恥ぢうらやみ、好むところ、日々に定らず。色に耽り、情にめで、行をいさぎよくして、百年の身をあやまり、命を失へるためし願はしくて、身のまたく久しからむことをば思はず、すける方に心引きて、長き世がたりともなる。身をあやまつことは、若き時

◎情慾 喜怒憂思悲恐驚を七情といひ、眼耳鼻舌身意を六欲といふが、斯様な感情慾念をさす。◎苦の袂 世捨人などが、やつした姿を形容したもの。◎またく 全く。◎すげる方に心引きて 自分の好む方へついて。◎長き世がたり 後

の世までも、あらぬ名を残すこと。◎あはくおろそかにして 淡泊で、ものに感動することがなく。

のしわざなり。

老いぬる人は、精神衰へ、あはくおろそかにして、感じ動くところなし。心、おのづから静なれば、無益のわざをなさず、身をたすけて、愁なく、人のわづらひなからむことを思ふ。老いて、智の、若き時にまされること、若くして、かたちの、老いたるにまされるが如し。

若い時分には、血氣が内に溢れ、心が物に感動して、いろいろの情慾が起るものである。若い人が冒險なことをして、身を碎くやうになり易いことは、恰も、玉を轉ばすやうなものである。若い人は美麗なものを好んで、寶を多く費し、或は、心機一轉すると、この美麗を好む心を捨て、世を遁れて、苦の衣に姿をやつしてしまふこともある。又、物事に勇む心が盛で、人と争ひ、心の中で恥しく思つたり、人を恨んだりなどして、その好むところは、少しも定らず、日によつて變るのである。或は又、色に耽り、情に感じ、思ふ通りを斷行し、果ては、一生を誤り、一命を失うた世の實例を羨み願うて、一身を安全にして長生しようとは心掛けない。それで自分のすきな事ばかりに心をひかれ、後の世までも、あらぬ

名を残すことにもなるのである。一身を誤るのは、若い時分のことである。老人は、精神衰へて淡泊になり、物に、感動するところがなく、心が、自然、靜であるから、無益な事をしない。自分の身を保護して、自ら心配がなく、人にも面倒をかけないやうなことを思ふ。年がよると、智が若い時分よりもまさつて來るのは、恰も、若い者の容貌が、老人よりもまさつて居るやうなものである。

若者と老人との心理状態を比較して説いたものである。老人の方はありふれたことだが、若者の方は、多情多感にして、極端に變轉するさまを、巧みに叙してある。觀察が鋭くて細かい。

第七十三段

小野小町がこと、きはめてさだかならず。衰へたるさまは、玉造といふ書に見えたり。その書、清行が書けりといふ説あれど、高野大師の御作の目録に入れり。大師は、承和のはじめにかくれ給へり。小町がさかりなること、その後のことにや、なほおぼつかなし。

小野小町が事蹟は、随分曖昧である。小町が衰へた有様は、玉造といふ文に見えて居る。この書は、三善清行が書いたものといふ説もあるけれども、弘法大

◎小野小町 有名なる女流歌人で、古今集に歌が澤山出てゐる。傳記は不詳。◎玉造 玉造小野子壯衰書といふ書。◎清行 三善清行。寛平延喜頃の人で、算道の達者。◎高野大師 弘法大師。◎承和 仁明天皇の御

代の年號。

◎小鷹 鳴、鶉などをとる小さい鷹。◎大鷹 雉をとる大きな鷹。◎氣味ふかき 趣味深き。

師の御作の目録に入れてあるから、或は大師の作かも知れない。大師は承知年中の始頃に死なれた。小町の全盛時代は、その後のことであらうかと思はれるけれども、どうも、はつきりしない。

小野小町に關する考證である。

第七十四段

小鷹によき犬、大鷹につかひぬれば、小鷹にわるくなるといふ。大につき、小を捨つることわり、まことにしかなり。人事おほかる中に、道を樂むより、氣味ふかきはなし。これ、まことの大事なり。一たび道を聞きて、これにこゝろざさん人、いづれのわざか、すたれざらむ。何事をか、いとままむ。恐なる人といふとも、かしこき犬の心におとらむや。

小鷹狩によく役に立つ犬を、大鷹狩に用ふると、最早、小鷹狩には、役に立たなくなるといふことである。大きいものばかりに目をつけ、小さいものを見捨てるやうになるといふ道理は、誠にさうであらうと思はれる。人がしなければならぬ事柄の多い中で、道を樂しむといふこと位、趣味の深いことばない。これがまことの大事である。一度道を聞いて、それに志したものは、どんな事でも、棄

◎心得ぬ 譯のわからぬ。  
 ◎ともあるごとに ちよつとしたことのある毎に。◎すいふに むやみに。◎うらばしき人 しつかりした人。◎をこがましく ばからしく。◎息災なる人 無病の人。◎にいふ うめき。◎わづらひ じやま。◎人の國 外國。◎これらわが國。

てすにけ居られまい。何事も營まれまい。いくら馬鹿者でも、賢い犬の心に劣るやうなことはない。  
 圖 「人事多かる中に、道をたのしむより、氣味ふかきはなし」といふところに眼目があつて、一たび、道の趣味を解することが出来たら、つまらぬ俗事は、致へて氣にするに足らぬといふ意味を説いたものである。

第百七十五段

世にはこゝろえぬ事の多きなり。ともあることには、まづ酒をすゝめて、強ひのませたるを興とすること、いかなるゆゑとも心えず。飲む人の顔、いと堪へがたげに、眉をひそめ、人めを謀りて捨てむとし、遁げむとするをとらへて、ひきとめて、すいふに飲ませつれば、うるはしき人も、忽ちに狂人となりて、をこがましく、息災なる人も、目の前に、大事の病者となりて、前後もしらす倒れふす。祝ふべき日などは、あさましかりぬべし。あくる日まで、頭いたく、ものくはず、によびふし、生を隔てたるやうにして、昨日のことおぼえず。

公 私おほやけたくしの大事をかきて、わづらひとなる。人をして、かゝる目を見すること、慈悲もなく、禮儀にもそむけり。かくからき目にあひたらむ人、ねたく、口惜しと思はざらむや。人の國にかゝるならひあるなりと、これらになき人ごとにて、傳へ聞きたらむは、あやしく、不思議におぼえぬべし。

圖 世の中には、譯のわからぬ事が多い。ちよつとした事にも、第一に酒を勧め、強ひて飲ませて面白がるのは、どういふわけだかわからぬ。飲む人も、苦しさに堪へきれぬやうな顔つきで、眉をひそめ、人目をはかつて捨てようとし、隙を見れば、その場を逃げようとするのを、捕へて引きとめて、むやみに飲ませる。すると厳格な人も、忽ち狂人となりて、馬鹿なまねをし、無病健康な人でも、見る間に、重い病人となつて、前後も知らず倒れ臥してしまふのである。祝ひ事のある日などには、こんなていだらくは、あさましいことである。翌日になつても、頭が痛く物も食はず、酔ひ臥し、世を隔て、居るやうな氣がして、昨日のことも覚えて居ないのである。公私の大事も、それがために十分に果たされず、いろいろ差支を生ずる。人を斯様なひどい目にあはせるといふことは、無慈悲で、禮儀



◎思ひ入りたるさま、分別あるらしく。◎心にくし奥ゆかしい。◎紐、装束の帯や烏帽子の紐等をいふ。  
 ◎はれらかに、あらはに。  
 ◎用意なき氣色、慎重の態度のない様子。◎まばゆからず、恥かし氣のない様子。  
 ◎よからぬ人、下賤の者。  
 ◎顔うちさいげ、顔を仰向け。◎すぢりたる、身をくねらしてをどるをいふ。

にも背いて居る。こんなひどい目にあつた人は、うらめしく口惜しいと思ふに違ひない。若し、こんなことは、我が國にないことで、外國にある習慣であると、傳へ聞いたら、多分、奇怪千萬なことと思ふであらう。

人の上にて見るだに、心うし。思ひ入りたるさまに、心にくしと見し人も、思ふところなく、笑ひのゝしり、ことは多く、烏帽子ゆがみ、紐はづし、脛高くかゝげて、用意なき氣色、日頃の人とおぼえず。女は、額髪はれらにかきやり、まばゆからず、顔うちさいげてうち笑ひ、盃もてる手に取りつき、よからぬ人は、肴とりて、口にさしあて、みづからも食ひたる、さまあし。聲のかぎり出して、おのゝ、歌ひ、舞ひ、年老いたる法師、召し出されて、黒くきたなき身を肩ぬぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへ、うとましくにくし。

人酔うて居るのを見るだけでも、不愉快である。分別のあるらしい人も、酒に酔ふと、分別もなくなり、大聲で笑ひ騒ぎ、べらべらしゃべり、烏帽子もゆがみ、紐もはづれ、裾をまくつて、脛を出し、不謹慎な様子をして、平常の人と

は、思はれぬ位である。女は、額髪をさつぱりとかきあげ、恥かしげもなく、顔を持ちあげて笑ひ、盃を持つてゐる人の手に取りつき、下賤の者だと、肴を取つて、人の口に差當て、又、自分でも食ふ様子は、見られたものではない。聲のあつただけを出して、めいゝ歌つたり、舞つたりし、どうかすると、年をとつた坊主が、その席に召出されて、肩をぬぎ、黒く汚い肌をあらはし、見るに堪へないやうな風で、身をくねらして踊る様子を、面白がつて見る人までが、いやらしいのである。

あるは又、わが身いみじきことども、かたはらいたくいひ聞かせ、あるは、酔ひ泣きし、下さまの人は、のりあひ、いさかひて、あさましく、おそろしく、恥がましく、心うきことのみありて、はては、許さぬものどもおし取りて、縁より落ち、馬車より落ちて、あやまちしつ。ものにも乗らぬきは、大路をよろほひ行きて、築土門の下などにむきて、えもいはぬことども、しちらし、年老ひ、袈裟かけたる法師の、小童の肩をおさへて、聞えぬことどもいひつゝ、よろめきたる、いとがはゆし。かゝ

◎いみじきこと、えらいといふこと。◎かたはらいたく、見苦しく。◎のりあひ、悪口しあひ。◎あやまちしつ、怪我をして。◎ものにも乗らぬきは、馬や車などに乗らない身分の者。◎よろほひ行き、よろめき歩き。◎築地、土塀。◎得もいは

ぬことども、言語道断のことども。○聞えぬこと、聞いて居られぬやうな、みだりがばいこと。○かばい、憐れなものだ。

○百薬の長 漢書に、「夫鹽食肴之將、酒百薬之長。」とある。○憂を忘る、陶淵明の雜詩に、「汎此忘憂物遠」

ることをしても、この世も、後の世も、益あるべきわざならば、いかいばせむ。

○ 或は又、自分がえらいといふことどもを、見苦しくも吹聴したり、或は、酔泣をしたり、下等な人間は、悪口をいひあひ、喧嘩をはじめなどして、きみがわるい。他目ながら、恥かしく、いやなことばかり起り、はては、人が持つてゐるものを、無理に奪ひ取り、縁から落ち、馬や車から落ち、負傷をするものもある。物にも乗らぬ身分の者は、大路をよるめき歩いて、土塀や門の下などに向いて、言語道断のことをし散らし、袈裟かけた老法師が、小童の肩を押へて、聞くにも堪へぬやうなことをいひながら、千鳥足で歩くのも、憐れな様子だ。斯様なことをして、この世も、後の世も、何か利益があるといふのなら、仕方もないが、何の益するところもないのであるから、つまらぬではないか。

この世にては、過おほく、財を失ひ、病をまうく。百薬の長とはいへど、萬の病は酒よりこそおこれ。憂を忘るといへど、酔ひたる人ぞ、過にしうさをも、思ひいでてなくめる。後の世は、人の智慧を失ひ、善根をやくこと、火の如くして、悪をまし、

我遣世情こと見え、古樂府に、「何以忘憂、唯有杜康。」とある。忘憂物、杜康共に酒の異名であらう。○善根、未來の楽しい世に生れ出づべきところの善事の根源。

○五百生の間 梵網經、心地法門に、「若自身造酒器、與人飲酒者、五百世無手、何況自飲。」とある。

○とり行ひたる、酒宴を催ふしたる。○なれなれしがらぬあたり、高貴な方々。○くだもの菓子。○よきやうなるけいして、うつ

よろづの戒を破りて、地獄におつべし。酒をとりて人にのませたる人、五百生が間、手なきものに生るゝ。」とこそ、佛は説きたまふなれ。

○ 酒といふものは、この世では、いろくの過を生じ、財産をなくし、病氣を醸すのである。百薬の長などと稱するけれど、なかくそれどころではなく、萬病は、大抵、酒から起るのである。酒を飲むと、憂を忘れるといふけれども、實は、酒に酔ふと、過去の心配までも思出して、泣くのである。又、後の世ほどうかといふに、酒のために、人間の智慧を失ひ、恰も、火に焼いたやうに、善根をなくし、悪いことばかりふえ、いろくな戒律を破つて、はては、地獄に墮ちてしまふのである。酒をとつて、人に飲ませた者は、五百生が間、手のない者に生れて来るものだ。」と、佛も説いておられる。

かくうとましと思ふものなれど、おのづから捨て難きをりもあるべし。月の夜、雪の朝、花のもとにても、心のどかに物語して、盃いだしたる、萬の興をそふるわざなり。つれくくなる日、思ひの外に、友の入り来て、とり行ひたるも、心なぐさむ。な

くしさうなる人を以て。○  
 かりや 假の宿。○いたう  
 痛む人 下戸で、酒を強ひ  
 られて痛み入る人。○今一  
 つ上少し もう一つ飲め。  
 「まだ盃の上が少しすいて  
 ぬる。もつとつげ。」といふ  
 意。○上戸 好酒家。○あ  
 さい 朝寝。○ほれたる顔  
 ぼんやりした顔。○引き  
 しろひ 引きすり。○かい  
 どり姿 帯をせず、寝まき  
 を手で支へてゐる姿。○う  
 しろ手 後姿。○つきづ  
 きし 似合はし。

れなれしからぬあたりの御簾の中より、御くだもの、御酒など、  
 よきやうなるけはひして、さし出されたる、いとよし、冬、狹  
 き所にて、火にて、ものいりなどして、隔なきとち、さし向ひ  
 て、多く飲みたる、いとをかし。旅のかりや、野山などにて、  
 「御肴なに。」などといひて、芝の上にて飲みたるもをかし。い  
 たうひたむ八の、しひられて、少し飲みたるも、いとよし。よ  
 き人の、とりわきて、「今一つ上少し。」など、のたまはせたるも  
 うれし。近つかまほしき人の、上戸にて、ひしひしと馴れぬる、  
 又うれし。さはいへど、上戸は、をかしく、罪許さるゝものな  
 り。酔ひくたびれて、おさいしたる所を、主人の引きあけたる  
 に、まどひて、ほれたる顔ながら、細きもとどり、さし出し、  
 物も着あへず、いだし持ち、引きしろひて逃ぐる、○かいどり姿  
 のうしろ手、毛生ひたる細脛のほど、をかしくつきづきし。

酒といふものは、かういふ工合に、疎んじ、遠ざくべきものだと思つて居  
 るけれども、また、自然、捨て難い時もあるものである。月の夜止か、雪の朝と  
 か、花の下とかで、親しい友と、心靜かに、物語して、盃を取りがはずのは、非  
 常に興味を添へるものである。たいくつな日、思ひがけもなく、友達が音づれて  
 來た時に、盃のとりやりをするのも、面白い。高貴なる方々の御簾の中から、御  
 菓子や御酒などを、美しさうな人を以て、さし下されたのは、至極結構だ。冬、  
 せまい所で、火で物を煮ながら、隔のない友達が對座して、存分に飲むのも極く  
 面白い。旅の宿屋や、野山などで、「御肴には何がよからう。」などいって、芝の上  
 で飲むのも、非常に趣がある。大變酒をいやがる人が、強ひられて、少しばかり  
 飲んだのも、わけて面白い。又、自分のある人が、自分に對して、「も一つ飲め。  
 まだ、上がすいてゐる。も少しつげ。」など申されるのも、うれしいものだ。親密  
 にしたいと思つてゐる人が、上戸で、ひつたりと親密になるのは、又、うれしい。  
 大酒は、害があるとはいひながら、上戸といふものは、おもしろいもので、多少  
 の誤をしても、その罪は許されるものである。酒に酔ひ疲れて、朝寝をしてゐる  
 所を、家の者に障子を明けられ、まごついて、寝ぼけ顔のまま、細い髪を妙な所  
 へ差出し、着物さへ着合はせず、それを抱へ、引きすつて、逃げて行く、帯もし

●黒戸 宮中の清涼殿の北にある、瀧口の戸の西にある間。●小松の御門 光孝天皇。●たか人 天皇の位に即させられない以前をいふ。●まさなごと 兒戯に類した事。●みかま木 御産木で、薪のこと。

ない寝まきのまゝの後姿の、毛のはへてゐる細い腰などを出した様子などは、おもしろくて、ふさはしいものである。

酒に關する著者の趣味見解を叙したもので、前の方に、そのわかい方面、後の方に、そのよい方面を説いてゐるが、これによると、著者は、絶対に酒を排斥するのでもなければ、また、酒を賞賛する者でもない。趣味の上から観て、だらしない亂醉の情態を斥け、上品で情味のある飲み方には、同情を持つてゐるやうである。文章としては、後の方に、酒の趣を説いてゐるところが、面白い。

第七十六段

黒戸は、小松の御門、位に即かせたまひて、昔、たい人におはしましたし、時、まさなごとさせ給ひしを、忘れたまはで、常に營ませたまひける間なり。みかま木にすゝけたれば、黒戸といふとぞ。

黒戸といふ間は、光孝天皇が、また、御位に即せられない以前に、料理など、兒戯に類したことをなされたのを、御即位の後も、御忘れなく、常に、御料理などをなされた間である。薪を焼く烟で、煤けたので、そこを、黒戸といふさうな。

●黒戸といふ名稱の起源に關する、例の有職趣味。

第七十七段

鎌倉の中書王にて、御鞠ありけるに、雨ふりて後、いまだ庭のかわかざりければ、いかせむと沙汰ありけるに、佐々木隱岐入道、鋸の屑を車に積みて、おほく奉りたりければ、一庭に敷かれて、泥土のわづらひなかりけり。とりためけむ用意、ありがたしと、人、感じあへりけり。

この事を、ある者のかたりいでたりしに、吉田中納言の「乾砂子の用意やはなかりける」とのたまひたりしかば、はづかしかりき。いみじと思ひける鋸の屑、賤しく、異様のことなり。庭の儀を奉行する人、乾砂子をまうくるは、故實なりとぞ。

鎌倉中書王のお家で、蹴鞠が催された時分は、丁度雨が降つた後で、また、庭が乾かなかつたので、どうしたものかと、一同、相談をしてゐられると、佐々木隱岐入道が、鋸の屑を車に積んで、澤山に奉つた。そこで、それを庭一面に敷き散らしたので、絶えて、泥で、着物などを汚す心配はなかつた。日頃、佐々木

●鎌倉中書王 中務卿宗尊親王。後嵯峨天皇の皇子。●御鞠 蹴鞠の御遊。●佐々木隱岐入道 佐々木太郎左衛門源政義。●一庭 庭一面。●とりためけむ 日頃からとりためて置いた。●ありがたし 奇特だ。●吉田中納言 萬里小路中納言藤原藤房ならむといふ。●いみじ 氣が利いてゐる。●まうくる 設備する。

◎内侍所 三種の神器の一なる、神鏡を納められた御殿。◎うちなる 内裏に居る。◎畫御座の御劔 清涼殿の主上の御座を畫御座といひ、その御側にある劔を畫御座の御劔といふ。◎典侍 内侍所に仕へ、供奉、奏請、宣傳等のことを司る

が、鋸屑をとりためて、用意をしてゐたのは奇特だといつて、人々が感心した。この事を、或人が、後で話してゐたのを、吉田中納言が聞きつけて、「佐々木には、乾いた砂の用意はなかつたものと見える。」といはれたので、人々は恥かしく思つた。成るほど、氣がきいてゐると思つてゐた鋸屑は、乾いた砂に比べると、賤しくて、異様に感ぜられるものである。庭の世話をする人は、乾いた砂を用意して置くといふのが、故實であるさうだ。

國有職公事趣味から、蹴鞠の設備に關する故實を説いたものである。

第七十八段

ある所の侍ども、内侍所の御神樂を見て、人に語るとして、「寶劔をば、その人ぞ持ち給へる。」などいふを聞きて、うちなる女房の中に、「別殿の行幸には、畫御座の御劔にてこそあれ。」とのびやかにいひたりし、心にくかりき。その人、ふるき典侍なりけるとかや。

或所の侍共が、内侍所の御神樂を拜見し、それを人に話して聞かせるのに、「あの時は、寶劔を、某殿が持つてゐられた。」などいふのを、そこに居た内裏の女房の一人が聞いて、「別殿へ行幸なされる時分お持ちになつたのは、寶劔ではなく

女官。

◎入宋 支那の宋時代に、かの國へ渡るをいふ。◎沙門 僧侶をいふ。◎道眼上人 兼好と同時代の人。◎一切經 大藏經、七十卷。◎首楞嚴經 中印度那蘭陀大道場經といふ。十卷あり。◎那蘭陀寺 天竺にある寺の名。◎江帥 大江匡房。太宰帥であつたから、江帥と稱す。◎西域傳 玄奘三藏が天竺へ渡つた時の記録で

て、畫御座の御劔であります。」と、小さい聲で、いつたのは、奥ゆかしかつた。さて、この女房は、内侍所に永年奉仕してゐる典侍であつたといふことである。例の公事趣味で、よく知らないことを、輕辛にいやつてはならぬといふ意を含めて居る。

第七十九段

入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり、やけ野といふ所に安置して、ことに、首楞嚴經を講じて、那蘭陀寺と號す。そのひじりの申されしは、『那蘭陀寺は、大門、北むきなり。』と。江帥の説として、いひ傳へたれど、西域傳、法顯傳などにも見えず。さらに、所見なし。江帥は、いかなる才覺にて申されけむ、おぼつかなし。唐土の西明寺は、北むき、勿論なり。」と申しき。

宋國へ渡つて來た道眼上人といふ坊さんが、彼の國から一切經を持つて歸り、六波羅附近のやけ野といふところへ安置して、その中でも、特に、首楞嚴經といふのを人に講釋してきかせ、その寺をば、經文に因んで、那蘭陀寺と稱した。この坊さんは、「那蘭陀寺は、大門が北向であるといふことを、大江匡房の説として、

十二卷ある。大唐西域記ともいふ。◎法顯傳、法顯三藏が印度へ渡つた時の記録。◎才覚考へ。◎西明寺、寺那の長安にある寺。

◎左義長、三穂打で、穂打を三つ立て、もたせ合つてゐる形をいふ。◎ぎぢやう、穂杖で、木で造つた穂を打つ杖。◎眞言院、後七日の御修法を行はれる道場。◎神泉苑、二條大宮にある苑庭。◎法成就の池、弘法大師が雨乞したところ。◎讃岐典侍が日記、讃岐典侍は、堀川天皇の官女で、

今もいひ傳へて居るけれども、そんなことは、西域傳や法顯傳などにも見えないし、その他にも所見がない。匡房は、どういふ考で申されたのであらうか、どうも合點が行かぬ。唐の西明寺は、勿論、北向である。」と申された。

◎佛寺に關する考證の問題である。

第百八十段 左義長は、正月にうちたるを、眞言院より神泉苑へ出して、焼きあぐるなり。「法成就の池にこそ。」と、はやすは、神泉苑の池をいふなり。

◎左義長は、正月にうつた穂杖を、眞言院から神泉苑へ出して、焼きあぐるこゝから起つたものである。その時、法成就の池にこそ。」とばやす例になつて居るが、これは、神泉苑の池を稱したものである。

◎左義長の由來を説いたもので例の考證趣味。

第百八十一段 「降れ降れこ雪、たんばのこ雪。」といふこと、米搗き、篩ひたるに似たれば、粉雪といふ。「たまれこ雪。」といふべきを、誤りて、「たんば。」とはいふなり。「垣や木のまたに。」

新勅撰集の作者。その日記は三卷ある。

◎四條大納言隆親、權大納言檢非違使の別番たりし人。◎からざけ、干鮭。◎供御天皇の御食膳。◎あやしきもの、つまらぬもの。◎なでふ、いかでか。

と歌ふべしと、あるものしり申しき。昔よりいひけることにや。鳥羽院、幼くおはしまして、雪のふるに、かく仰せられけるよし、讃岐典侍が日記に書きたり。

◎「降れ降れこ雪、たんばのこ雪。」といふのは、雪の降るさまが、米を搗いて、それを篩ふときの様子に似て居るところからして、粉雪と稱するのである。元來は、「たまれ粉雪。」といふべきを、誤つて、「たんばのこ雪。」といふのである。さて、その次は、「垣の木のまたに。」と唄ふべきものと、或物知の人がいつた。これは、昔からいつたことであらうか、鳥羽院が御幼少の頃、雪の降るのを御覽じて、この唄を御唄ひになつたといふことが、讃岐曲侍日記に書いてある。

◎童謡に關する考證である。

第百八十二段 四條大納言隆親卿、からざけといふものを供御に參らせられたりけるを、「かくあやしきものを、參るやうあらじ。」と、人の申しけるを聞きて、大納言、「鮭といふ魚、參らぬことにてあらむにこそあれ、鮭のしらぼし、なでふ、ことかあらむ。鮭のしらぼしは、參らぬかは。」と申されけり。

●人をやぶらせ 人を傷害させ。●律のいましめ 法律の禁ずるところ。既牧律に「凡馬牛及犬有觸舐咬人而記號檢繫不如法、若有狂犬不殺者、答四十」とある。

四條大納言隆親卿が、千鯉といふものを、主上の御食膳に上せられたのを見て、或人が、「かやうな、つまらぬものを、主上へ差上ぐべきではない。」といふと、大納言は、「鯉といふ魚を召しあがらぬ程ならば、千鯉も召しあがらぬであらうが、生鯉に召しあがつておられることなれば、鯉のしらぼしを、どうして、召しあがれないことがあらう。現に、鮎のしらぼしも、召しあがつておられるではないか。」と申された。

これも公事趣味。

第百八十三段

人つく牛をば角をきり、人くふ馬をば耳をきりて、そのしるしとす。しるしをつけずして、人をやぶらせぬるは、ぬしのとがなり。人くふ犬をば養ひ飼ふべからず。これみなどがあり。律のいましめなり。

人を突く牛は、角を切り取り、人にくひつく馬は、耳を切り取つて、そのしるしとする。しるしをつけなくて、人を傷害させるのは、持主の罪である。人にかみつく犬をかふてはならぬ。これらは、何れも罪となるので、法律に禁ぜられてある。

家畜の取締に關する記事である。

●相摸守時頼 鎌倉幕府五代の執權、北條時頼で、後出家して最明寺入道といつた。●松下禪尼 北條修理亮時氏の室。●守を入れ 相摸守時頼を、禪尼の亭へ招待する。●明障子 紙で張つた障子。●城介 秋田城介。●經營 世話をする。●さわさわ さつぱりと。●修理 修繕。●心づけ 心得させむ。●ありがたかりけり 感心なことであつた。●たゞ人 尋常の人。

第百八十四段

相摸守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝことありけるに、すゝけたる明障子のやぶれば、かりを、禪尼、手づから、小刀して切り廻しつゝ張られければ、兄の城介義景、その日の經營して候ひけるが、「賜りて、某男に張らせ候はむ。さやうのことに心得たるものに候ふ。」と、申されければ、「その男、尼が細工に、よもまさり侍らじ。」とて、なほ一間づつ張られけるを、義景、「みなを張りかへ候はむは、はるかにやすく候ふべし。またらに候ふも、見ぐるしくや。」と、重ねて申されければ、「尼も、後はさわさわと、はりかへむと思へども、今日ばかりは、わざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して、用ゐることぞ、若き人に見ならはせて、心づけむためなり。」と申されける、いとありがたかりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども、聖人の心にかよ

へり。天下をたもつほどの人を、子にてもたれける、誠に、た  
い人にはあらざりけるとぞ。

相摸守時頼の母は、松下禪尼といふ人であつた。或時、時頼をその亭へ招待せられることがあつたが、その時、煤けてゐる明障子の破れ目を、禪尼が自分で、小刀をもつて切りまはして、切張をしてゐた。然るに、禪尼の兄にあたる秋田城介義景が、たまくこの日に來て、いろく世話をしてゐたのが、この様子を見て、「およしなさい。某といふ男に命じて、張らせませう。某は、こんな仕事を、よく心得て居ますよ。」と、いふと、尼は、「その男の仕事とて、よもや、この尼が細工にまさりは致しますまい。」と答へながら、たほ、一間づゝ切張にせられるので、義景は重ねて、「そんなに面倒な切張をするよりも、すつかり張りかへた方が、すつと樂でせう。それに、切張して、古いところと、新しいところと、疵になるのは、見苦しいものですよ。」といつた。尼は再び之に答へて、「尼も、後では、さつぱりと、皆張りかへるつもりではおますが、今日だけは、わざと、かうしておくのです。物といふものは、破損したところだけを、修繕して、用ふべきものだと、いふことを、若い時頼に見ならひ、心得させんためです。」といつたさうなが、まことに感心なことである。世の中を治むる道は、儉約がらとである。女性では

◎城陸奥守泰盛、秋田城介  
義景の三男。◎さうなき  
無雙の。◎しきみか、鬨で、今  
いふしきみ。◎かばかり  
これほど、

あるけれども、禪尼の心は、聖人の心と趣を同じうしてゐる。天下を支配するは  
すくすくの人を、子にてもたれただけあつて、流石に、禪尼はなみくの人ではなかつた  
といふことである。

儉約の大切なる所以を説くもので、「世を治むる道、儉約をもととす。」といふ  
ところに眼目がある。

第百八十五段

城陸奥守泰盛は、さうなき馬乗なりけり。

引き出させけるに、足をそろへて、しきみを、ゆらりと越ゆる  
を見ては、「これは、いさめる馬なり。」とて、鞍をおきかへさせ  
けり。又、足をのべて、しきみに蹴あてぬれば、「これは、にぶ  
くして、あやまちあるべし。」とて、乗らざりけり。道を知らざ  
らむ人、かばかり恐れなむや。

城陸奥守泰盛は、雙なき馬乗の名人であつた。馬を庭前に引き出させる時分  
に、馬が、足をそろへて、鬨をひらりと飛び越ゆるのを見ては、「これは、いさん  
である馬だ。」といつて、鞍を、他の馬に置きかへさせ、その馬へは乗らなかつた。  
又、馬が、足をのべて、鬨に蹴あてると、「これは、にぶい馬であるから、あやま



◎こほきもの 強いもの。  
 ◎あらそふべからず かなはぬ。  
 ◎秘藏のこと 肝要なこと。

ちが出来てあらう。」といつて、そんな馬にも乗らなかつた。その道を知らない人であつたら、何で、かやうに恐れようぞ。彼は、その道をよく知つてゐたから、かく恐れて、よく氣を配つたのである。

◎乗馬の名人の話を聞いて、道を知るといふことの尊い所以を説いたものであつた。道を知らざらむ人、かばかり恐れなむや。」といふのが、一段の趣旨である。

第百八十六段

吉田と申す馬乗の、申し侍りしは、「馬ごとにこはきものなり。人の力、あらそふべからずと知るべし。乗るべき馬をば、よく見て、つよきところ、弱きところを知るべし。次に轡鞍の具に、あやうきことやあると見て、心にかゝることあらば、その馬を走すべからず。この用意を忘れざるを、馬乗とは申すなり。これ秘藏のことなり。」と申しき。

◎吉田といふ馬乗が「馬といふものは、強いものだ。人間の力では到底、それにはかなはぬものと思つておなげばならぬ。馬に乗るには、まづ、それをよく観察して、その強い點と、弱い點とを見分け、次に、轡や鞍のやうな馬具に、危いとこほはないかといふことをしらべ、若し、少しでも氣にかゝることがあつた

ら、その馬には乗らないがよい。この用意を忘れないのを、眞の馬乗とは申すので、馬乗には、これが一番肝要なことである。」といつた。

◎前段に同じやうな事柄で、道に達した人の用意周到なることを説いたものであるが、この心掛は、うつして以て、世間百般のことに應用すべきものであらう。

第百八十七段

よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、  
 ◎堪能の非家の人にならぶ時、必ずまざることは、たゆみなくつゝしみて、軽々しくせぬと、偏に自由なるとの、ひとしからぬなり。藝能、所作のみにあらず、大かたのふるまひ、心づかひも、おろかにして謹めるは、得の本なり。巧にしてほしきまゝなるは、失の本なり。

◎どの道に於ても、それを専門にしてゐる人は、たとひ未熟であつても、上手でありながら専門家でない人と、並んで競争をする場合には、必ず勝るものである。これは、専門家の方は、絶えず、その道に心を傾け、軽々しくしないのと、素人の方は、一向慎重な心掛がないのと、大いに趣を異にしてゐるところから、来たものである。藝能や所作ばかりでなく、大概の振舞、心掛も、愚でつゝしみの

◎不堪 未熟なこと。  
 ◎堪能の非家 その道に達してゐて、實は、それを専門にしてゐない人。  
 ◎所作 わざ。

- ◎因果のことわり 因果應報の道理。◎たつき 手段。
- ◎導師 佛事や説法のととき、主となる僧。◎桃尻 尻の落着かぬさまをいふ。◎むけに一向に。◎檀那施主。◎すさまじく 面白からず。
- ◎早歌 後世の小唄の類。
- ◎増に入る 上手になる。

深いのは、利益を得ることになるし、器用で氣儘なのは、損失を招くことになるものだ。

魯鈍篤實は、巧慧放縱に優るといふ趣意を説いたものである。

第百八十八段

あるもの、子を法師になして、學問して、因果のことわりをも知り、説經などして、世渡るたつきともせよといひければ、教のまゝに、説經師にならむために、まづ、馬に乗り習ひけり。興、車もたぬ身の、導師に請せられむ時、馬など迎へにおこせたらむに、桃尻にて落ちなむは、心うかるべしと思ひけり。つぎに、佛事の後、酒などすゝむることあらむに、法神の、むげに能なきは、檀那すまじく思ふべしとて、早歌といふことを習ひけり。二つのわざ、やうやう、境に入りければ、いよいよ、よくしたくおぼえて、たしなみけるほどに、説經習ふべき際なくて、年よりにけり。

或人が、その子を法師にして、これから學問をして、因果應報の道理をも知

り、説經などして、渡世の手段とするがよい。といひ渡したので、子は、その教の通りに、説經師になるために、まづ、馬に乗ることを習つた。これは、興や車などを持たない身分であるから、導師などに請ぜられ、馬などで迎に來られた場合に、桃尻で、馬から落ちるやうなことがあつては困るといふ懸念があつたからである。次には、佛事の後で、酒などをすゝめらるゝやうな場合に、法師が、一向に藝がないのは、施主も面白くならうと思つて、早歌といふことを習つた。さて、この二つのわざが、だん／＼上手になり、興味が出て、稽古を勵んであるうちに、とう／＼説經を習ふべき暇がなくて、年をとつてしまつた。

この法師のみにあらず、世間の人、みな、このことあり。若きほどは、諸事につけて、身を立て、大なる道をも成し、能をもつぎ、學問をもせむと、行末久しくおられます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひて、うち怠りつゝ、まづ、さしあたりたる、目の前のことのみにまぎれて、月日を送れば、こと／＼なす事なくして、身は老いぬ。終に、ものゝ上手にもならず、思ひしやうに身をもたず、悔ゆれども、とり返さるゝ齡

- ◎あゝあゝこと ありたいと豫期する事。◎世をのどかに思ひて 世の中を、いつまでも生存してゐられるものゝやうに思つて。

ならねば、走りて坂をくだる輪の如くに衰へゆく。

○この法師ばかりでなく、世間の人には、すべて、斯様なことがある。若いうちには、いろくな事につけて、身を立て、その道に大成し、藝能をも習ひ、學問をもしようなど、將來ありたいと豫期する事どもを、心にはかけておながら、世の中を、いつまでも生きておられるものやうに、暢氣に考へて、怠りながら、まづ、差當り、目前のことにばかり取紛れて、時日を過してゐると、何一つ出来ないうちに、身は、何時しか、年をとつてしまふ。かくて、終に、物の上手にもならず、思つてゐた通りに立身も出来ず、今更、取りかへしのつくやうな年でもないから、丁度、走つて坂を下る輪のやうに、どん／＼衰弱して行くのである。されば、一生のうち、むねとあらまほしからむことの中に、いづれか勝ると、よく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひすて、一事を勵むべし。一日の中、一時のうちにも、幾多のことの來らむ中に、すこしも益のまさらむことを營みて、その外をばうちすて、大事をいそぐべきなり。いづかたをもすてじと、心にとりもちては、一事も成るべからず。

○むねとあらまほし、主としてありたいこと。○心にとりもちては、心に執着しては。

○それにとりて、その碁のことにつけて。○多くまさらぬ石、いくらもちがばぬ石。

○それで、人は、一生のうちで、主としてありたい事の中、どれが一番大切かと、よく思ひくらべ、第一と思ふ事をきめて、その外のことは一切捨て、しまひ、その事だけを勵むがよい。一日の中、一時の中でも、なすべきことが澤山に出来る中で、少しでも益の多いことをして、その多いことを打捨て、眼目とする大事を急いでやるがよい。どれも捨てまいと何事にも心を執着しては、一事も出来るものではない。

たとへば、碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人に先だちて、小を棄て、大につくが如し。それにとりて、三つの石をすて、十の石につくことはやすし、十を棄て、十一につくことは難し。一つなりともまさらむ方にこそつくべきを、十までなりぬれば、惜しくおぼえて、多くまさらぬ石にはかへにくし。これをも棄てず、かれをも取らむと思ふ心に、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。

○たとへば、碁を打つ人が、一手も無駄にせず、人に先だつて、小さいところを捨て、大きいところに力を注ぐやうなものである。その碁をいつて見ると、三

◎門、東山で訪問すべき家の門。◎日をさぬ事、日限のない事。

つ石を捨て、十の石へ手をつけることは容易である。併し、十を捨て、十一に手をつけることはむづかしい。一つでも数の多い方へ手をつくるが得策であるけれども、十までなると、それを捨てるのが惜しくなつて、いくらも違はぬ石とは、かへにくいのである。これも棄てたくない、あれも取りたいと思ふ心では、あれも取ることが出来ず、これも失つてしまふことになるのである。  
京に住む人、いそぎで東山に用ありて、既に行きつきたりとも、西山に行きて、その益まさるべきことを思ひ得たらば、門より歸りて、西山へ行くべきなり。こゝまで来つきぬれば、この事をば、まづいひてむ。日をさぬ事なれば、西山のことは、歸りて又こそ思ひたゝめと思ふ故に、一時の懈怠、すなはち、一生の懈怠となる。これをおそるべし。

◎京に住んでゐる人が、急用あつて、東山に居る或人の家を訪問に行つたとしても、そこへ行くよりも、西山の或家へ行つた方が、益が多いといふことに氣がついたら、その家の門口からでも引返して、西山へ行くがよい。それを、折角、こゝまで来たからして、この用事を先づ果さう、日限もないことなれば、西山の

ことは、また次のことにしようなど思ふことがある。すると斯様なところから、一時の懈怠が出来、やがて、それが一生の懈怠ともなるのである。これは餘程氣を附けなければならぬことである。

◎渡邊のひじり、攝津國、渡邊に居た法師。◎登蓮法師、當時、歌をよくした人。傳記は不詳。◎無下の事、つまらぬ事。◎ゆいしくありがたうおぼゆ、えらいと感心した。◎敏きときばすなはち功あり、論語「陽貨篇に「敏則有功」とある。◎困縁、眞理。

一事を必ず成さんとおもはひ、他の事の破るゝをも痛むべからず。人のあざけりをも恥つべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。人のあまたありける中にて、あるもの「ますほのすゝき、ますほのすゝきなどいふことあり。渡邊のひじり、この事を傳へ知りたり。」と語りけるを、登蓮法師、その座に侍りけるが、聞きて、雨の降りけるに、「簞笠やある貸したまへ、かの薄のことならひに、渡邊の聖のがり尋ねまからむ。」といひけるを、「あまりに物さわがし。雨やみてこそ。」と、人のいひければ、「無下の事をも仰せらるゝものかな。人の命は、雨のはれまを待つものかは、我も死に、聖もうせなば、尋ね聞きてむや。」とて、はしり出て行きつゝ、習ひ侍りにけりと、申し

事は復つて、敏達  
行へば功あり

傳へたるこそ、ゆゑしくありがたうおぼゆれ。「敏き」とは、すなはち功あり。」とぞ、論語といふふみにも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

○一事を必ず成し遂げようと思つたら、他の事が駄目になるのを心配してはならぬ。他人が嘲つても、それを恥かしいと思つてはならぬ。萬事にかへなければ、一つの大事は成就するものでない。人が澤山集つてゐる中で、或人が「ますほの薄、ますほの薄などいふ薄の種類があつて、渡邊にゐる聖が、この區別を知つてゐられる。」と話したのを、その座に居た、登蓮法師といふ人が、之を聞いて、折しも雨が降つてゐたにも拘はらず「蓑笠があつたら貸して下さい。その薄のことを習ひに、渡邊の聖の許へ尋ねて行かう。」といった、すると、人々は、之を押しとめて「それは、餘りに性急じや。無理に、雨の降る中を出かけなくとも、雨がやんでから、ゆつくりおいでなすつたらいいでせう。」といった。けれども、登蓮法師は「譯のわからぬ事をいひなさるな。人の命といふものは、雨の晴間を待つものではありませぬぞ、雨がやむのを待つてゐたら、わしも死に、聖も死なれるかも知れない。そうしたら、もう、薄のことを聞くことも出来はしない。」といつて、雨を冒して出かけ、聖に就いて、薄のことを習はれたといふことであるが、

まことに感心なことだと思ふ。「敏き」ときは、すなはち功あり。」と論語といふ書にもいつてある。この薄のことを、登蓮法師が、早く聞きたいと思つたやうに、人は、一大事の眞理を、はやく知らうと心掛くべきである。

○この段は、われわれの生涯には、なすべき事柄が澤山にあるが、その中で、一番大切な事柄に全力を注ぎ、その他は捨てるがよいといふ趣意を説いたもので、「一生の中に、むれとあらまほしからむことの中に、いづれかまさと、よく思ひくらべて、第一の事をあんど定めて、その外は思ひ捨て、一事をばげむべし。」といふところに眼目がある。而して、この事を説明するに、いろ／＼な面白い實例を引擧してあるが、最初に擧げてある説經師志願の例が、中にも出色である。

第百八十九段

今日は、その事をなさむと思へど、あらぬいそぎ、まづ出で来て、まぎれ暮し、待つ人はさはりありて、たのめぬ人は來り、頼みたるかたのことは違ひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。わづらはしかりつることは、ことなくて、やすかるべきことは、いと心ぐるし。日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年のことも、かくの如し、一生の間も、

○あらぬいそぎ、思ひがけなき急用。○さほりて、差支あつて。○たのめぬ人、待つておぼしなかつた人。○かいて、前以て。○あらまし、豫期。

またしかなり。かねてのあらまし、皆、違ひゆくかと思ふに、おのづから、違はぬこともあれば、いよいよものは定め難し。不定と心得ぬのみ、まことに違はず。

今日、かういふ事をしようと思つてゐると、思ひがけない急用が出来、それに取紛れて暮し。待つてゐる人は、差支があつて来ず、待つてもなかつた人が、やつて来たり、心あてにしてゐた事が出来なくて、思ひもやらぬことが出来たり、面倒な事が無事に解決し、何でもない事がむつかしくなつて心を痛めたりなどして、毎日過ぎ行く有様は、かくの如く、なか／＼豫期通りには運ばぬのである。而して、一年の事も亦この通りであるし、一生の間も亦この通りである。前以て豫期してゐた事は、皆、かやうにして、違つてしまふかといふに、その中には、違はぬこともあるから、いよく、物事といふものは、豫め之を定めるといふことは出来にくいのである。たゞ、世間の事は一切不定であると考へることだけは眞理で、聊も違はないのである。

人生の事物は一切不定で、一つとしてあてにならぬ。それで、人事はすべて不定だと思つてゐれば間違は起らぬといふ事を説いたもので、「不定と心得ぬのみ、まことにたがはず。」と道破したところなどは、人の意表に出で、なかく

面白い。

第九十段

妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。いつもひとり住みにてなど聞くこそ、心にくけれ。誰がしが聲になりぬとも、又、いかなる女をとりすゑて、あひ住むなど聞きつれば、むげに心おとりせらるゝわざなり。ことなることなき女を、よしと思ひ定めてこそ、添ひゐたらめと、いやしくも推し量られ、よき女ならば、この男こそ、らうたくして、あが佛と、まもり居たらめ、たとへばさばかりにこそと、おぼえぬべし。まして、家の中を行ひをさめたる女、いと口惜し。子などいできて、かしづき愛したる、心うし。男なくなりて後、尼になりて、年よりたるありさま、なきあとまで、あさまし。いかなる女なりとも、明けくれ見むには、いと心づきなく、にくかりなむ。女の爲も、中空にこそならめ。よそながら、時々、かよひ住まむこそ、年月経ても、絶えぬなからひともならめ。

◎心にくけれ 奥ゆかしい。  
◎とりすゑて めとりて。  
◎むげに 非常に。◎ことなることなき女 普通の女。  
◎らうたくて かいがつて。  
◎あが佛 わが本尊といふやうに、女を大切にするをいふ。  
◎かしづく 大事に養ふ。  
◎心づきなく うとましく。  
◎中空にこそならめ どつちつかず、不安の情態になるであらう。  
◎よそながら 一所に住まないで。  
◎なからひ間柄。  
◎あからさまに かりそめ

に。

お  
夕

あからさまに来て、とまり居などせむは、めづらしかりぬべし。

妻といふものは、男が持つべきものではない。いつも獨身で暮してゐるなどいふことを聞くのは、奥ゆかしい。誰の聲になつたとか、かういふ女を娶つて、一緒に住んでゐるなどいふことを聞くと、ひどく、その男の價値を落すやうな氣持がする。普通の女を、いゝ女だと思つて、つれ添ふたのであらうと推量すると、その男が卑しく感ぜられ、よい女を娶つたとすると、その男は、女をかはいがつて、守本尊のやうに大切にしておるであらう位に思はれ、やはり、その男を見下げる氣になる。まして、家の中を、自分一人できりまはして行く女は、殊に氣障に感ぜられる。子供などが出来て、それを育て愛してゐるのも、うるさい。夫が死んだ後、妻が尼になつて、年寄つた様子も、見苦しい。どんなによい女でも、朝夕一緒に居ると、自然にうとましくなつて、可愛味もなくなるであらうし、女のためにも、どつちつかすの不安の情態になるであらう。一所に住まないで、時々通つた方が、年月経ても、申絶しない間柄となるであらう。一寸来て、とまりこんでゐるなどは、珍しくて面白いであらう。

これは、舊者が無妻主義から出た見解で、無論、趣味の上から、殆ど空想的にいつたものである。随つて、これを人生問題、道德問題の立場から、眞面目に

攻撃するのは、少し酷であらう。

第百九十一段

夜に入りて、ものゝはえなしといふ人、いと口をし。萬の物のきらかざり、色ふしも、夜のみこそめでたけれ。晝はことそぎ、およすけたる姿にてもありなむ。よるはきらかに、花やかなる装束、いとよし。人のけしきも、夜の火影ぞ、よきはよく、ものいひたる聲も、暗くて聞きたる、用意ある、心にくし。にほひ、ものゝ音も、たゞ、夜ぞ、ひときはめでたき。

さしてことなることなき夜、うちふけて、參れる人の清げなるさましたる、いとよし。若きとち、心とめて見る人は、時をもわかぬものなれば、ことにうちとけぬべき折ふしぞ、けはれなく、引きつくりはまほしき。よき男の、口くれてするし、女も、夜ふくるほどに、すべりつゝ、鏡とりて、顔などつくりひ出づること、をかしかれ。

●ものゝはえ 物の光彩。  
●きらかざり 裝飾。●色ふし 色調。●ことそぎ 省略する。●およすけたる姿 ませてじみな姿。●けしき 顔色。●用意ある したしなみのある。●心にくし 奥ゆかしい。●さしてことなることなき夜 さう別段に面白いといふこともない夜。●けはれなく 公私の別なく、どんな夜でも。●ゆするし 髪を洗つて梳くこと。●すべりつゝ 貴人の前を退出しつゝ。

夜になると、物の光彩がなくなるといふ人があるが、それは間違である。どんな物でも、その装飾や色調等のよく見えるのは、夜である。晝は、ませてじみな風をしてゐてもいいが、夜は、華美な装束をしたのがよい。人の顔色でも、夜、燈火の影で見ると、よいのは、一層よく見え、物をいつた聲でも、たしなみのあゝる聲が、暗いところから聞えるのは、まことに、奥ゆかしい。香でも、音楽でも、夜は一層の妙味がある。別に、これといふかばつたこともない夜、深更になつてから、訪問して来た人が、さつぱりした姿をしてゐるのは、ことによく見える。若い者同志で、他人の姿に氣をとめて見るといふ傾向のある人に對しては、朝夕相交はる中で、さして、たしなまずともよい時分でも、油断なく姿をととのへておきたいものである。よい男が、日暮れてから、髪を洗つて梳いてゐるのや、女も、夜がふけてから、貴人の前を退出し、鏡をとつて、化粧などをしてゐるのは、風情のあるものである。

物事のあらはなのを排するといふ例の立場から、夜の趣致を推賞したもので、感想も文辭も、印象的で、非常におもしろい。

第百九十二段

神佛にも、人のまうでぬ日、夜まゐりたる、よし。

神社や佛寺でも、人が參詣しない日、而も、夜參るのがよい。  
前段につづけて、神佛への參詣も、人氣のない夜の方が趣があるといつたものである。

第百九十三段

くらき人の、人をはかりて、その智をしれりとおもはむ、更にあたるべからず。拙き人の、碁うつことばかりにさどく、たくみなるは、かしこき人の、この藝におろかなるを見て、おのれが智に及ばずとさだめて、よろづの道のたくみ、我道を人の知らざるを見て、おのれ勝れたりと思はむこと、大なるあやまりなるべし。文字の法師、暗證の禪師、互にはかりて、おのれにしかずと思へる、共にあたらず。おのれが境界にあらざるものをば、争ふべからず。是非すべからず。

闇 闇愚なる人が、他人の智恵を推測して、この智恵の程度を知つてゐると思つてゐても、それは當になるものでない。愚な人で、碁を打つことだけ上手な人は、賢い人で、碁の下手なのを見ると、この人は、自分ほどに智恵がないと思ひ定めてしまふが、斯様に、どの道に於ても、斯道の達人が、人がその道を知らないの

くらき人 闇愚なる人。  
人をはかりて 人の智恵を推測して。  
たくみ その道の達人。  
文字の法師 教相をならひ、學問にあつても、座禪の工夫を知らぬ法師。  
暗證の禪師 座禪工夫に通、學問にくらい法師。



◎達人 事物の道理に通達せる人。◎はかる いつはる。◎なほわづらはしく 一層うそをつけ加へる。◎おぼつかなく 疑はしく。◎つやつや 少しも。◎推し出して 推量して。◎おぼつかない 不明なところがなく、よく知りぬいてゐる人。◎とかくのこ

を見て、自分の方が、その人よりもえらいと思ひ込むのは、大變な誤である。文字の法師と、暗證の禪師とが、互に、先方の智恵をはかつて、それ／＼自分かえらいと思つてゐるのは、どちらも當つてゐない。自分の知らないことには、争つてはならぬ。又、是非得失の批評をしてはならぬ。  
 註 自分と専門を異にしてゐる人を自分の専門を以て推測し、彼を批評することの不當なる所以を説いたものであるが、甚の例が殊に面白い。

第百九十四段

達人の、人を見る眼は、少しもあやまる所あるべからず。たとへば、ある人の、世にそらごとをかまへ出して、人をはかることあらむに、すなほにまことと思ひて、いふまゝにはからるゝ人あり。あまりに深く信を起して、なほ、わづらはしく、そらごとを心得そふる人あり。又、何ともし思はで、心をつけぬ人あり。又、いさゝかおぼつかなくおぼえて、たのむにもあらず、たのますもあらず、案じゐたる人あり。又、まことしくはおぼえねども、人のいふことなれば、さもあらむとて、やみぬる人もあり。又、さまざまに推し、心得たるよしし

となく、何ともいはずに。◎得たるところ 生れついた本性。◎明ならむ人 明達なる人。◎なすらへ 準じて。

て、かしこげにうちうなづき、ほゝゑみてゐたれど、つやつや知らぬ人あり。又、推し出して、あはれ、さるめりと思ひながら、なほ、あやまりもこそあれと、あやしむ人あり。又、ことなるやうもなかりけりと、手をうちて笑ふ人あり。又、心得たれども、知れりともいはず、おぼつかないならぬは、とかくのことなく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。又、このそらごとの本意を、はじめより心得て、少しも欺かず、かまへ出したる人と、同じ心になりて、力を合する人あり。愚者の中のたはぶれたに、知りたる人の前にては、このよまざるのえたる所、詞にても、顔にても、かくれなく知られぬべし。まして、明ならむ人の、まどへるわれらを見ること、掌の上のものを見むが如し。たゞし、かやうの推しはかりにて、佛法までを、なすらへいふべきにあらず。

註 達人が、人を見る眼識といふものは、少しも間違のないものである。たとへ

ば、或人が、世に虚言をかまへ出して、人を欺かうとする場合に、それを正直に事實と信じ、その人がいふ通りに欺かるゝ人がある。又、餘りに深く、虚言を信じ過ぎて、その上になほ、自分の作りごとをつけ加ふるものがある。又、何とも思はないで、氣にもとめぬ人がある。又、いくらか不審に思ひ、あてにするでもなく、あてにしないでもなく、考へてゐる人もある。又事實とは思はぬけれども、人がいふ事なれば、そんなこともあるかも知れない位に思つて、そのまゝにしてゐる人もある。又、いろ／＼推量して、よくわかつたやうな風をなし、賢げになつて、微笑してはゐるが、その實は、一向に真相を知らないでゐる人もある。又、推測して考へた末、成るほどさうであらうと思ひながら、やはり、ひよつとしたら、誤があるかも知れないと、疑ふ人がある。又、別にかはつたことでもなかつたと、手を打つて笑ふ者がある。又、偽りといふことを知つてゐながら、知つてゐるとはいはないで、知らない人と同じやうな態度で、過す人がある。又、虚言の目的を、はじめから、よく知りぬいてゐて、虚言をかまへ出した人と同じ心になり、力を合せて、それを助長する人がある。愚者共の申でする戯のいつはりでさへ、知つてゐる人には、かやうに、まま／＼の生れつきの本性が、言葉にでも、顔にでも、よく知れるのである。まして、明達なる人が、われ／＼のやうに惑うてゐる者を見抜くのは、わけもないことで、恰も、掌の上にある物を見ろ

- ◎久我繩手 山城國鳥羽の西、桂川の附近にあり。
- ◎小袖 下着を總稱していふ
- ◎大口 大口袴。◎久我内大臣殿 従一位久我通基。
- ◎神妙 おとなしいこと。
- ◎よのつねにおはしましけるとき 精神が平靜であつたとき。

やうなものである。併し、斯様な推量を、佛法にまであてはめて、彼はいふ譯には行かぬ。佛法は深遠なものであるから、こんな標準ではかることは出来ない。達人の明識を説いたものであるが、いつはりに對するいろ／＼な人の態度を細叙してゐるところなどは、なかく／＼行き届いてゐる。

第百九十五段

ある人、久我繩手を通りけるに、小袖に大口着たる人、木作の地藏を、田の中の水におしひたして、ねんごろに洗ひけり。心えがたく見るほどに、狩衣の男、ふたりみたりいできて、「こゝにおはしましけり。」とて、この人を具していにけり。久我内大臣殿にてぞおはしける。よのつねにおはしましけるときは、神妙にやんごとなき人にておはしけり。

或人が久我繩手を通つたところ、小袖に大口袴をつけた人が、木造の地藏尊を田の中の水にひたし、丁寧に洗つてゐるのが目についたので、不審に思つて、見てゐると、狩衣を着てゐる男が、二三人出て来て、「こゝにお出でなされた。」といつて、この人をつれて行つたが、この人は、久我内大臣殿であつた。久我内大臣殿は、精神が平靜な時分には、おとなしくて尊敬すべき人であつた。

◎東大寺、南部七大寺の一。  
 ◎神輿、八幡大菩薩の神輿、當時は神佛混淆の時代であつたから、八幡大菩薩も、東大寺の鎮守としてあつた。  
 ◎東寺、京都羅城門の東にある。◎若宮、若宮八幡宮。  
 ◎源氏の公卿、八幡宮は源氏の氏神であつたから、源氏の公卿が供奉したのである。◎この殿、久我内大臣。  
 ◎さきを追ふ、隨身に警蹕の聲をかけたさすること。◎土御門相國、太政大臣源定

久我内大臣殿が精神に異状があつて、奇態を演ぜられた様子を、異聞として掲げたものである。

東大寺の神輿、東寺の若宮より歸座の時、源氏の公卿參られけるに、この殿、大將にて、さきを追はれけるを、土御門相國、「社頭にて警蹕いかゞ侍るべからむ。」と申されければ、「隨身のふるまひは、兵仗の家が知ること候ふ。」とばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、「この相國、北山抄を見て、西宮の説をこそ、知られざりけれ。眷屬の惡鬼、惡神を恐るゝ故に、神社にて、ことに、さきを追ふことわりあり。」とぞ、仰せられける。

東大寺の八幡宮の神輿が、東寺の若宮八幡から、東大寺へ歸座せられる時、源氏の公卿達が、これに供奉せられた。久我内大臣殿は、當時、大將で、隨身となり、警蹕の聲をかけて行かれたのを、土御門太政大臣が見られて、「社前で警蹕をすることば、いかゞなものであらう。」と申されると、久我殿は、「隨身のすることば、武家の者が、よく存じて居ります。」とだけ答へられた。さて、後

實。◎兵仗の家、武家。◎北山抄、藤原公任の著で、一條天皇以後の儀式を記したるもの。◎西宮、西宮記で、西宮左大臣源高明の著。◎眷屬、主神の眷屬。

◎定額の女嬪、定額は一定の人数の意。女嬪は宮中内侍所の下役の女官で、掃除、點燈などをするもの。◎延喜式、五十卷あり。醍醐帝の勅によつて藤原時平、同忠平が朝廷の儀式典禮を書きしるしたもの。

◎楊名介、楊名目、名だけ或國の介、又は目になり居り、實際は、その職がなく、京に在る者をいふ。◎

になつて、久我殿は、「土御門相國は、北山抄は見ておられるが、西宮記の説は御存知ないのである。神の眷屬たる惡鬼、惡神を恐るゝからして、神社の前では、殊に警蹕をすべき理由がある。」と申された。

第百九十七段

諸寺の僧のみにもあらず、定額の女嬪といふこと、延喜式に見えたり。すべて、數定りたる公人の通號にこそ。

定額といふことは、諸寺の僧だけにいふものではない。現に延喜式にも、定額の女嬪といふことが見えてゐる。定額とは、すべて、數の一定した公人の通號に外ならぬのである。

故實趣味から、定額といふことを解説したもの。

第百九十八段

楊名介にかぎらず、楊名目といふものあり。政事要略にあり。

楊名介といふことの外に、楊名目といふこともあるが、これは政事要略に見

政事要略、一條天皇の朝、惟宗允亮が撰述したもので、百三十卷ある。

◎横川、近江國坂本の邊にあふ。◎呂、陰調でやばらかなもの。◎律、陽調でつよいもの。◎和國、我が國。◎單律、呂を用ゐず、律のみなるをいふ。

◎吳竹、はちく。◎河竹、ただけ。◎御溝、禁中の溝。◎仁壽殿、禁中にある御殿の名。

◎退凡下乗の卒都婆、退凡とは、凡人を退けるといふ

えてゐる。

楊名介のことは、源氏物語、夕顔の巻に、やましくいつてある。

第百九十九段 横川の行宣法印が申し侍りしは、「唐土は呂の國なり。律の音なし。和國は、單律の國にて、呂の音なし。」と申しぬ。

横川の行宣法印は、曾て、「唐國は呂の國であつて、律の音がない。我が國は單に、律だけある國で、呂の音がない。」といはれた。

音律の問題。

第百段 吳竹は葉細く、河竹は葉廣し。御溝に近きは河竹、仁壽殿の方に寄りて植ゑられたるは吳竹なり。

吳竹は葉が細く、河竹は葉が廣い。御溝の附近にあるのが河竹で、仁壽殿の方に寄つて植ゑてあるのが吳竹である。

有職趣味、考證趣味から、竹の種類を説いたものである。

第百一段 退凡下乗の卒都婆、外なるは下乗、内なるは退凡なり。

意。下乗とは、馬車から下るといふ意。卒都婆とは高札の意。

◎本文、根據となるべき記録。◎大神宮、伊勢大神宮。

◎不吉の例、花山天皇は、寛和元年十月十四日に松尾に行幸なされたが、御在位、僅に二年で御遜位御落飾あり、後三條天皇は、延久三年十月廿九日、日吉に行幸なされたが、その翌年、御讓位、翌々年崩御なされた

退凡と下乗との卒都婆、は紛らばしいものであるが、外側にあるのが下乗で、内側にあるのが退凡である。

これは西域記に「如來御世垂五十年、多居靈鷲山、廣説妙法、摩訶陀國頻婆沙羅王、爲聞法故、與發人徒、自由麓至峰峯、跨谷凌岩、編石爲階、廣十餘步、長五六里、中路有二卒都婆、一謂下乗、即王坐此徒行以進、一謂退凡、即前凡人、不令同往其山頂」とあるのを書いたものである。

第百二段 十月を神無月といひて、神事にはいかるべきよしは、しるしたるものなし。本文も見えず。但し、當月、諸社の祭なき故に、この名あるか。この月、よろづの神たち、大神宮へ集り給ふなどいふ説あれども、その本説なし。さる事ならば、伊勢には、ことに祭月とすべきに、その例もなし。十月、諸社の行幸、その例も多し。但し、多くは、不吉の例なり。

十月を神無月といひて、神事を行ふなどは、憚るがよいといふことを、いふけれども、この事を正確に記したのもなく、根據となるべき記録も見えない。或は、この月は、諸社の祭がないところから、かやうな名をつけたものかもしれない。

ことなどないふのであらう。

○勅勸の家 天子の御勸當を蒙つたもの。○鞞 矢を入れる器。○御惱 御病氣。○世の中さわがしき時 疫病などの流行して、世人がさわぐ時。○五條天神 京都五條の松原にあり。祭神は少彦名命。○鞍馬 京都の西北にある山。○鞞の明神 鞍馬の氏神。○看督長 檢非違使の下役。○封をつ

い。この月には、萬の神達が、伊勢太神宮へ集られるのだといふ説もあるけれども、これも、信すべき確説がない。若し、さういふことであるとしたら、伊勢には、ことに、この月を祭月とすべき筈であるのに、そんな例もない。十月に、天皇が諸社へ行幸なされた例は、澤山にある。併し、その多くは、不吉の例である。○神無月といふ名稱の起源に關する考證である。

第二百三段

勅勸の所に鞞かくる作法、今は、絶えて知れる人なし。主上の御惱、大かた、世の中のさわがしき時は、五條の天神に、鞞をかけらる。鞍馬に鞞の明神といふも、鞞かけられたりける神なり。看督長の負ひたる鞞を、その家に掛けられぬれば、人、出で入らず。このこと絶えて後、今の世には、封をつくることになりけり。

○勸勸を蒙つた者の家に、鞞をかける作法を、今日では知つてゐる人が、殆どないやうになつた。天子の御病氣とか、世の中に疫病などが流行して、さわがしい時とかには、五條の天神に鞞をかける例になつてゐる。鞍馬にある鞞の明神といふのも、鞞をかけられたる神である。看督長が負うてゐた鞞を、勸勸の人の家

くること 門戸に封をつくるをいふ。

○答 罪人をうつ答。○拷器 罪人をしばりつける器。

○大師勸請の起請文 大師は慈惠僧正。勸請は神佛を呼ぶこと。起請文は神佛にその冥罰を請ふ願文。慈惠僧正は、曾て、人から、肉食亂行のあらぬ名を立てら

へかけると、人は、その家に入らないやうになるのである。この風が絶えてから後は、封を門戸につけることになり、今日に及んでゐる。

○鞞をかけることに關する故實を説いたもの。

第二百四段

犯人を、答にて打つ時は、拷器によせて結びつくるなり。拷器の様も、よする作法も、今は、わきまへ知れる人なしとぞ。

○犯人を答で打つ時には、拷器へしばりつけるのである。さて、その拷器の様も、それへ罪人をしばりつける作法も、今日では、知つてゐる者がないといふことだ。

○故實趣味から、罪人處罰法の古例を説いたもの。

第二百五段

比叡山に、大師勸請の起請文といふことは、慈惠僧正、書きはじめ給ひけるなり。起請文といふこと、法曹にはその沙汰なし。いにしへの聖代、すべて、起請文につきて、行はるゝ政はなきを、近代、このこと流布したるなり。また、法令には、水火にけがれをたてず、入物には、けがれあるべし。

れことがあつたので、その無實なるを示すために、山門で起請文を書かれた。◎法曹 法律の役人。◎人物 水火を入れる器物。

◎徳大寺右大臣殿 徳大寺公孝、後に太政大臣となる。◎大理 檢非違使別當の唐名。◎ばまゆか 高欄のある臺で、貴人の座にあつてゐる。◎にれうちかみ 牛が一たび胃袋へ入れたものを、再び口へ出して咀嚼するをいふ。◎父の相國 公孝の父

圖 比叡山に、大師勸請の起請文といふことがあるが、これは、慈惠齋正がはじめて書かれたものである。起請文といふことは、法家の方では、これを用ひたことばない。古の聖代に於ては、一切、起請文を利用して、政治を行ふといふことはなかつたが、近代この事が流行するやうになつた。又、法令では、水火には、穢といふものを認めず、たゞ、それを入れてある器物に、これを認むることになつてゐる。

圖 考證趣味から、起請文の由来を説いたもの。

第二百六段

徳大寺右大臣殿、檢非違使の別當の時、中門にて、使廳の評定に行はれるほどに、官人章兼が牛はなれて、廳の中へ入りて、大理の座のはまゆかの上にのぼりて、にれうちかみで臥したりけり、重き怪異なりとて、牛を陰陽師のもとへつかはすべきよし、おのおの申しけるを、父の相國、聞き給ひて、「牛に分別なし。足あれば、いづくへかのぼらざらむ。臣弱の官人、たまたま出仕の微牛をとらるべきやうなし。」とて、牛をば主にかへして、臥したりける疊をば、かへられにけり。

太政大臣實基。◎庭弱 かわいこと。◎あやしみを 見て 千金方、黃帝雜忌呪に「見怪不怪其怪自瘳」とある。

あへて凶事なかりけるとなむ。あやしみを見てあやしまざる時は、あやしみがへりてやぶるといへり。

圖 徳大寺右大臣殿が、檢非違使の別當をしてゐられた時、中門で、檢非違使廳の評議をしてゐられると、役人の章兼といふ人の車につけてあつた牛がはなれて、檢非違使廳の中へはいり、別當の座にあるはまゆかの上へのぼつて、にれうちかみで臥してゐた。こは大變怪異な事であるといふので、牛を陰陽師の許へつれ行いて占ふがよいと、人々がいつてゐるのを、父の太政大臣が聞かれて、牛には何の分別もないものだ。足があれば、どこへでものぼらうじやないか。臣弱な役人が、たまく、出仕に用ひたやくざ牛を、取りあげて、彼はいふほどのこともあるまい。」といひ、牛を持主にかへし、牛が臥してゐた疊を取りかへられたが、その後、別に、何も變つた凶事はなかつたといふことである。怪しいことを見ても、怪しまないでゐると、怪しい事も、却つて、人にまけて、破れ失するものであるとも、いひ傳へてあるから、餘り、怪しい事を苦にしない方がよい。

圖 「あやしみを見て、あやしまざる時は、あやしみがへりてやぶる。」といふ趣意を説き、その例として、章兼が牛の話を出したものであるが、徳大寺太政大臣の沙着にして事理に通じた態度が、ひどく、著者の氣に入つてゐるやうである。

◎龜山殿 龜山上皇のつくられた、嵯峨龜山にある山莊。◎地を引けるに、地を平にならされたところ。◎さうなく、むつみに。◎この大臣 徳大寺實基。◎大井川 嵐山の下を流る、川。

恐らくは、これによつて、著者の心を見せたものであらう。

第二百七段 龜山殿たてられむとて、地をひかれけるに、大なる蛇、數もしらず、凝り集りたる塚ありけり。此所の神なりといひて、事のよしを申しければ、いかゞあるべきと勅問ありけるに、「ふるくより、この地を占めたるものならば、さうなく掘り捨てられがたし。」と、みな人申されけるに、この大臣一人、「王土に居らん蟲、皇居を建てられむに何のたゞりをかなすべき。鬼神は邪なし、咎むべからず。たゞ皆ほりすつべし。」と申されたりければ、塚をくづして、蛇をば大井川に流してけり。更にたゞりなかりけり。

龜山殿を建てられる際、地ならしをしてゐると、大きな蛇が、多數、密集してゐた塚があつた。これは、この地の神だといふので、この次第を奏上したところ、どうしたものかと、御下問があつた。その時、人々は「古くから、この地に居たものとするれば、むつみに、これを掘り棄てる譯には參るまい。」と主張したが、

徳大寺實基は、一人異議を唱へて、「王土に居る蟲が、皇居を建てらるゝ爲に移されたとして、何の崇をする道理があらう。神といふものは、邪なことをしないものであれば、咎をする筈がない。かまふことはない。皆、掘り棄てるがよい。」といはれたので、塚を掘りくづして、蛇を大井川に流してしまつた。併し、何の崇もなかつたのである。

これも、實基が識見の高邁な次第を述べて、徒に怪事を恐るゝの愚を告めたものである。

第二百八段

經文などの紐を結ふに、上下より、たすきにちがへて、二筋の中より、わなのかしらを、横さまに引き出すことは、常のことなり。さやうにしたるをば、華嚴院の弘舜僧正、ときてなほさせけり。「これは、この頃やうのことなり。いとにくし。うるはしくは、たゞくるくると巻きて、上より下へわなのさきをさしはさむべし。」と申されけり。ふるき人にて、かやうのこと、知れる人になむ侍りける。

經文などの紐を結ぶのに、上下から、たすきがひにして、二筋の中から、

◎弘舜僧正 和論語に「弘舜字多源氏也。道徳兼才人也。」とある。◎うるはしくは、正しくは。◎ふるき人は、老人。

◎田を論ずる。田地のことについて争論する。◎うたへ。訴訟。◎れたさ。口惜しさ。◎いかにかくは。どうして、かやうに蒔り取るのか。◎ひがごと。不正な事。◎まがる。行く。

わなのかしらを、横の方へ引き出すのは、普通の方法である。然るに、さうしたのを、華嚴院の弘舞僧正が、解いてなほされ、「これは、近頃の結び方であるが、大いに見苦しい。正しくは、たゞ、紐をくるくると巻いて、上から下へ、わなのさを挿むがよい。」と申された。弘舞僧正は、老人で、かやうなことを、よく心得てゐた人であつた。

◎故實趣味から来た、經文の紐の結び方の説明。

◎第二百九段 人の、田を論ずるもの、うたへにまけて、ねたさびに、その田を蒔りて取れとて、人をつかはしけるに、まづ、道すがら田をさへ蒔りもてゆくを、「これは、論じ給ふところにあらず。いかに、かくはし」といひければ、蒔るものども、「その所とても、蒔る理なければども、ひがごとせむとて、まがるものなれば、いづくをか蒔らざらむ。」とぞいひける。理いとをかしかりけり。

◎田地のことについて、争論をしてゐる人が、訴訟に負けて、口惜しさに、その田を蒔り取つてしまへといつて、人を遣したところが、その者共は、命ぜられ

た田へ行く道々の田を、蒔りながら行くので、人が、「この田は、争論せられた田ではないのに、どうして、かやうに蒔り取るのか。」といふと蒔つてゐる者共は、「われ／＼が蒔るやうに命ぜられた田とても、蒔り取るべき理由はないのである、われ／＼は、不正の事をするために差向けられたのであるから、どこを蒔るのも、つまり、同じことになるのです。」といった。その理窟が面白いではないか。

◎面白い、似非理窟で、考へやうでは、どうにでも解釋が出来る。

◎第二百十段 喚子鳥は春のものなりとばかりいひて、いかなる鳥とも、さだかにしるせるものなし。ある眞言書の中に、喚子鳥なくとき、招魂の法を行ふ次第あり。これは鶴なり。萬葉集の長歌に、「霞たつ長き春日の。」など、つゞけたり。鶴鳥も喚子鳥のことさまにかよひて聞ゆ。

◎喚子鳥といふ鳥は、春のものであるといふことだけは、よく知れてゐるけれども、どういふ鳥だといふことを、正確に記してあるものはない。或眞言書の中に、喚子鳥が鳴くとき、招魂の法を行ふ式が記してあるが、そこにあるのは、鶴のことである。萬葉集の長歌に、「霞たつた長き春日の。」などつゞけて、ぬえ、鳥

◎喚子鳥 形ほいだかに似全身黒色にして黒斑あり。深山に棲み、鳴く聲が物を喚ぶやうである。◎招魂の法 眞言宗で行ふ、人の魂魄をよびかへす秘法。◎鶴 つぐみの一種で、大きき鳩の如く、背は黄色にして、羽毛に黒斑あり。夜鳴く。その聲が幼児の泣聲に似て



ゐる。○霞立つ長き春日の  
萬葉集卷一、幸讀岐國安益  
郡之時、軍王見山作歌に、  
「霞立つ長き春日を、暮れ  
にける、わきも知らず、む  
らぎもの心を痛み、ぬえこ  
鳥、うら歎げをれば云々」  
とある。

○顔回、孔子の高弟、十哲  
の一人。○縁、約束。○ひ  
いけ、くじける。○一毛、  
損せず。列子に、「楊朱曰、  
古之人、損一毫利天下不  
與也。人々不損一毫天下  
治矣。」とある。

といつてあるが、鶴鳥も、喚子鳥と、その様子が、餘程似てゐるやうに思はれる。

第二百一十一段

萬の事は、たのむべからず。愚なる人は、ふか  
くものを憑むゆゑに、怨み怒ることあり。勢ありとて憑むべか  
らず、こはきものまづ滅ぶ。財多しとて憑むべからず、時の間  
に失ひやすし。才ありとて憑むべからず、孔子も時に遇はず。  
徳ありとて憑むべからず、顔回も不幸なりき。君の寵をも憑む  
べからず、誅をうくること速なり。奴したがりとして憑むべか  
らず、そむき走ることあり。人の志をも憑むべからず、かなら  
ず變ず。約をも憑むべからず、信あることすくなし。身をも人  
をも憑まざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず。  
左右廣ければさはらず、前後遠ければふさがらず、狭き時はひ  
しげくたく。心を用ゐることすこしきにして、きびしき時は、  
物に逆ひ、争ひてやぶる。寛くして柔なるときは、一毛も損せ

ず。人は天地の靈なり。天地はかぎるところなし。人の性、何  
ぞことならむ。寛大にして窮らざるときは、喜怒、これにさは  
らずして、物のためにわづらはず。

何事も、頼みにしてはならぬ。愚なる人は、深く物事をたのみにするからし  
て、怨んだり、怒つたりすることになる。勢があつてもたのんではならぬ。強いも  
のは、亡び易い。財産が多いとてたのんではならぬ。時の間になくなり易い。才  
能があつてもたのんではならぬ。孔子のやうなまらぬ人でも、世に用ひられないこ  
とがある。徳があつてもたのんではならぬ。顔回のやうな君子でも、不幸に世を  
終ることがある。君生の寵愛をもたのんではならぬ。寵愛せらるゝものは、却つ  
て誅を受けることが早い。奴婢を従へてゐるとしてたのんではならぬ。そんなもの  
は背いて逃げることもある。人の厚意をもたのんではならぬ。人の心は變り易い  
ものである。約束をもたのんではならぬ。忠實にそれが履行せられることは少い。  
自分をも、他人をも、たのみになければ、よい時には喜び、わるい時でも恨ま  
ないで居れる。自分の身の左右が廣いと、何も障るものがなく、前後が遠く開け  
てゐると、行きつまるといふことがない。併し、前後左右が狭いと、自分の身が  
ゆきつまつて、くじけくだけるやうなことになる。心を用ふる範圍が狭くて、而

○いつとて、春夏冬いつでも。○思ひわかざむ人、その趣を區別することの出来ない人。○むげに、非常に。

も厳しい時は、物に逆ひ、争うて破れるやうなことになる。心が寛大で、柔和であれば、少しも損ぜられることがない。人は天地の間に於ける萬物の靈長である。そして、天地といふものは無限であるから、人間の本性とて、やはり、之と同じく無限である。心といふものを天地のやうに、無限に寛大ならしめたら、喜や怒があつても、少しもこれにさばることがなく、物事のために煩はさるゝといふ心配がなくなるであらう。

第二百十二段

秋の月は、かぎりなくめでたきものなり。いつとて、月はかくこそあれとて、思ひわかざらむ人は、むげに心うかるべきことなり。

秋の月は、この上もなくいゝものである。月といふものは、春夏冬何れの時でも、この通りであると思つて、その趣の區別の出来ないものは、非常につまらぬのであらう。

自然の風物は、折にふれて、その趣に深淺美醜の度が違ふものであるが、それを味ひわけることが出来ないのは、つまらぬといふ趣意を、秋の月の例で説いたものである。

第二百十三段

御前の火爐に火をおく時は、火箸して挟むことなし。土器より直にうつすべし。されば、ころび落ちぬやうに心得て、炭をつむべきなり。八幡の御幸に、供奉の人、淨衣を着て、手にて炭をさゝれば、ある有職の人、「白きものを着たる日は、火箸を用ゐる、苦しからず。」と申されけり。

主上の御前の火鉢に、火を入れる時は、火箸ではさまないで、土器から直ちに、火をうつすのである。随つて、この際、火が轉けて落ちないやうに、氣をつけて、炭をつんで置かなければならぬ。石清水八幡宮へ、いつか上皇のみゆきがあつた時分に、お供の一人が、白装束を着て、手を以て御前の火鉢へ炭をついたので、或有職に通じた人が、「白いものを著てゐる時は、火箸を用ひても差支ない。」といはれた。

公事趣味から、御前での火箸の用ひ方を説いたもの。

○御前、天子の御前。○火爐、火鉢。○土器、火を入れる土器。○八幡、石清水八幡宮。○御幸、上皇のみゆき。○淨衣、白き装束。

◎想夫戀 樂の名。◎相府支那で大臣をいふ。◎廻忽樂の名。◎廻鶻國 始め、薛延陀といひ、中ごろ、高車部といつた。

◎平宣時朝臣 北條宣時。大佛隆奥守といふ。◎最明

第二百十四段

想夫戀といふ樂は、女、男を戀ふる故の名にはあらず。もとは相府蓮、文字の通へるなり。晋の王儉、大臣として、家に蓮を植ゑて愛せし時の樂なり。これより、大臣を蓮府といふ。廻忽も廻鶻なり。廻鶻國とて、夷のこはき國あり。その夷、漢に服して後に來りて、おのが國の樂を奏せしなり。

想夫戀といふ樂は、女が男を戀ひ慕ふといふ意味から來た名目ではない。もとは、相府蓮をいつたものであるが、文字の音が通つてゐるので、いつしか、想夫戀と書くやうになつた。これは、晋の王儉といふ人が、大臣として家に蓮を植ゑて愛してゐた時の樂である。これからして、大臣を蓮府といふのである。又、廻忽といふ樂も、もとは廻鶻といふのである、これは、廻鶻國といふ夷の強い國があつて、漢に歸服してから後に來り、自分の國の樂を奏したのがもとである。

樂名の考證である。

第二百十五段

平の宣時朝臣、老の後、昔語に、「最明寺入道、ある宵の間に、よばるゝことありしに、『やがて』と申しながら、

寺入道 北條時頼。◎ことやうなりとも 妙な風でもかまはぬから。◎なえたるぐにやぐになつてゐる。◎うちくのまゝにて ぶだんの通りで。◎さうさうし 物足らぬ。◎さりぬべきもの 何か酒の肴になるやかなもの。◎紙燭 紙に脂油をつけたるもの。◎かゝこそ侍りしか こんなに質素であつた。

直垂のなくて、とかくせしほどに、又、使來りて『直垂などのさぶらはぬにや。夜なれば、ことやうなりとも、疾く。』とありしかば、なえたる直垂、うちくのまゝにて罷りたりしに、銚子にかはらけとりそへて、もて出で、この酒を、ひとりたうべむがさうさうしければ、申しつるなり。肴こそなけれ。人はしづまりぬらむ。さりぬべきものやあると、いづくまでも求め給へ。』とありしかば、紙燭さして、くまぐをもちめしほどに、臺所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出で、『これぞ求め得てさぶらふ。』と申ししかば、『事足りなむ。』とて、心よく數獻におよびて、興に入られはべりき。その世には、かゝこそ侍りしか。』と申されき。

平宣時朝臣が、老後の懷舊談に、「最明寺入道から、或夜、招待の使が來たので、『すぐに參ります。』と答へたが、直垂がないので、ぐすくしてゐると、また、使が來て、『直垂でもないのですか、夜のことですから、妙な風をしてもかまはぬ

●鶴岡、鶴岡八幡宮。●足利左馬入道、足利左馬頭源義氏。●うちあはび、鬨斗。

ゆゑ、はやくお出下さい。」といふので、ぐにやく／＼になつてゐる直垂を着、ふだんのまゝで、出かけると、入道は、鉢子に土器を取りそへて持ち出し、「この酒を一人で飲むのは、物足らぬから、相手に来てもらつた譯です。何も肴はない。家の者共は、もう寝てしまつたらうから、お氣の毒だが、是非、肴を一つ、探して来て下され。」といはれる。そこで、自分は、紙燭をつけて、隅々を探したところ、臺所の棚にある小さい土器の中に、味噌が少しばかりあつたのを見つけ出して、「こんなのが見つかりました。」といふと、「それで結構だ。」といひながら、それを肴にして、愉快に盃を酌み交して、面白く飲んだ。その頃は、こんなに質素であつた。」と申された。

●時頼が質素であつたといふ逸話であるが、著者の氣に入りさうな話だ。その世にはかくこそ侍りしか。」といふのは、宣時と同じく、兼好も、正にさう感じたことであらう。

第二百十六段

最明寺入道、鶴岡の社參のついでに、足利左馬入道のもとへ、まづ使を遣して、立ちいられたりけるに、鬨應せられたりけるやう、一獻にうちあはび、二獻にえび、三獻に

鮑。●かもちひ、萩の餅。●隆辨僧正、當時の鶴岡の別當。●心もとなく候、不安心です。

かもちひにて止みぬ。その座には、亭主夫婦、隆辨僧正、あるじ方の人にて座せられけり。さて「年ごとにたまはる、足利の染物、心もとなく候ふ。」と申されければ、「用意しさぶらふ。」とて、いろ／＼の染物三十、前にて、女房どもに、小袖に調せさせて、後につかはされけり。その時、見たる人の、近くまで侍りしが、語り侍りしなり。

最明寺入道が、鶴岡八幡宮に參拜の序に、足利左馬入道義氏の許へ、先づ使を遣して旨を通じ、さて立ち寄られた。その時、義氏の響應のしやうは、第一獻に慰斗鮑、二獻目に鰒、三獻目に萩の餅を出されただけであつた。その座には、義氏夫婦と、隆辨僧正が、主人側で坐つて居られた。最明寺入道は、「毎年頂きまする足利の染物、今年も頂けますか、どうか、氣になります。」と申されると、義氏は、「それは、用意して居ります。」といつて、いろ／＼な染物三十種を、最明寺入道の前で、召使の女どもに命じて、小袖に仕立てさせ、後から、送り届けられた。當時、これを目撃し、近年まで生きて居た人が、この事を話したのである。

前段と並んで、時頼に關する逸話を載せたものであるが、こゝでも、その質素で、うちとけた情あひな、見せたものであらう。

第二百十七段

ある大福長者のいはく、「人は、よろづをさし置きて、ひたぶるに、徳をつくらべきなり。貧しくは生けるかひなし。富めるのみを人とす。徳につかむと思は、すべからず、まづ、その心づかひを修行すべし。その心といふは、他のことにあらず、人間常住の思に住して、かりにも、無常を觀することなかれ。これ、第一の用心なり。つぎに、萬事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて、所願無量なり。慾に従ひて、志を遂げむと思は、百萬の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず。所願はやむ時なし、財は盡くる期あり。限ある財をもちて、かぎりなき願にしたがふこと、得べからず。所願、心にきざすことあらば、われを亡すべき惡念來れりと堅く慎み恐れて、小用をもなすべからず。次に、錢を奴の如くし

◎大福長者 大金持。◎ひたぶるに 専念。◎徳をつくら 財産をためる。◎人間常住の思 人間はいつまでも生きておられるものと思ふこと。◎住して 心を留めて。◎自他 自分と他人。◎所願無量 慾望に際限がない。◎住すべからずと しまるものでない。◎小用 少しの用事。◎火の乾けるにつぎ 易の乾卦に、「水流濕火就燥。雲從龍風從虎。」とある。◎宴飲聲色

宴飲は酒宴。聲は音樂。色は女色。◎とこしなへに 永久に。

て、つかひ用ゐるものと知らば、長く、貧苦を免るべからず。君の如く、神の如く、おそれ尊みて、したがへ用ゐることなかれ。次に恥に臨むといふとも、怒り恨むることなかれ、次に、正直にして、約を固くすべし。この義を守りて、利を求めむ人は、富の來ること、火の、乾けるにつぎ、水の、下れるに隨ふが如くなるべし。錢積りて盡きざる時は、宴飲聲色を事とせず、居所をかざらず、所願を成さざれども、心とこしなへに安く樂し。」と申しき。

或大金持が、「人は、何事もさし置いて、専念、財産をためるがよい。貧乏してゐては、生きてゐる甲斐がない。富んでゐる人だけが人間といふべきものだ。さて、財産ためようと思つたら、まづ、その氣配を修行せねばならぬが、これは、外ではない。人間は、いつまでも生きておられるものだといふことを觀念して、かりにも、世の中は無常であるなどと觀じてはならぬ。これ第一の用心である。次には、何でも、所用を辨じてはならぬ。人間が世にある間は、自分や他人のこゝとにつけ、慾望は際限ないものであるから、慾望に従つて、志を遂げようと思つ

○このおきて、前節にいへる大福長者のおきて。○癩

たら、百萬の金があつても、忽ちにして、なくなつてしまふのである。人の願望は絶える時がないけれども、財産はなくなる時が来るのである。限りのある財産を以て、限りのない欲望を満足させるといふことは、到底出来ないことである。若し、欲望が心に起つて来たら、自分を減すべき邪念が来たものと思ひ込んで、少しの用事にも、成るべく、金を費さないやうにするがよい。次ぎに、金銭は、奴隸のやうに、使用しても差支ないものと心得てゐたら、いつまでたつても、貧苦を免れることは出来ない。金銭を君主や神のやうに、恐れ尊んで、決して、自分の意のままに、用ゐてはならぬ。次には、恥しい目にあつても、怒つたり、恨んだりしてはならぬ。怒つたり恨んだりすると、やけになつて、金を使ひたくなるものである。次には、正直にして、約束を固く履行するがよい。此等の事柄をよく守つて、利を求めたら、金持になることは請合で、怡も、乾いたものに火がつき、低いところへ水が流れるやうなものである。金がたまつて盡きないと、酒宴や、音楽や、女色などに心を傾けず、居所を飾らず、欲望を遂げないでも、心はいつとも、安樂である。」といつた。

そもく、人は所願を成せむがために、財をもとむ。錢をたかからとすることは、願をかなふるがゆるなり。所願あれどもかな

疽。癩も疽も共に腫物。これを病むと熱がひどく出るので、患者は水で洗ふのを樂とする。○わくところなし。かばるところがない。

○究竟は理即到し。天臺宗に立つる證悟の階級六即中の第一を理即といひ、第六を究竟即といふ。理即は未覺の凡夫位にして、一切衆生の心に、先天的に眞如法性の理性を具することはいひ、究竟即は、完全に眞如を觀照し得て、一切法を大悟したる位である。さて佛も本來は凡夫にして、凡

へず、錢あれども用ゐざらむは、全く、貧者とおなじ。何をか樂とせむ。このおきては、たゞ、人間の望を絶ちて、貧を憂ふべからずときこえたり。欲をなして樂とせむよりは、しかし、財なからむには、癩疽を病むもの、水に洗ひて樂とせむよりは、病まざらむには、しかし、こゝにいたりては、貧富分くところなし。究竟は理即到し。大欲は無欲に似たり。

○一體、人間といふものは、自分の欲望を満足させんがために、財産を作らうとするものである。財産の中でも、金銭を寶とするのは、これが、直接に、欲望を満足させる媒介となるからである。欲望があつても、それを満足させず、金銭があつても、それを用ひないのは、全く貧乏な者と同じである。それで何を樂とすべきぞ。前にいつてある大福長者のおきては、たゞ、人間の欲望を絶つて、貧乏を憂へてはならぬといふことのやうにも聞える。金がほしいといふ欲望を充たして、樂とするよりは、一層のこと、財産のない方が、増してある。癩疽を病む者は、その患部を、水で洗ふのを樂とするが、それよりも、初から、これを病まない方が増してある。かう観て来ると、貧と富との區別がなくなり、成佛するの

夫も固より佛性を具有するといふところから、究竟は理即にひとしいつたのである。

堀川殿 久我太政大臣基具。●舍人 攝關の家に使はれてゐる下部。●本寺 本堂。

も、凡夫で居るのも、つまり同じことで、大欲は無欲とかはるところがないのである。

前節では、大福長者の言に託し、金持になるにつきての心得を掲げ、後節では、それが無意味であるといふことを説破し、貧富わくところなし。究竟は理即ひとしい。大欲は無欲に似たり。」と達観してゐる。観察もなかく、鋭敏で、叙説も頗る面白い。

第二百十八段

狐は、人にくひつくものなり。堀川殿にて舍人が、ねたる足を狐にくはる。仁和寺にて、夜、本寺の前を通る下法師に、狐三つ飛びかゝりて、くひつきければ、刀を抜きて、これを防ぐ間、狐二疋を突く。一つは突き殺しぬ。二つは逃げぬ。法師は、あまた所くはれながら、こと故なかりけり。

狐は、人にくひつくものである。堀川殿では、舍人が寝てゐて、足を狐にかまれたこともあつた。仁和寺で、夜分に本堂の前を通つてゐる下法師に、狐が三疋飛びかゝつて、くひついたので、その法師は、刀を抜いて、狐を二疋突いた。さて、その一疋は突き殺され、他の二疋は逃げた。法師は、幾箇所もくひつかれ

たけれども、大したこともなくて済んだ。

異聞として、狐の話を書きとめたものである。

第二百十九段

四條黃門 命せられていはく、「龍秋は、道にとりてやむごとなきものなり。先日、来りていはく、「短慮のいたり、きはめて荒涼のことなれども、横笛の五つの穴は、聊かいぶかしき所の侍るか、と、ひそかに、これを存す。その故は、千の穴は平調、五の穴は下無調なり。その間に勝絶調を隔てたり。上の穴雙調、次に見鐘を置きて、夕の穴黃鐘調なり。その次に、鸞鏡調をおきて、中の穴盤渉調、中と六とのあはひに神仙調あり。かやうに、間々に、みな、一律をぬすめるに、五の穴のみ、上の間に調子をもたずして、しかも、間をくばることひとしき故に、その聲不快なり。されば、この穴を吹く時は、必ずのけのけあへぬ時は、ものにあはず。吹き得る人かたし。」と申しき。料簡のいたり。まことに興あり。先達、後生を恐るといふこと、

●四條黃門 四條中納言藤原隆資。黃門は中納言の唐名。●龍秋 樂人、藤原龍秋。●短慮 無遠慮の意。謙遜の詞。●荒涼 不作法の意。●千の穴 二つ目の穴。●平調 音を十二に分け、之を十二月に配當し、十二律といふ。即ち、十一月、壹越調。十二月、斷金調。一月、平調。二月、勝絶調。三月、下無調。四月、雙調。五月、鳥鐘調。六月、黃鐘調。七月、鸞鏡調。八

月、盤渉調。九月、神仙調。十月、上無調。◎五の穴、三つ目の穴。◎上の穴、四つ目の穴。◎夕の穴、五つ目の穴。◎中の穴、六つ目の穴。◎六、七つ目の穴。◎その聲、五の穴の聲。◎のく、口を除ける。◎後生、後進者。

◎景茂、大神景茂といふ樂

このことなり。」と侍りき。

四條黃門が、自分に話されたことに、龍秋は、音樂の道については、尊重すべきものである。先日、自分のところへ来て、「無遠慮至極で、不作法では御座いますが、横笛の五つの穴は、少し不審に思つてゐることが御座います。それは、千の穴は平調、五の穴は下無調で、その間に、勝絶調があるべき筈なのに、穴があいて居りませぬ。上の穴は雙調で、その次には鳧鐘調をとばし、夕の穴の黃鐘調になつて居ります。又、その次に、鸞鏡調をぬかし、次の中の穴が盤渉調、中の穴と六の穴との間に、神仙調がぬけて居ります。かやうに、各穴の間に、一律づつ、省いてあるにもかゝらず、五つの穴だけは、上の穴との間に、調子をもたないで、而も、穴と穴との間隔は、他の穴と同様になつて居るゆゑに、この穴の音は不愉快であります。それで、この穴を吹く時分には、必ず、口を少し穴から離して吹くのです。若し、さうしないと、調子が合ひませぬ。随つて、この五の穴を無難に吹ける人は、めつたにありませぬ。」といった。よく、事理に通じた話で、誠に面白い。俗に、先輩が後輩を恐れるといふ事があるが、これが即ちそれである。」とあつた。

他日に、景茂が申し侍りしは、「笙は、しらべおほせてもちたれ

人。◎調べおほせて、調子を合せて置く。◎口傳、奥義などの秘傳を口授すること。◎性骨、器用。

ば、たゞ吹くばかりなり。笛は吹きながら、いきの中にて、かつしらべもて行くものなれば、穴ごとに、口傳の上に性骨を加へて、心を入るゝこと、五の穴のみに限らず。〇ひとへにのくとばかりも定むべからず。あしく吹けば、いづれの穴も、心よからず。上手は、いづれをも吹きあはず。呂律の、ものにはかなはざるは、人のとがなり、器の失にあらす。」と申しき。

その後、景茂といふ樂人が、「笙は、調子を合せてあるものを持つて居るのだから、單に、吹きさへすればよい。併し、笛の方は、吹きながら、息の工合で、調子をうまく合せて行くものであるから、どの穴でも、教へられる外に、器用を加へ、心を籠めて吹かねばならぬが、この氣配は、ひとり五の穴だけに限つたことではない。五の穴を吹くときだけに、口を少し離して吹くといふ譯にもゆかぬ。下手に吹くと、どの穴の音も不愉快である。上手といふものは、どの穴でも、自由に調子よく吹くものである。音律の調子が合はないのは、吹く人の罪であつて、樂器がわるいのではない。」といった。

音律の問題で、その道の名人達の説を擧げたものである。



○邊土、片田舎。○天王寺、大阪の四天王寺で、聖徳太子の建立にかゝる。○伶人、樂人。○圖、調子の圖。○太子、聖徳太子。○ほかせ、標準。○六時堂、晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜の六時に、勤行をする堂。○涅槃會、陰曆二月十五日、釋迦入滅の日に行ふ法會。○聖靈會、二月廿二日、聖徳太子の忌日に行ふ法會。○指南、標準。○祇園精舎の無常院、祇園精舎は印度にある寺で、無常院は、その境内の西北隅にある末寺。

第二百一十段

何事も、邊土は卑しくかたくななれども、天王寺の舞樂のみ、都に恥ぢずといへば、天王寺の伶人の申しはべりしは、「當寺の樂は、よく圖をしらべ合せて、ものゝ音の、めでたくとゝのほり侍ること、外よりも勝れたり。ゆるは、太子の御時の圖、今にはべるを、ほかせとす。いはゆる六時堂の前の鐘なり。そのこゑ、黄鐘調の最中なり。寒暑に従ひて、上り下りあるべきゆるに、二月涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす。秘藏のことなり。この一調子をもちて、いづれの聲をも、とゝのへ侍るなり。」と申しき。およそ、鐘の聲は黄鐘調なるべし。これ、無常の調子、祇園精舎の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黄鐘調に鑄らるべしとて、あまたたび鑄かへられけれども、かなはざりけるを、遠國よりたづね出されけり。法金剛院の鐘の聲、また黄鐘調なり。

何に限らず、田舎のものは、下品で頑固たのが多いけれども、天王寺の舞樂

○西園寺、山城の衣笠山にある寺。○法金剛院、山城の太秦の東にある寺。

○建治弘安、共に、後宇多天皇の御代の年號。○祭賀茂祭。○放免、檢非違使廳の下部。○つけもの、放

第二百一十一段

「建治、弘安の頃、祭の日の放免のつけもの、ことやうなる紺の布四五端にて、馬をつくりて、尾髪には、とうじみをして、蜘蛛のい書きたる水干につけて、歌の心などいひて、わたりしこと、常に見及び侍りしなども、興ありてした

だけは、都のものに劣らないといつたところ、天王寺の樂人が、「當寺の樂は、よく調子の圖をしらべ合せてあるから、他所のものよりは、音律が整頓して居ります。そのわけは、聖徳太子の御時の圖が、今に現存してゐるのを、標準としてゐるからです。世間でいふ、六時堂の前にある鐘が、即ちそれです。その鐘の音は、黄鐘調の真中の聲です。その音は、寒暑によつて、上り下りのあるものゆゑ、二月の涅槃會から、聖靈會までの中間を標準としますが、これは秘密のことです。この一つの音調でもつて、どんな聲でも調節するのです。」といつた。一體、鐘の聲といふものは、黄鐘調でなければならぬが、これは、無常の調子で、印度にある、祇園精舎の無常院の鐘の音である。西園寺の鐘も、黄鐘調に鑄ようとして、幾度も鑄かへられたけれども、うまくゆかなかつたので、遠國から、黄鐘調の鐘を採出して、用ひた法金剛院の鐘の聲も、また、黄鐘調である。

天王寺の舞樂のことから、鐘の聲に關する考證を試みたもの。

免が身につける飾物。○と  
うじみ 燈心。○水干 水  
干にして作つた狩衣。○歌  
の心 古歌にくもものいに  
あれたる駒はつなぐなり。  
二道かくる人はたのまじ。  
とあるやうなのを指すので  
あらう。○道志 明法道の  
輩が、使廳の志となつたも  
のをいふ。○過差 華美。

○竹谷 山城の醍醐にある

るこゝちにてこそ侍りしか。」と、老いたる道志どもの、今日も語  
り侍るなり。この頃は、つけもの、年を送りて、**過差**ことの外  
になりて、よろづのおもきものを、多くつけて、**左右**の袖を、  
人に持たせて、みづからは、**鉾**をだにもたず、**息**つぎ苦むあり  
さま、いと見ぐるし。

○「建治弘安の頃は、賀茂の祭の日に於ける、放免どものつけものに、奇妙な  
紺の布四五端で、馬をつくり、その尾と立髪とは、燈心を用ひ、それを、蜘蛛の  
巣か書いた水干の上へ引っかけ、くものいであれたる駒はつなぐとも云々。」とい  
ふやうな歌の心などを書いて、通つたのを、いつも見たが、面白い趣向をしたも  
のだ。」と、老年の道志どもが、今日も話してゐる。近來は、つけものも、非常に華  
美になり、いろく重い物をつけ、左右の袖を人に持たせ、自分では、鉾一つ持  
たないで、苦しうな息づかひをしてゐる様子は、至つて見苦しい。

○古の物の質實で、而も趣味があつたのに引きかへ、今の物が、華美でありな  
がら、趣致に乏しいといふことを慨嘆して書いたものである。

第二百二十二段

竹谷の乘願房、東二條院へまゐられたりけるに、

地名。○乘願房 浄土宗の  
僧。○東二條院 後深草天  
皇の皇后公子。○亡者 死  
者。○追善 後から追ひす  
ゝめる善根の意。○勝利  
勝れたる利益。○光明眞言  
寶篋印陀羅尼 共に經文の  
名で、廣大無邊の利益功德  
があるといふ。○念佛 稱  
名念佛。○追福 追善。

「亡者の追善には、何事か勝利おほき。」とたづねさせ給ひけれ  
ば、「光明眞言、寶篋印陀羅尼。」と申されたりけるを、弟子ども、  
「いかにかくは申し給ひけるぞ。念佛にまさること候ふまじと  
は、など申し給はぬぞ。」と申しければ、「我宗なれば、さこそ申  
さまほしかりつれども、まさしく稱名を追福に修して、巨益あ  
るべしと説ける經文を見及ばねば、『何に見えたるぞ。』と、重ね  
て問はせたまはば、いかに申さむとおもひて、本經のたしかな  
るにつきて、この眞言陀羅尼をば申しつるなり。」とぞ、まをされ  
ける。

○竹谷の乘願房が、東二條院の許へ行かれたとき、院が、「亡者の追善には、ど  
んな事が、利益の多いものか。」と尋ねられたので、房は、「それは、光明眞言、寶  
篋印陀羅尼で御座いませう。」と答へた。すると、弟子どもが、後で、「どうして、  
あんなことを申されました。稱名念佛にまさるものは、御座いますまいと、なぜ  
申されませんでした。」と問ふたので、房は、「わが宗旨のことであるから、さう申  
したかったのであるけれども、自分はまだ、稱名を追福に唱へると、大きな利益

おほいどの 鶴

○鶴のおほいどの、九條内大臣基家。○ひが事、間違。

○有宗入道、陰陽頭安部有宗。○尋ねまうで来りしが兼好の許へ訪問して来た。○植うること、菘菜や竹木を植うること。

があるといふことを書いてある經文を見たことがないによつて、院が、若し、「それは何に書いてあるぞ。」と御尋ねにでもなつたら、何とお答へしようかと思ひ、根據ある經文によつて、この眞言陀羅尼を申した次第である。」と答へた。  
○自分の宗旨だけを偏重せず、正確なる出典によつて、所信を披瀝した、乗願房の殊勝な心事を記したもので、その無我の態度の奥ゆかしいところが、著者の氣に入りさうなことである。

第二百二十三段 田鶴のおほいどののは、童名たづ君なり。鶴を飼ひ給ひけるゆるゑにと申すは、ひが事なり。

○鶴のおほいどののは、幼名をたづ君といつた。鶴を飼はれたから、かういふ名をつけたといふのは、間違である。  
○人名の考證。

第二百二十四段 陰陽師有宗入道、鎌倉よりのぼりて、尋ねまうできたりしが、まづ、さし入りて、「この庭の、いたづらに廣きこと、あさましくあるべからぬことなり。道を知るものは、植うることをつとむ、細道ひとつのこして、みな、畠に作りたま

へ。」と諫め侍りき。誠に、すこしの地をも、徒におかむことは、益なきことなり。食物、藥種などうゑおくべし。

○陰陽師の有宗入道が、鎌倉から上京して、自分のところへ、尋ねて来たが、家にはいつてから、「この庭は、馬鹿に廣いが、無駄なことじや。道を知つてゐる者は、成るべく、庭に物を植ふるやうにする。細い道一つ残して、あとは、皆、畠にしてしまいなさい。」と、忠告してくれた。成るほど、少しの地所でも、たゞ遊ばせて置くのは、無益のことである。食物や藥種などを植ゑて置くがよい。  
○土地を有益に利用するといふ問題を、有宗入道の忠言によつて、述べたものである。

第二百二十五段 多久資が申しけるは、通憲入道、舞の手の中に、興あることどもを擇びて、磯の禪師といひける女に教へて、舞はせけり。白き水干に鞆巻をさせ、烏帽子を引き入れたりければ、男舞とぞいひける。禪師が女、静といひける、この藝をつげり。これ、白拍子の根原なり。佛神の本縁を歌ふ。その後、源光行、多くの事を作れり。後鳥羽院の御作もあり。龜菊に教

○多久資、俗人。○通憲入道、法名信西、平治の亂に害せられた人。○磯の禪師、讃岐の者で、舞の名人。○鞆巻、短刀で鏝のないもの。○引き入れ、つける。○静、源義經の妾となつた女。○

白拍子 舞妓。○本條 由來緣起。○源光行 後鳥羽上皇の北面の侍で、和漢の學に通じ、和歌をよくした人。○鶯菊 後鳥羽上皇の寵愛をうけた舞妓。

○信濃前司行長 前司とは前の國司のこと。月輪關白の家司にして、文才のあつた人。○稽古のほまれ 故實をよく知つてゐるといふ評判。○樂府 白氏文集の新樂府をさす。○論義 樂

へさせ給ひけるとぞ。

○ 多久資はかういふことをいつた。通靈入道が、舞の手中で、面白いものを選んで、磯の禪師といふ女に教へて舞はせた。その様子ば、白い水干に袖巻をさせ、烏帽子をかぶらせ、男のやうな姿で舞はせたので、それを男舞といつた。禪師の女の静といふのが、この藝をうけつたが、これ、實に、白拍子の起源である。この舞では、神佛の由來緣起などを、よく歌つた。その後、源光行が、この舞の歌を澤山に作つたが、後鳥羽院の御作もあつた。それらは、鶯菊といふ舞妓に教へられたといふことである。

○ 白拍子の由來を説いたものである。

第二百二十六段

後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古のほまれありけるが、樂府の御論義の番に召されて、七徳の舞を、二つ忘れたりければ、五徳冠者と、異名をつきにけるを、心うきことにして、學問を棄て、遁世したりけるを、慈鎮和尚、一藝あるものをば、下部までも召し置きて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。この行長入道、平家物語

府の中の不審のところを問答すること。○番に召され論義の人数に加へられる。○七徳の舞 秦王破陣樂の一名にして、禁暴、戢兵、保大、定功、安民、和衆、豐財の七徳を頌したるもの。○冠者 元服したる若者。○慈鎮和尚 天台座主で、慈圓大僧正といつた人。後に謚して慈鎮大師といふ。○不便にす 愛護する。○扶持す たすけ養ふ。○山門 比叡山延曆寺。○九郎判官 源義經。○蒲冠者 源範賴。

を作りて、生佛といひける盲目に教へて、語らせけり。さて、山門のことを、ことにゆゑしく書けり。九郎判官のことは、詳しく知りて、書きのせたり。蒲冠者のことは、よく知らざりけるにや、多くのことどもをしるし漏せり。武士のこと、弓馬のわざは、生佛、東國のものにて、武士に問ひ聞きて、書かせけり。かの生佛が生れつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。

○ 後鳥羽院の御時、信濃前司行長といふ人は、故實に通じてゐるといふ評判があつたので、樂府の御論義の人数に召し加へられたところ、七徳の舞にある七つの徳目の中、二つだけを忘れていへなかつた。そこで、人から、五徳冠者といふ異名をつけられたのを、面白からず思つて、遂に、學問を棄て、世を避れてしまつた。然るに、慈鎮和尚は、一藝に通じてゐるものは、下部に至るまでも召しかへ、愛護してゐられたので、この信濃入道行長をも、たすけ養うて行かれた。さて、この行長入道は、平家物語を作つて、生佛といふ盲目に教へて語らせた。随つて、この物語には、山門のことを、ことに仰山に書いてある。又、九郎判官義經のことは、詳しく知つてゐて書き載せてあるが、蒲冠者範賴のことは、よく

◎六時禮讚 晝夜の六時に彌陀を禮讚して、罪障を滅す唱文の名。◎法然上人 源空といふ淨土念佛の法を唱へた高僧。◎太秦 山城の廣隆寺。又、太秦寺ともいふ。◎ふしはかせ 經文の傍に點をうち、その長短高低を示すもの。◎聲明 ふしをつけて歌ふもの。◎一念の念佛 一向專念の念

梵唄

知らなかつたものと見え、いくらも書きもらしてある。武士のことや、弓馬のこととは、生佛が東國のものであるところから、武士に問ひ聞いて書いたものである。かの生佛が、生れつきの聲を、今の琵琶法師は學んで歌つてゐるのである。

平家物語の作者に關する考證である。平家の作者については、他にもいろいろの説があるが、これが、その中で、一番有力である。

第二百二十七段

六時禮讚は、法然上人の弟子安樂といひける僧、經文を集めて、作りてつとめにしけり。その後太秦の善觀房といふ僧、〇ふしはかせを定めて、聲明になせり。一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代よりはじまれり。法事讚も、おなじく、善觀房はじめたるなり。

六時禮讚は、法然上人の弟子の安樂といふ僧が、經文を集めて作り、自分のおつとめに誦したのを、その後、太秦の善觀房といふ僧が、節をつけて、聲明にしたものである。これが、一向專念の念佛の最初のもので、後嵯峨院の御代からはじまつたのである。法事讚も、同じく、善觀房がはじめたものである。

念佛の由來を説いたもの。

第二百二十八段

千本の釋迦念佛は、文永のころ、如輪上人、これをはじめられけり。

千本の釋迦念佛は、文永の頃、如輪上人が、はじめられたものである。

釋迦念佛の由來。

第二百二十九段

善き細工は、少しにぶき刀をつかふといふ。妙觀が刀は、いたくたゝす。

よい細工をするには、少し鈍い刀を使ふさうだ。かの名匠たる妙觀が刀は、餘り切れなかつた。

彫刻に關することを説いたものであるが、文章が簡勁で、千鈞の力がある。

第二百三十段

五條の内裏には、ばけものありけり。藤大納言殿、かたられ侍りしは、殿上人ども、黒戸にて碁をうちけるに、御簾をかゝけて見るものあり。「誰ぞ。」と見向きたれば、狐、人のやうにひいて、さしのぞきたるを、「あれ狐よ。」と、どよまされて、まどひ遁げにけり。未練の狐、ばけ損じけるにこそ。

佛。◎法事讚 書名。上下二卷あり。◎千本の釋迦念佛 千本は京都の地名。こゝに釋迦堂があつて、毎年、大念佛を行はれる。◎文永 龜山帝の御代の年號。◎如輪上人 傳記未詳。◎妙觀 攝津國勝尾寺の觀音の像を刻んだ名匠。◎たゝす 切れない。

◎藤大納言 誰だかよくわからぬ。◎ついで 坐つて。◎どよまれて さわざたてられて。◎未練の狐 化ける術が夫熟な狐。

◎園別當入道 参議檢非違使別當藤原基氏。園と稱す。弘安頃の人。◎庖丁者 料理の上手な人。◎うち出でむ いひ出す。◎さる人 さういふことを心得てある如才のない人。◎百日の鯉 百日つゞいて鯉を料理するをいふ。◎申し請けむ 頂いて料理して見よう。◎つ

園 五條の内裏には、化物が居つた。藤大納言殿の話によると、殿上人達が、曾て、黒戸で碁をうつてゐられたところ、御簾をかゝけて見るものがあるので、「誰だ」といつて振向いて見ると、狐が、人間のやうに坐つて、さしのぞいてゐた。そこで、人々が「あれ狐だ」といつて、さわぎたてると、狐は、うろたへて逃げ去つた。未熟な狐が、化けそこなつたのであらう。

第二百三十一段

園別當入道は、さうなき庖丁者なりけり。ある

人のもとにて、いみじき鯉を出したりければ、みな人、別當入道の庖丁を見はやと思へども、たやすくうち出でむもいかゞと、ためらひけるを、別當入道、さる人にてはこのほど、百日の鯉を切り侍るを、今日缺き侍るべきにあらず。まげて申し請けむ。」とて、切られにける、いみじくつきづきしく興ありて、人ども思へりけると、ある人、北山太政入道殿に語り申されたりければ、「かやうのこと、おのれは、世にうるさくおぼゆるなり。切りぬべき人なくばたべ、切らむ。」といひたらむは、なほよかり

ぎつぎしく、似つかはしく◎北山太政入道 西園寺公經。

◎まれ人 客人。◎ついでにかかしきやうにとりなしたる、何か然るべき口實を作

なむ。なんでも、百日の鯉を切らむぞ。」と、のたまひたりし、をかしくおぼえしと、人の、語り給ひける、いとをかし。

園 園別當入道は、無雙の料理の名人である。或人の許に、立派な鯉を贈物にしたのがあつたので、人々は、是非、別當入道の料理工合を見たいと思つたけれども、無様にいひ出すのも失禮だと思つて、躊躇してゐると、別當入道は、如才のない人であつたから、「この頃、百日の間、つゞけて鯉を料理することを思ひつて、今日だけ、それをやめるといふ譯に参らぬゆゑ、是非、それを頂いて料理して見ませう。」といつて、料理せられたのを、人々は、非常に工合がよくて、面白いと思つて見物した。然るに、後になつて、或人が、北山太政入道殿に、この話をしたところ、入道殿は、「そんなことは、自分は餘り感心せぬ。さういふ際なら、料理手がなければ、私が料理しませう。」と、ありのまゝにいつた方が、まだいゝだらう。百日の間、鯉を料理するなどいふことがあるものか。それはうそだ。」といはれたが、成るほどと思つたと、人が自分に話した。自分も面白いことに思ふ。

おほかた、ふるまひて興あるよりも、興なくて、やすらかなるが、まさりたることなり。まれ人の饗應なども、ついでをかしきやうに取りなしたるも、まことによけれども、たい、その事

つて響應する。○むづかし見苦しい。

となくて取り出でたる、いとよし。人に、ものを取らせたるも、ついでなくて、これを奉らむといひたる、まことの志なり。惜むよしして、乞はれむと思ひ、勝負のまけわざに、ことづけなごしたる、むづかし。

○ 一體、いろく趣向を凝らして面白味を添へたのよりも、別に趣向をこらすなどのことなく、あつさりとしたのが、いゝものである。客を響應するのでも、何か然るべき口實を設けて、とりなすのも、悪くはないが、それよりも、別に、何といふことなしに、とり出したのが、至極よい。人に物をやるにしても、特にこれといふ理由をつけないで、それをあげませうと、すなほにいつたのが、眞實の志といふものじや。それを惜しむやうな様子をして、欲しがらせ、勝負事に負けた賭物などにしてやるのは、見苦しいものである。

○ この段は、人の言行は、あつさりとして、すなほなのがよいといふ趣意を、鯉料理の話と、響應贈遺の事柄とに託して述べたもので、著者が例の趣味の表現である。

第二百三十二段

すべて、人は、無智無能になるべきものなり。

○見さま、風采。○史書

史記や漢書。○さかしく賢く。○尊者、長者。○さらずとも、そんなことをしなくとも。

ある人の子の、見さまなどあしからぬが、父の前にて、人ともいふとて、史書の文を引きたりし、さかしくは聞えしかども、尊者の前にては、さらずともおぼえしなり。

○ 總じて、人は無智無能な者のやうにしてゐるのがよい。或人の子で、風采などは、わるくない人が、父の面前で、人と話をするのに、史記とか漢書とかの文句を引用してゐたのを見たが、賢さうには聞えるけれども、長者の前では、そんなことをしなくても、よからうにと思つた。

また、ある人の許にて、琵琶法師の物語をきかむとて、琵琶を召しよせたるに、柱のひとつ落ちたりしかば、「作りてつけよ。」といふに、ある男の中に、あしからずと見ゆるが、「ふるきひさくの柄ありや。」などいふを見れば、○氷をおふしたり。琵琶など弾くにこそ。めくら法師の琵琶、その沙汰にもおよばぬことなり。道に心えたるよしにやと、かたはらいたかりき。ひさくの柄は、ひもの木とかやいひて、よからぬものにとぞ、ある人仰せ

○物語、平家を語ること。○あしからずと見ゆる、相當な風采をした男。○ひさく、柄杓。○ひもの木、櫛のうすい板で、まげものを作るに用ふる木。

られし。わかき人は、すこしの事も、よく見え、わろくみゆるなり。

○また、或人の許で、琵琶法師が平家を語るのを聞かうといふので、琵琶を取り寄せたところ、その柱の一つが落ちてゐたので、「すぐに、柱を作つて、つけて置くがよい。」といふと、その中にゐた、相當な風をした男が、「古い柄杓の柄があらりますか。」といふので、その男を見ると、爪を長くはやしてゐたので、琵琶などを弾く男だと思つた。盲法師がひく琵琶は、音楽に用ふる琵琶と、等しく取沙汰するにも及ばぬことである。自分が、琵琶の道を心得てゐるといふつもりで、あんなことをいつたのかと思ふと、笑止の至りじや。柄杓の柄は、ひもの木とかいふもので、よくないものだ、或人がいつた。若い人は、ちよつとしたことにでも、よくも見え、また、わるくも見えるものゆゑ、氣をつけなければならぬ。

○若い者が、生學問を無暗にふりまはしたり、知つたふりをしたりすることの、氣障な様子を告めたものである。

第二百三十三段

よろづのことがあらじとおもはひ、何事にもまことありて、人をわかず、うやうやしく、詞すくなからむにはし

○人をわかず、どんな人に對しても。○さる人、そんな

な心掛の人。○こと、言葉。○うるはしき、立派。○よろづのことが、いろ／＼な過失。○所得たるけしき、巧者らしい様子をする。

○知らずしもあらじ、知らないで聞のではあるまい。○なほさだか、ばかばかり。○なほさだかに、ない。

かじ。男女老少、みな、さる人こそよけれども、ことに、若く、かたちよき人の、ことうるはしきは、わすれがたく、思ひつかるゝものなり。よろづのことは、馴れたるさまに上手めき、所得たるけしきにて、人をないがしろにするにあり。

○何事にも、過失のないやうにしようと思つたら、誠實にして、何人に對しても、悲謙な態度を以て接し、言葉數を少くするがよい。男でも、女でも、老人でも、少年でも、皆、こんな態度を持つるがよいけれども、とりわけ、若くて風采のよい人が、立派な言葉つかひをしてゐるのは、何時までも忘れられないほど、人の心を引くものである。いろ／＼な過失といふものは、馴れてゐるといふ風で、上手ぶり、巧者らしい様子をして、人を輕んずる所から起るものである。

第二百三十四段

人の、ものを問ひたるに、知らずしもあらじ、ありのままにいはむは、むかひかましとにや、心まどはすやうに返事したる、よからぬことなり。知りたることも、なほさだかにと思ひてや問ふらむ。また、まことに知らぬ人も、などかな



ほ念のために、確めたいと。  
 ◎うららかに 明らかに。  
 ◎おとなしく 穩當に。  
 ◎心づきなけれ 厭なことである。  
 ◎おぼつかながらぬやうに ぼつきりわかるやうに。

からむ。うららかにいひ聞かせたらむは、おとなしく聞えなま  
 し。  
 人は、未だ聞き及ばぬことを、わが知りたるまゝに、  
 その人の事の、あさましさなどはかり、いひやりたれば、いかな  
 る事のあるにかと、お返し問ひにやるこそ、心づきなけれ。  
 世にふりぬる事をも、おのづから聞きもらすこともあれば、お  
 ぼつかながらぬやうに、つげやりたらむ、あしかるべきことか  
 は、かやうのことは、もの馴れぬ人のあることなり。

○人が、物を尋ねた場合に、あの人は、これ位のことを、知らないで聞くので  
 はあるまい。ありのまゝに答へるのも、ばかばかしいといふやうな考から、わざ  
 と、曖昧な返事をするのは、よくない事である。先方では、知つてゐる事でも、  
 なほ念のために、よく確めたいと思つて聞くのかも知れない。又、實際知らない  
 て問ふ人も、ないことはないのである。それで、人から物を問はれたら、明白に  
 答へるのが、穩當である。人が、知らないことを、自分が知つてゐるに任せ、問  
 はれた事柄の顛末をいはずに、問題となつてゐる人のあさましい事などはかり、い

◎すがるなる人 別に用も  
 ない人。◎せかれれば 妨  
 げられないと。◎こだま  
 木魂。老樹の精靈で、一種  
 の妖怪と思はれてゐた。◎  
 けしからぬかたち 妖怪。  
 ◎若干 いくらかとも知れぬ。

つてやると、先方では、いよく不審に思ひ、推し返して尋ねるものであるが、  
 こんなことは、不都合な話である。世間では、既に陳腐になつたことでも、自然、  
 聞き漏らす者もあるから、そんな人から問はれたら、よくわかるやうに、ぼつき  
 りと答へるがよい。曖昧な返答をするのは、物馴れぬ人のする事である。  
 二百三十五段 主ある家には、すがるなる人、心のまゝに入り  
 くることなし。あるじなき所には、道行く人、みだりに立ち入  
 る。狐鼻やうのものも、人げにせかれねば、所得がほに入り住  
 み、こだまなどいふ、けしからぬかたちも、あらはるゝものな  
 り。また、鏡には色形なきゆゑに、萬のかげきたりてうつる。  
 鏡に色形あらましかば、うつらざらまし。虚空よくものをいる。  
 我等が心に、念々のほしきまゝにきたりうかぶも、心といふも  
 のゝなきにやあらむ。心にぬしあらましかば、胸のうちに、若  
 干のことは、入りきたらざらまし。

主人の家へは、用のない人が、勝手にはいつて来ることはないが、主人が居ない家へは、通りかゝりの人でも、やたらにはいり込んで来る。狐や梟のやうなものでも、人氣がないと、得意顔で入り込んで来るし、木魂などいふ、妖怪までも、現はるゝものである。又、鏡には、色や形がないから、いろ／＼な物の影が映る。若し、鏡に、色とか形とかいふものがあつたなら、外物の影は映らないのであらう。空虚なるところへは、よく物がはいる。われ／＼の心に、いろ／＼な慈念が、勝手に浮んで来るのも、心といふものゝ本體がないからであらう。若し、心に、一定の主體があつたら、胸の中に、かやうに、いろ／＼なことは、はいつて来ないのであらう。

心性を論じたのである。

第二百三十六段

丹波に出雲といふ所あり。大社を遷して、めでたくつくれり。志太のなにかしとかや、〇しる所なれば、秋の頃、聖海上人、その外も、人あまたさそひて、「いざたまへ、出雲をがみに、かいもちひめさむ」とて、具しもていきたるに、おの／＼、拜みて、ゆゝしく信をおこしたり。御前なる獅子狛犬、

◎大社、出雲國、杵築大社、祭神は大國主神。◎しる所、知行してゐる所。◎いざたまへ、さあおいでなさい。◎かいもちひめさむ、田舎の萩の餅を、くばせよう。

◎ゆゝしく、盛に。◎信心。◎あなめでたつ、あゝ有難いことじや。◎殊勝の事、有難い事。◎無下なり、しようがない。◎都のつと、都への土産。◎習因縁。◎さがなき、臍白なる。◎奇怪、不都合。◎いたづら、無益。

背きて、後ざまに立ちたりければ、上人、いみじく感じて、「あなめでたや、この獅子のたちやう、いとめづらし。深きゆゑあらむ」と、なみだぐみて、「いかに殿ばら、殊勝の事は、御覽じとがめずや、無下なり」といへば、各、おやしみて、「まことに、他に異りけり。都のつとに語らむ。」などいふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく、もの知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられ様、定めて、習ある事に侍らむ。ちと承らばや。」といはれければ、「そのことに候ふ。さがなきわらべどもの仕りける、奇怪に候ふことなり。」とて、さしよりに、する直して去にければ、上人の感涙、いたづらになりけり。

丹波の國に、出雲といふ所があつて、そこに、出雲の大社を遷して、立派に社を造つてある。志太の何某とかいふ者が、知行してゐた所であつたから、この人が、秋の頃、聖海上人をはじめ、數多の人々を誘ひ、「さあおいでなさい。出雲の社へ参拜かたぐ、田舎の萩の餅を御馳走ませう。」といつて、つれて行つた。

さて、一同は、その出雲の社に参拜して、大きに信心を起したが、ふと見ると、社前にある獅子と狛犬とが、後向になつて、立つてゐるので、聖海上人は、非常に感動し、「あゝ有難いことじや。この獅子の立ち方は、至つて珍しい。これには、深い仔細のあることであらう。」といつて、涙ぐみながら、更に語をついで、「皆の衆、かういふ有難いことは、お目にとまりませぬか、しようがないなあ。」といはれるので、一同も、不思議さうに眺め、成るほど、他所のとは、違つてゐます。都への土産話にしませう。」などいひあつた。上人は、なほ、ゆかしく思つて、物事を知つて居さうな、おとなしげの神官を呼んで、「この社の獅子の立て方は、定めて因縁があるのでせう。少し、承りたいものです。」と尋ねられると、神官は、「その事ですか、それは、腕白な子供達がした、不都合な悪戯で御座る。」と答へ、獅子のそばへ立寄り、それを向け直して、去つてしまつたので、上人の感涙も、無駄になつてしまつた。

出雲社参詣についての出来事を、即興的に書いたもので、軽妙なる滑稽趣味が、紙面に溢れてゐる。どの人物の様子も、誠に生々と寫されてゐるが、聖海上人の態度や感想が、前後、急轉激變するさまが、殊にうまく現はれ、恰も目に見えるやうである。

○柳箱 柳の枝で作つたもので、硯、短冊、鞆、冠などを載せる臺。○縦さま横さま 縦向、横向。○紙ひねり こより。○三條右大臣 誰だかよくわからぬ。○勘解由小路の家 行成の子孫で世尊寺家といひ、代々能書を以て聞ゆ。

○自讃 自分で自分をほめること。○させることなき

第二百三十七段

「柳箱に据うるものは、縦さま、横さま、ものによるべきにや。巻物などは、縦さまに置きて、木の間より、紙ひねりを通して結びつゝ、硯も縦さまに置きたる、筆ころばすよし。」と、三條右大臣殿、仰せられき。勘解由小路の家の、能書の人々は、かりにも、縦さまに置かるゝことなし。必ず横さまに据ゑられ侍りき。

「柳箱に物を据ゑるのには、縦向にするのと、横向にするのとは、物によるべきものであらう。巻物などは、縦向に置き、木の間から、こよりを通して結びつける。硯も縦向に置く方が、筆がころばないでよい。」と、三條右大臣殿が仰せられた。勘解由小路の家の能書の人々は、假りにも、縦向に置かれることなく、必ず、横向に据ゑられたのである。

故實趣味。

第二百三十八段

御隨身近友が自讃として、七個條書きとめたることあり。みな、馬藝させることなきことどもなり。そのため

大したことはない。○最勝光院、建春門院の御願で、承安年中に建てられた寺。

しを思ひて自讃の事、七つあり。

一、人あまたつれて、花見ありきしに、最勝光院の邊にて、男の、馬を走らしむるを見て、「今一度、馬をはするものならば、馬仆れて落つべし。しばし見たまへ。」とて、立ちとまりたるに、又、馬をはす。どいむる所にて、馬を引き仆して、乗る人、泥土の中にくろび入る。そのことばのあやまらざることを、人、みな感ず。

御隨身近友の自讃といつて、七箇條ほど書きのこしたことがある。皆、馬藝に關したことで、つまらぬものである。その例にならつて、自分にも、自讃をした事が七箇條ほどある。

一、或時、多數の人をつれて、花見に行つたことがあつたが、最勝光院のほとりて、或男が、馬を走らしめてゐるのを見て、「今一度、あの馬を走らせたら、馬が倒れて、あの男は落つるであらう。暫く見てゐたまへ。」といつて、立ちとまつてゐると、件の男が、また、馬を走らせ、止めようとする所で、馬をひき倒し、その男は、泥の中に轉び落ちた。そこで、自分の豫言がうまく中つたことを感心した。

を感心した。

一、當代、未だ、坊におはしまし、頃、萬里小路殿、御所なりしに、堀川大納言殿、伺候し給ひし御曹司へ、用ありて参りたりしに、論語の四五六の卷をくりひろげ給ひて、「たゞ今御所にて、『紫の朱うばふことをにくむ。』といふを御覽せさせたきことありて、御本を御覽すれども、御覽じ出されぬなり。』なほよく引き見よ。」と、仰せごとにて求むるなり。」と、仰せらるゝに、「九の卷のそここのほどに侍る。」と、申したりしかば、あなうれしとて、もてまゐらせ給ひき。かほどのことは、兒どもも、つねのことなれど、昔の人は、いさゝかのことをも、いみじく自讃したるなり。後鳥羽院の御歌に、「袖とたもとと、一首の中にあしかりなむや。」と、定家卿にたづね仰せられたるに、「秋の野の草のたもとか、花すゝき、ほに出てまねく袖とみゆらむ。」とはべれば、何事かさふらふ

○當代、後醍醐天皇。○坊春宮坊。○萬里小路殿、藤原宣房の邸宅。○堀川大納言殿、東宮大夫藤原師信。○御曹司、部屋。○御所、東宮御所。○紫の朱うばふこと、論語の陽貨篇に「惡紫之奪朱也。」とある。○そこ、このほど、どの邊。○後鳥羽院、第八十二代の天皇。承久の役により隱岐に遷され給ふ。○定家卿、藤原定家。俊成の子にして、歌人として名高し。新古今集、新勅撰集等の撰者たり。

◎秋の野の云々 古今集、秋歌上の部にある、在原棟梁の歌。◎本歌 本據になる歌。◎冥加 神佛の加護。◎九條相國伊通公 藤原伊通。◎款狀 官位をのぞむ訴訟を申す奏狀。

「と、申されたることも、時にあたりて、本歌を覺悟す。道の冥加なり、高運なり。」など、ことごとくしく記しおかれ侍るなり。九條相國伊通公の款狀にも、ことなる事なき題目をも書きのせて、自讀せられたり。

一、今上天皇陛下が、また、東宮でおいでなされた頃、萬里小路殿が、東宮御所であつた。或日堀川大納言殿が、伺候しておられる部屋へ、用事があつて参ると、堀川殿は、論語の四五六の巻を繰りひるげておられる所であつたが、自分を見て、「只今、東宮御所で、紫の朱をうばふことをにくむ。」といふ文を、御覽になりたいとがあつて、東宮が、自ら御本を御覽になつたけれども、どうも見つからぬので、「お前達、なほよく探して見よ。」と仰せられた。そこで、自分が、それを探してゐる所である。」と申されたので、自分は、「九の巻の、どの邊に御座います。」といつた所、堀川殿は、「やれうれしや。」といつて、それを、東宮の所へ持つて行かれた。これ位のことば、子供でも覺えてゐるとであるけれども、昔の人は、もつとつまらぬ事でも、よく自讀したものだ。後鳥羽院が御歌のとて、定家卿に、「袖と袂とを、一首の中に入れたら、悪いだらうか。」と御尋ねになつた際、定家は、「秋の野の草のたもとか、花すゝき、穗に出で

◎常在光院 京都の相國寺の末寺。◎在兼卿の草 菅原在兼の下書。◎行房 藏人頭左近衛中将藤原行房。◎陽唐の韻 韻の名。◎高名 功名。◎筆者 在兼。

まれく袖と見ゆらむ。」といふ古歌もありますから、差支はありません。」と申されたことも、定家自身に、「こんな際に、本歌を覺えて居たのは、この道の冥加で、運がよかつたのである。」と、仰山に書かれてゐる。又、九條相國伊通公の款狀にも、何でもない事柄を書きのせて、自讀してゐられる。

一、常在光院の撞鐘の銘は、在兼卿の草なり。行房朝臣清書して、鑄型にうつさせむとせしに、奉行の入道、かの草をとり出でて、見せ侍りしに、「花の外に夕をおくれば、聲百里に聞ゆ。」といふ句あり。「陽唐の韻と見ゆるに、百里、あやまりが。」と申したりしを、「此くぞ見せ奉りける。おのれが高名なり。」とて、筆者の許へいひやりたるに、「あやまり侍りけり。數行となほさるべし。」と返事はべりき。數行もいかなるべきにか。もし、數歩の意か、おぼつかなし。

一、常在光院の撞鐘の銘は、在兼卿が下書されたのを、行房朝臣が清書して、鑄型にうつせしと見た際、その事を奉行してゐる入道が、自分に、その銘の下書を出して見せたが、よく見ると、その中に、「花の外に夕をおくれば、聲百

◎三塔巡禮 近江國比叡山の東塔、西塔、横川の三塔を禮拜して廻ること。◎常行堂 法華の常行三昧を行ふ堂。◎佐理 藤原佐理。能書家。◎行成 藤原行成。能書家。◎ことごとく 勿體らしく。◎いぶせげなるを むさくろしいのを。

里に聞ゆ。」といふ句のあるのが目についた。そこで、自分は、「この銘は、陽唐の韻と見えるのに、百里といふ字を用ひてあるのは、韻が違ふであらう。」といふと、入道は、「あなたにお目にかけて、よいことをした。これで、私の手柄になりまする。」といつて、早速、銘の筆者在兼のところへ、この旨をいつてやると、在兼卿からは、「間違つてゐた、あの所を數行となほして下さい。」といふ返事があつた。併し、數行といふのも、どんなものであらう。ひよつとしたら、數歩といふ意味かも知れないが、どうも合點がゆかぬ。

一、人あまた伴ひて、三塔巡禮の事侍りしに、横川の常行堂の中、龍華院と書けるふるき額あり。「佐理、行成の間、うたがひありて、いまだ決せずと、申し傳へたり。」と、堂僧、ことごとくしく申し侍りしを、「行成ならば、裏書あるべし。佐理ならば、裏書あるべからず。」といひたりしに、裏は塵つもあり、蟲の巢にて、いぶせげなるを、よくはき拭ひて、おの／＼見侍りしに、行成の位署、名字、年號、さだかに見え侍りしかば、人みな興に入る。

◎位署 官位を書き記すこと。◎興に入る 感じた。

◎談義 佛法の講義。◎八災 愛、苦、喜、樂、尋、伺、出息、入息をいふ。◎所化 僧の弟子。◎つばね 聽聞するところ。

一、澤山の人をつれて、三塔巡禮をしたことがあつたが、横川の常行堂の中に、龍華院と書いた、古い額があつた。その堂僧が、勿體らしく、「この額の筆者は、佐理か行成かに違ひないけれども、まだ、どちらとも決定して居らぬと申し傳へてある。」といふので、自分は、「筆者が、若し、行成ならば裏書があるだらうし、佐理ならば裏書はない筈だ。」といつた。そこで、早速、その額を下し、裏面の塵や蟲の巢で、むさくろしいのを、よくはき拭うて見た所、行成の位官、名字、年號などが、明らかに見えたので、人々は大いに感心した。

一、那蘭陀寺にて、道眼ひじり談義せしに、八災といふことを忘れて、「誰かおぼえ給ふ。」といひしを、つばねのみな、おぼえざりしに、つばねの内より、これこれにやと、いひ出したれば、いみじく感じ侍りき。

一、那蘭陀寺で、道眼上人が談義をしてゐられたとき、八災といふことを忘れて、「誰か覚えて居ませんか。」と尋ねられたが、弟子共は、誰も、覚えてゐなかつた。そこで、自分は、聽聞の席から、「八災はこれ／＼でせう。」といひ出したので、一同が大いに感心した。

○賢助僧正、醍醐三寶院の住僧。○加持香水、後七日御修法の間に、三度香水を加持して、天子に灑ぎ奉る儀式。○陣、禁裏に於ける衛士の詰所。○僧都、賢助僧正と同道の人。○あなわびし、あゝ困つた。○それ求めておはせよ、では、あなた、一つ探して来て下さい。○やがて、すぐに。

○二月十五日、涅槃會のあ

一、賢助僧正にともなひて、加持香水を見侍りしに、未だはてぬほどに、僧正、かへりて侍りしに、陣の外まで、僧都見えす。法師どもをかへして、もとめさするに、「同じさまなる大衆、おほくて、え求めあはず。」といひて、いと久しく出てたりしを、「おなわびし、それ求めておはせよ。」といはれしに、かへり入りて、やがて具して出でぬ。

○一、賢助僧正に同伴して、加持香水の式を見に行つたことがあつたが、式がまだ終らない内に、僧正は歸途に就き、陣の外まで出られたけれども、同行の僧都の姿が見えなかつた。そこで、法師どもをやつて、僧都を求めさせた所、法師達は、大分久しく探した後で、「同じ様子をした人が澤山に居るので、僧都は見つかりませぬ。」といつて、空しく歸つて来た。僧正は、「困つたなあ。では、あなた、一つ探して来て下さい。」といはれるので、自分は、その場へ出かけ、すぐに、件の僧都を見つけ出して、つれて来た。

一、二月十五日、月あかき夜うち更けて、千本の寺にまうでて、

る日。○千本の寺、京都の釋迦堂。○にほひ、氣品。○便あし、工合が悪い。○御所さまの、御所方に仕へてゐる。○そゝる、むだなこと。○むげに、一向に。○色なき、色氣のない。○見おとし奉る、輕蔑する。○更にこそ心得侍られ、さつぱり合點が参りませぬ。○便よくば、都合がよかつたら。

後より入りて、ひとり、顔深くかくして、聽聞し侍りしに、優なる女の、姿、にほひ、人よりことなるが、わけ入りて、膝にゐかゝれば、にほひなどもうつるばかりなれば、便あしと思ひて、すり退きたるに、なほる寄りて同じさまなれば、立ちぬ。その後、ある御所さまのふる女房の、そゝるごといはれしついでに、「むげに、色なき人におはしけりと、見おとし奉ることなむありし。情なしと恨み奉る人なむある。」と、のたまひ出したるに、「更にこそ心得侍らね。」と申してやみぬ。かの聽聞の夜、御つぼねの内より、人の、御覽じ知りて、さぶらふ女房を作りたて、出し給ひて、「便よくば、ことばなどかけむものぞ。そのありさま、参りて申せ、興あらむ。」とて、はかり給ひけるとぞ。

○一、二月十五日、月影の明るい夜、大分更けてから、千本の釋迦堂へ参詣し、後の方からはいつて、人に見つからないやうに、顔を隠して、説教を聴い

て居ると、姿も氣品も拔群な美しい女が、人の中を推しわけて来て、自分の膝によりかゝり、香なども、自分に移るほどなので、これでは工合が悪いと思ひ、その場を退いて、他へ移ると、件の女は、やはり、自分について来て、同じやうなことをするので、自分は、とうとうその場を立ち去つてしまつた。その後、或御所へ奉公してゐる老女に會つたところ、その人が、雑談の序に、「あなたは、一向に、色氣のない人である」と輕蔑し、情知らずと恨んでゐる人があります。」といはれたので、自分は、「そんなことは、さつぱり合點が参りませぬ。」とつたなりで、とり合はなかつた。さて、後になつて、聞くところによると、千本の釋迦堂で聽聞の夜、自分が来てゐるのを、或高貴の女性が御局の内から御覽になつて、おそばつきの女房に姿をつくらせ、「若し、あはよくば、言葉をかけるのだよ。そして、兼好法師が、どんな態度に出るのか、かへつて話してくれ。さぞ面白からう。」といひ含めて、その席から出され、自分をなぶるつもりで、惡戯をなされたのであるといふことだ。

この段は、著者の自慢話を並べたものであるが、一寸見ると、著者が、兼れて、自慢を非難し、ひかへ目にすなほなるをよしとする持論と、撞着するやうに考へられるけれども、これは、冒頭にも、「御隨身近友が自讃とて、七箇條

○婁宿 天空二十八宿の一で、西方にある一宿。

○しのぶの浦 岩代の國信夫郡にある地名。人をしのぶにいひかけてある。○あまのみるめ 人の見る目にひかけてある。○くらぶ

第二百三十九段 八月十五日、九月十三日は婁宿なり。この宿、清明なるゆるに、月をもてあそぶに、良夜とす。

八月十五日と九月十三日は、婁宿にあたる日である。さて、この婁宿は、清明の宿であるから、この兩日の夜は、月を觀るに都合のよい夜である。

天文に關する考證問題。

第二百四十段 しのぶの浦の、あまのみるめも所せく、くらぶの山も、もる人しげからむに、わりなく通はむ心の色こそ、淺からず、あはれと思ふふしぶしの、忘れ難きことも多からめ。親、兄弟許して、ひたぶるに迎へするたらむ、いとまばゆかり



の山 山城の名所。○もろ人 山を守る人に、戀人のまばりを見る人といふ意をかけてある。○わりなく 無理に。○まばゆかりぬべし 恥かしからう。○世にありわぶる女 世を渡り兼ねてゐる女。○にぎはしき 富有なる。○つきて 心をひかれて。○さそふ水あらば 古今集にある小野小町の歌に「わびぬれば、身をうきくさの根を絶えて、さそふ水あらば、いなむとぞ思ふ。」とある。○中人 媒介者。○あいなさよ つま

ぬべし。世にありわぶる女の、にげなき老法師、あやしのあづま人なりとも、にぎはしきにつきて、さそふ水あらばなどいふを、中人、いづ方も、心にくきさまにいひなして、知られず、知らぬ人を迎へもて來たらむあいなさよ。何事をか、うちいづることのはにせむ。年月のつらさをも、分けこしは山のなども、あひ語らばむこそ、つきせぬことのはにてもあらめ。すべて、よその人の、とりまかなひたらむ、うたて、心つきなきこと多かるべし。よき女ならむにつけても、品くんだり、みにくも、年もたけなむ男は、かくあやしき身のために、あたら身をいたづらになさむやはと、人も心おとりせられ、我身は、むかひ居たらむも、影はづかしくおぼえなむ、いとこそあいなからめ。梅の花かうばしき夜の、おぼろ月にたいすみ、みかきが原の露わけ出でむ、有明の空も、わが身さまに、しのばるべくもながら

らないことよ。○しらぬし 西行法師の歌に「うとくなる人をなにとてうらむらむしらぬし」らぬをりもありしに。」とある。○分けこしは山の 二人で過ぎて來た戀路のつらい峠といふ意。○みかきが原 大和にある名所。○しのばるべくもなからむ人 女から思はれさうもないみにくい人。

む人は、たい、色このまざらむにはしかじ。

忍び通ふところも、人目にせかれて、思ふまゝにならず、暗い通路も、戀人のみばりをしてゐる人が多いので、通ひにくいのを、無理やりに通ふ情の深さを、うれしく思ふことは、忘れられないやうだ。親や兄弟が許して、無理におしつけて、女を娶らせるのは、寧ろ恥しいものであらう。世を渡りかれてゐる女が、似合はしくもない老法師とか、奇態な東國人とかいふのでもかまはず、たゞ、その人が金持であればよいといふ氣で「若し、招く人があつたら、行きたい。」といふ態度を見て、媒介者は、どちらにも、いゝやうにいひなし互に、知らない人同志、縁を結ばせるのは、つまらないことだ。かういふ間柄には、一緒になつても、語り合つて、樂しみにする話の種もないのであらう。二人が戀しあつて、一緒になるまで過ぎて來た、うき、つらさなどを語り合ふのは、いつまでたつても、情合がつきせぬものである。すべて、他人が周旋してくれた縁談などは、氣が進まぬことが多きものである。相手が美しい女であるとしても、こちらが下品で、年寄つた醜男であるといふ、こんなつまらぬ男のために、あの美しい身を任せるのか。」といふ感じがして、女の心も見劣りせられ、男自身も、その女に對して、自分の醜い容貌を恥かしく思ふだらう。さうしたら、張合もなくなつてしまふであらう。

梅の花の香が、かゝる夜、朧月の下にたゞすんで、女を待たせ、或は、みかきが原の草葉におく露を分け、有明の月影を踏んで、女の所を出るなどは、自分の身が、女に好かれるやうな人のすること、女に好かれないやうな人は、はじめから、色好みなどをしない方がよい。

この段は、男女の情趣を説いたもので、これによると、著者は、戀愛結婚論者のやうに見える。文章は、少し凝り過ぎて、難澁なところがある。

第二百四十一段

望月のまどかなることは、しばらくも住せず。

●望月十五夜の月。満月。  
●住せず。とゞまらぬ。  
●やがて。すぐに。  
●常住平生の念にならひて。物事はいつも變らず、同じやうな有様で居るものと思ひこんで。  
●生の中。この世に生存して行く中。  
●成す。成就する。  
●立ちなほりて。病氣が回復して。  
●われ

やがてかけぬ。心とやめぬ人は、一夜の中に、さまでかはるさまも見えぬにやあらむ。病のおもるも、住する隙なくして、死期すでに近し。されども、いまだ病急ならず、死に赴かざるほどは、常住平生の念にならひて、生の中に、おほくの事を成じて後、しづかに、道を修せむと思ふほどに、病をうけて、死門に望むとき所願一事も成せず、いふかひなくて、年月の懈怠を悔いて、この度、もし立ちなほりて、命を全くせば、夜を日に

にもあらず。わが身をも忘れて。  
●取りみだして。煩悶して。  
●はてぬ。死んでしまふ。  
●如幻。まぼろしのやうにはかない。  
●妄想。正しからぬ想念。  
●放下。してなげ棄て、しまつて。  
●所作。何をしなければならぬといふ強道觀念。

つぎて、このこと、かのこと、成じてむと、願を起すらめど、やがて重りぬれば、われにもあらず、取りみだしてはてぬ。このたぐひのみこそあらめ。この事、まづ、人々、いそぎ心えおくべし。所願を成じて後、いとまありて、道に向はむとせば、所願つくべからず。如幻の生の中に何事をかなさむ。すべて、所願みな妄想なり。所願、心に來らば、妄心迷亂すと知りて、一事をもなすべからず。直に、萬事を放下して、道に向ふ時、さはりなく、所作なくて、心身、長くしづかなり。

十五夜の月の圓いのも、暫くの間のこと、忽ち虧けてしまふ。注意をしない人の目には、一夜の中に、さうひどく、變るやうにも、見えぬであらうが、實は、絶えず變つてゐるのである。人の病氣が重くなるのも、亦、同様で、決して、同じやうな情態で居るものではなく、次第に重くなつて、死期はすぐに來るのである。併し、人は、病氣が、まだ重くないうちは、かういふ考でゐる。物事は何時も變らず、同じやうな有様で居るものときめ、み、生きてゐる中に、澤山の仕事を成就し、その上で、ゆつくり佛道を修行しようなどと思つてゐる。けれども、

さうは行かず、その中に病氣にかゝり、死といふ關門にのそまなければならぬことになり、今更のやうに驚いて、その所願の一つも成就せず、肺甲斐のないのに氣がつき、これまでの懈怠を後悔し、今度、若し、病氣が回復して、命をとりとめたら、夜を日について働き、この事も、あの事も必ず成就しよう。」といふ願を起すであらうが、若し、氣が重くなると、その身をも忘れ、煩悶して死んでしまふのである。世の中には、かういふ類例が多いのであるから、人々は、この事を先づ、第一に心得ておなければならぬ。又、所願を成就した後で、暇があつたら、佛道を修行しようなど思つても、人の所願は、無限に出て来るものゆゑ、それを悉く成就するといふことは、不可能である。この幻のやうな生涯の中に、果して、どれだけの事が出来よう。たかゞ知れたものである。それに、人の所願といふものは、すべて、妄想に過ぎないのである。所願が起つたら、妄想が、心を迷はし亂すものだと思ひ、その所願の一つでもなしてはならぬ。直ちに何事をも放抛して、佛道に向ふやうにしたら、何等の障害もなく、また、何をしなければならぬといふ、強迫觀念もなく、心も身も落着いて、安靜にして行かれるものである。

人間の欲望といふものを棄て、佛道に向ふがよいといふ例の持論を説いた

◎違順 順逆と同じ。違は心に逆ふこと。順は心に従ふこと。◎樂欲 好み願ふ。◎名 名譽。◎行跡 行を正しくして名譽を得ること。◎味 飲食の慾。◎顛倒の相 本性に背いた心。◎若干のわづらひあり 少からぬ煩悶が起る。

ものである。

第二百四十二段

とこしなへに、違順につかはるゝことは、偏に、苦樂のためなり。樂といふは、好み愛することなり。これを求むること、止む時なし。樂欲するところ、一には名なり。名に二種あり。行跡と才藝とのほまれなり。二には色欲、三には味なり。よろづのねがひ、この三にはしかず。これ顛倒の相よりおこりて、若干のわづらひあり。求めざらむにはしかじ。

人が順逆に支配せられて行くといふのは、ひとへに、苦を避け、樂を得んがためである。樂とは、自分が好み愛すること、人は、これを求むる心のやむ時がない。人が好み欲するもの、第一は名譽であるが、これには二種類がある。自分の行を正しうして得る名譽と、才藝によつて得らるゝ名譽とが、即ちそれである。人が好み欲するもの、第二は色慾で、第三は飲食の慾である。人間には、いろ／＼な欲望があるけれども、この三つが重なるものである。て、かやうな欲望は、凡夫の顛倒の心から起るもので、これがために、少からぬ煩悶が起るものであるから、これ等は、はじめから、求めない方がよい。

◎父、ト部兼顯。◎佛には人がなりたるなり、この佛は、釋迦をさしてゐる。  
 ◎え答へず、答ふることが出來ず。◎興じき、得意がつた。

前段と同じく、人は樂欲から離れるがよいといふ趣味を説いたものである。  
 第二百四十三段 八つになりし年、父に問ひていはく、「佛はいかなるものにか候ふらむ。」といふ。父がいはく、「佛には、人がなりたるなり。」と。又問ふ。「人は、何として、佛にはなり候ふやらむ。」と。父また、「佛のをしへによりてなるなり。」と答ふ。又問ふ。「教へ候ひける佛をば、何が教へ候ひける。」と。又答ふ。「それも又、さきの佛の教によりてなり給ふなり。」と。又問ふ。「その教へはじめ候ひける、第一の佛は、いかなる佛にか候ひける。」といふ時、父、「空よりや降りけむ、土よりや涌きけむ。」といひて笑ふ。「問ひつめられて、え答へずなり侍りつ。」と、もろ人に語りて興じき。

自分八歳になつた時、父に問うて、「佛といふものは、どんなものですか。」といふと、父は、「佛には、人間がなつたのだ。」と答へた。そこで、又「人間が、どうして、佛にはなりました。」と問ふた。父が又答へて「人間は、佛の教によつ

て、佛になるのだ。」といふ。又、問ひかへして、「人間に教へ給ふ佛をば、一體、何が教へたのですか。」と聞いた。父が又答へた。「それもまた、先の佛の教によつて、佛になられたのだ。」と。自分はなほも追及して、「その教へはじめられた最初の佛は、どんな佛でしたか。」といふと、父は、「その佛は、空から降つて來られたかも知れない。或は又、地から湧いて來られたのかも知れない。」といつて笑つた。そこで、自分は、子供心に、勝利を得た氣になり、「父上は、私に問ひつめられて、答が出來なくおなりなされた。」と、皆の者にいつて聞かせ、得意がつたのであつた。

著者は、明敏な觀察力、穩健な理性、俊秀な才氣を持つて居るが、この段で見ると、八歳位の子供の時分に、もう既に、その鋒鏑がよくあらはれて居たことがわかる。殊に、この頃、佛のことを聞いたといふのは、著者が將來佛道に身を委ねることの前兆とも見られて、面白い。なほ、文章も、簡勁で、生氣が溢れ、問答のさまが、目に見えるやうである。

新釋徒然草終